

# 吉田城址(VII)



2006年3月

豊橋市教育委員会

よし だ じょう し  
吉 田 城 址 (VII)

2006年3月

豊橋市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は、豊橋市八町通4丁目19番地他においてマンション建設に伴い事前に実施した吉田城址の発掘調査報告書である。調査期間は平成16年9月22日～10月29日で、調査面積は590m<sup>2</sup>である。吉田城址の発掘調査は、今回が21次となる。
2. 発掘調査については、丸美産業株式会社から委託を受けた豊橋市教育委員会が行い、小林久彦（教育部美術博物館）が担当した。
3. 発掘調査に際して、土地所有者や丸美産業株式会社をはじめ、地元の方々のご理解・ご協力を頂いた。また、資料調査及び本書の執筆に際して、出土遺物については藤澤良祐氏（愛知学院大学）にご教示を頂いた。鉄器のX線撮影並びに墨書き木札の赤外線撮影については（財）愛知県教育サービスセンター・愛知県埋蔵文化財センターのご協力を得た。さらに、その墨書き木札の読み下しには豊橋市二川宿本陣資料館学芸員の手を煩わせた。記して感謝の意を表す次第である。
4. 報告書の作成については、岩本佳子（豊橋市教育委員会嘱託員）・河合厚子・補永亨代・大谷孝世・安田明己・原田祥子の援助を受けた。写真撮影については、発掘調査・出土遺物は小林が行つたが、航空写真撮影は株式会社G I S中部に委託して行った。
5. 本書の執筆及び編集は小林が行つた。
6. 調査区に使用した座標は、国土交通省告示に定められた平面直角座標第Ⅷ系に準拠し、これを示した。本書に使用した方位はこの座標系に沿うものである。遺構・遺物のスケールについてはそれぞれに明示した。写真の縮尺は任意である。
7. 調査にあたって作成した写真・カラースライド・実測図等の記録や出土遺物は、豊橋市教育委員会において保管・管理している。

# 目 次

## 第1章 遺跡の立地と歴史的環境

1. 遺跡の立地 .....	1
2. 歴史的環境 .....	2

## 第2章 調査の目的と経過

1. 調査に至る経過 .....	4
2. 調査の経過と方法 .....	5

## 第3章 遺構

1. 溝 .....	6
2. 井戸 .....	11
3. 掘立柱建物 .....	13
4. 土壙 .....	16

## 第4章 遺物

1. 溝 .....	23
2. 井戸 .....	24
3. 掘立柱建物 .....	35
4. 土壙 .....	35
5. 表土他 .....	46

## 第5章 総括

1. 調査区の遺構変遷 .....	54
2. まとめにかえて .....	57

報告書抄録 .....

58

## 挿 図 目 次

第1図 吉田城址周辺地形図 (1/40,000) .....	1
第2図 吉田城址周辺の遺跡分布図 (1/25,000) .....	3
第3図 調査区位置図 (1/2,500) .....	4
第4図 調査区全体図 (1/150) .....	7
第5図 遺構実測図-1 (1/80) .....	12
第6図 遺構実測図-2 (1/80) .....	15
第7図 遺構実測図-3 (1/80・1/30) .....	17
第8図 出土遺物実測図-1 (1/3) .....	25
第9図 出土遺物実測図-2 (1/3・1/4) .....	27
第10図 出土遺物実測図-3 (1/3・1/4) .....	29
第11図 出土遺物実測図-4 (1/3・1/4) .....	31
第12図 出土遺物実測図-5 (1/3・1/4) .....	33
第13図 出土遺物実測図-6 (1/3・1/4・1/6) .....	34
第14図 出土遺物実測図-7 (1/3) .....	37
第15図 出土遺物実測図-8 (1/3・1/4) .....	39
第16図 出土遺物実測図-9 (1/3・1/6) .....	41
第17図 出土遺物実測図-10 (1/3) .....	43
第18図 出土遺物実測図-11 (1/3・1/4) .....	45
第19図 出土遺物実測図-12 (1/3・1/4・1/6) .....	47
第20図 調査区遺構変遷図 (1/300) .....	55

## 表 目 次

第1表 出土遺物観察表 .....	49
-------------------	----

## 写真図版目次

- |  |                                       |
|--|---------------------------------------|
| 1-1 調査前状況 - 1 (西から)                    | 2 調査前状況 - 2 (南東から)                    |
| 3 表土剥ぎ状況 (東から)                         |                                       |
| 2-1 調査区全景 (垂直)                         | 2 調査区全景 (南から)                         |
| 3-1 調査区東側全景 (西から)                      | 2 S B - 0 1 全景 (南から)                  |
| 4-1 S D - 0 4 · 0 7 全景 (北から)           | 2 S D - 0 4 · 0 7 全景 (南から)            |
| 3 S D - 1 5 · 1 6 · 1 7 全景 (北から)       | 4 S D - 1 5 · 1 6 · 1 7 全景 (南から)      |
| 5-1 S D - 0 8 全景 (西から)                 | 2 S D - 0 8 · S K - 38 全景 (西から)       |
| 3 S D - 0 9 · 1 1 全景 (西から)             | 4 S D - 0 9 · 1 1 全景 (東から)            |
| 6-1 A - 2 区 S E - 0 1 全景 (南から)         | 2 A - 2 区 S E - 0 1 断割り (東から)         |
| 3 C - 1 区 S E - 0 4 全景 (南西から)          | 4 C - 1 区 S E - 0 4 断割り (南西から)        |
| 5 B - 1 区 S E - 0 3 全景 (北から)           | 6 C - 2 区 S E - 0 5 全景 (北から)          |
| 7-1 B - 1 区 S E - 0 2 全景 (西から)         | 2 B - 1 区 S E - 0 2 断割り (南から)         |
| 3 C - 3 区 S E - 0 6 全景 (南西から)          | 4 C - 3 区 S E - 0 6 断割り (北から)         |
| 5 C - 1 区 東壁土層 (西から)                   | 6 A - 2 · 3 区 S K - 29 (北西から)         |
| 8-1 B - 3 区 S K - 81 (北から)             | 2 B - 3 区 S K - 62 (北から)              |
| 3 S B - 0 1 柱穴 B - 2 区 S K - 136 (北から) | 4 S B - 0 5 柱穴 B - 3 区 S K - 17 (南から) |
| 5 C - 3 区 S K - 103 遺物出土状況 (東から)       | 6 C - 3 区 S K - 103 · 112 (南東から)      |
| 7 C - 2 区 S K - 10 遺物出土状況 (北から)        | 8 D - 3 区 S K - 23 遺物出土状況 (南から)       |
| 9 出土遺物 - 1                             |                                       |
| 10 出土遺物 - 2                            |                                       |
| 11 出土遺物 - 3                            |                                       |
| 12 出土遺物 - 4                            |                                       |
| 13 出土遺物 - 5                            |                                       |
| 14 出土遺物 - 6                            |                                       |
| 15 出土遺物 - 7                            |                                       |
| 16 出土遺物 - 8                            |                                       |

# 第1章 遺跡の立地と歴史的環境

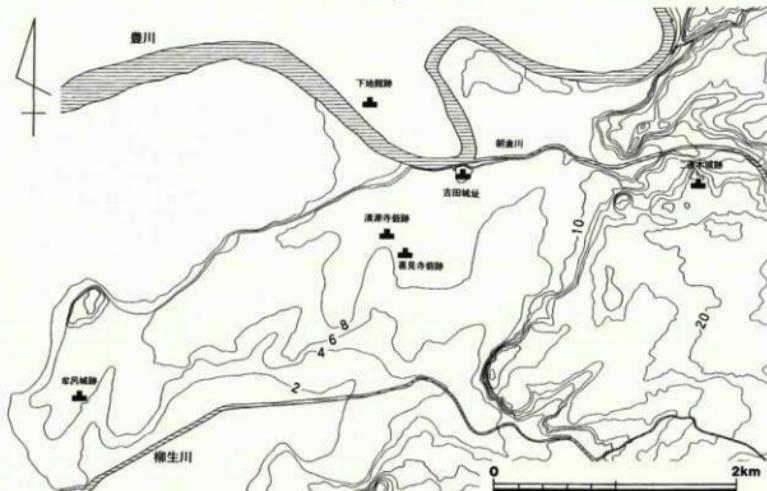
## 1. 遺跡の立地（第1図）

豊橋市域は、大きく見いくと東側が弓張山地に、南側が太平洋に、西側が三河湾に、北側が豊川にそれぞれ限られており、そのほぼ中心に吉田城址は位置していると言える。

東部の山地や北西部の沖積低地を除くと、市域の多くは豊川と旧天竜川によって形成された河岸段丘上にある。この河岸段丘は、高位面（天伯原面・標高30～60m）、中位面（高師原面～豊橋上位面・標高15～30m）、低位面（豊橋面・標高4～10m）の3面に分けることができ、吉田城址の立地する河岸段丘はこのうちの低位面である。この低位面は、他の段丘に比べて形成年代が新しいため浸食は進んでおらず比較的平坦であるが、その面の連続性からさらにⅠ～Ⅲ面の3面に分けられる。Ⅰ面は、吉田城址付近及び牟呂町坂津付近にあり、周囲より1～2m程高い小山状となる。Ⅱ面は標高4～8mで低位面の主要部となり、Ⅲ面は柳生川に沿って緩く傾く標高3～5mの部分である。

吉田城址は、周囲よりも僅かに高い標高10m前後の低位面Ⅰ～Ⅱ面上にあり、平城の立地を考えた場合、城下や交通路をはじめとして周囲を広く見渡すことのできる場所である。また、すぐ北側は、豊川・朝倉川に浸食された比高7～8mの段丘崖となり、城の背面が自然の防御として利用されている。また、洪水や水利・交通などを考えれば、城館以外に各時代において集落等を形成する上で最良の地であると言える。

**参考文献** 水野季彦 1987「遺跡の立地」「豊橋市埋蔵文化財発掘調査報告書第7集 水神古窯」豊橋市教育委員会  
水野季彦 1990「遺跡の立地」「豊橋市埋蔵文化財調査報告書第11集 見丁塚遺跡」豊橋市教育委員会



第1図 吉田城址周辺地形図（1/40,000）

## 2. 歴史的環境（第2図）

吉田城址は、豊橋市今橋町他に所在し、城館以外にも縄文時代晚期から近世・近代の遺構・遺物が確認されている複合遺跡である。この吉田城址が立地する河岸段丘の縁辺部や北側に広がる沖積低地には、縄文時代から近世にかけての遺跡が多く分布している。なお、南側に続く段丘上に遺跡はほとんど確認されていない。ここでは、周辺に広がる遺跡の概要について時代毎に述べていく。

### 縄文時代

縄文時代では、段丘上に形成された石塚貝塚(5)や自然堤防上に形成された五貫森貝塚(7)・大蚊里貝塚(8)等がある。石塚貝塚はハイガイを主体とした前期中葉の貝塚、五貫森貝塚や大蚊里貝塚はヤマトシジミを主体とした晩期の貝塚である。この他には、牛川町の眼鏡下池北遺跡や洗島遺跡(15)、おいほて遺跡などで早期や中期の土器が出土している。

### 弥生時代

吉田城址から北西に2.5km程の沖積低地には、中期から後期の掘立柱集落と考えられる瓜郷遺跡が見られる。また段丘上では、西側遺跡(14)や熊野遺跡(13)、西先原遺跡(17)、牛川町浪ノ上遺跡などがある。このうち西側遺跡では竪穴住居や環濠・方形周溝墓などが確認されており、比較的大きな中期から後期にかけての集落と考えられる。

### 古墳時代

古墳では段丘縁辺部に、東田古墳(20)や稲荷山古墳群等が見られる。東田古墳は、全長40mを測る中期の前方後円墳で、後円部からは鳥文鏡・大刀が、墳丘上からは円筒・形象埴輪がそれぞれ出土している。稲荷山古墳群は、方墳を主体とした初期群集墳と考えられている。

集落では、熊野遺跡で前期の竪穴住居、西側遺跡では中期の竪穴住居や後期の竪穴住居・掘立柱建物、東田遺跡(18)では後期の竪穴住居等がそれぞれ確認されている。なお、これまでの吉田城址の調査では、銅鏡・円筒埴輪等の遺物や後期の竪穴住居等が検出されているため、付近には古墳や集落の存在が想定され飽海遺跡(2)としている。また、沖積地上の下河原遺跡(11)や為河原郷遺跡(12)等では、当期以降の遺物が採集されており、集落の存在を推測させる。

### 古代

吉田城址17次調査地点で規格性の高い総柱建物や溝などが検出され、周辺調査区では灰釉陶器が比較的多く出土するなどしてあり、飽海遺跡(2)に古代官衙が存在する可能性が高い。

### 中世～近世

今回調査地周辺は、伊勢神宮領の飽海神戸・吉田御園があったとされるが、これに関連した遺構などは未だ発見されていない。但し、周辺の調査では、灰釉系陶器を作成する土壤や掘立柱建物が確認されている。また、西側遺跡で検出された幅6.5m、深さ最大2.8mの大溝には多量の灰釉系陶器碗などが廃棄されており、豪族居館の存在を推測させた。

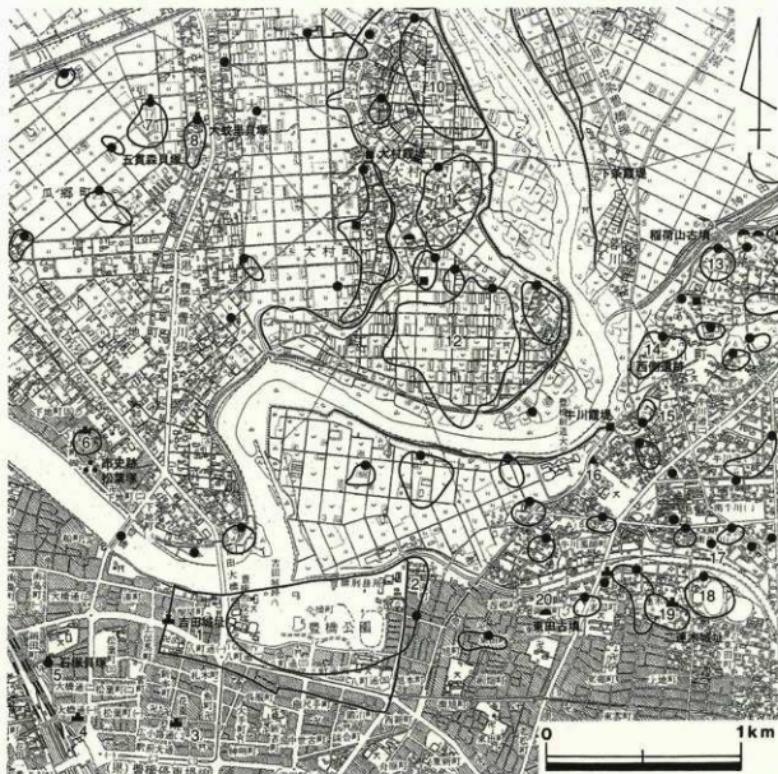
戦国期では、戸田氏の築いた二連木城址(19)、松平家康が吉田城攻めの際に築いたとされる喜見寺砦址(3)、清源寺砦址(4)等がある。このうち二連木城は、段丘の縁辺に築かれており、主郭付近に

は土塁・堀などが比較的残っている。

江戸時代には、吉田城以外では小規模な集落と考えられる西側遺跡や中郷遺跡等が見られる。また、東海道の宿場である吉田宿が吉田城に沿うようにして置かれた。更に江戸後期になると、吉田藩のお庭焼きとされる牛川焼窯址(16)が、城の北東1.5km程の段丘縁辺部に築かれる。なお、この窯址に隣接して吉田藩御用石灰窯も築かれ、石灰生産が行われていた。

#### 近代

明治時代以降には、吉田城内に旧日本陸軍歩兵第十八聯隊が設置されているが、この時点で吉田城は大きく改修を受け、特に二の丸の多くの土塁が壊され堀が埋められている。



- |          |           |         |          |          |
|----------|-----------|---------|----------|----------|
| 1 吉田城址   | 2 鮑海遺跡    | 3 喜見寺砦址 | 4 清源寺砦址  | 5 石塚貝塚   |
| 6 下地館址   | 7 五貫森貝塚   | 8 大蚊里貝塚 | 9 袋小路遺跡  | 10 上ノ烟遺跡 |
| 11 下河原遺跡 | 12 為河原郷遺跡 | 13 熊野遺跡 | 14 西側遺跡  | 15 洗島遺跡  |
| 16 牛川焼窯址 | 17 西先原遺跡  | 18 東田遺跡 | 19 二連木城址 | 20 東田古墳  |

第2図 吉田城址周辺の遺跡分布図 (1/25,000)

## 第2章 調査の目的と経過

### 1. 調査に至る経過（第3図）

吉田城址は、豊橋市教育委員会をはじめとして愛知県教育委員会や（財）愛知県埋蔵文化財センターによって、これまでに20次に及ぶ発掘調査が行われている。

今回行われた21次発掘調査は、平成16年7月12日付けで丸美産業株式会社から文化財保護法第57条の2（現第93条）に基づく埋蔵文化財発掘の届出が提出されたことに始まる。対象地にマンションを建設しようとするものであるが、ここは吉田藩士屋敷地に当たっていた（第3図－注1）。周辺のこれまでの調査状況を見ると、東側100mでは愛知県東三河事務所建て替えに伴う調査（8次）、南東80mでは集会所建設に伴う調査（14次）、北東120mでは豊橋公園便所建設に伴う調査（18次）などがあり、いずれも藩士屋敷地に当たる場所でそれぞれ大きな成果を得ている。

当教育委員会ではこうした周辺の状況を踏まえ、対象地での遺構は良好に遺存しているものと判断し、マンション建設予定地の590m<sup>2</sup>について発掘調査を実施することとした。



第3図 調査区位置図（1/2,500）

## 2. 調査の経過と方法

調査は、表土剥ぎ時の排土を外に搬出する以外は、全ての作業を調査区内で行うことができた。このため、一回の工程で表土剥ぎを済ませ、統いて座標に合わせた調査区設定を行い、順次調査に入った。調査地周辺は、標高9m程の比較的平坦な地形で、調査以前は平屋の日本家屋が建っていたため地下に及ぼす影響はほとんど無いと考えられていた。しかし、それ以前には明治以降の歩兵第十八聯隊に関連する建物があったようで、擾乱された箇所が部分的に存在した。

基本的な層序は、表土（盛土・造成土）や擾乱土が30~50cm程堆積し、その下が地山（黄褐色砂礫土～粘質土）となっているが、部分的に地山直上には黒灰色砂質土層・暗灰色砂質土層（=2層）の堆積が見られた。このため、基本的に地山面や2層上面までは重機で剥ぎ、その後の遺構検出や遺構の掘り下げは全て人力で行った。但し、井戸については崩落などの危険を伴うため、最終的に重機による掘り下げ・断ち割りを行っている。

以下、簡単に調査経過を記す。

- ・9月22日~28日、発掘位置の設定後、造成土・盛土などの表土剥ぎを重機によって行う。統いて、GIS中部による調査区の設定。また、調査区東側のD-2・3区から遺構の精査及び遺構の掘り下げを行っていく。

（9月29日、台風通過）

- ・9月30日~10月1日、排水後、調査区北側B-1区やC-1・2区の遺構精査・掘り下げを行う。C-1区では、灰釉系陶器を伴う井戸が確認された。

- ・10月2日~7日、降雨に悩まされながらもA-1区、B-1区など北側からC-2・3区に向かって調査を進めていく。屋敷地を区画していたと考えられる溝や屋敷に伴う井戸なども確認される。

（10月9日、2度目の台風通過）

- ・10月11日~15日、C・D-1~3区はほぼ掘り下げることができた。C-3区SK-103では常滑窯産甕をほぼ完全な状態で取り上げる。一方、B-2・3区では大型の土壙や多数の土壙が検出され、調査進行の遅れが懸念された。

- ・10月18日~22日、度重なる降雨に悩まされながらも、B-2区周辺の調査を進め、中世の井戸や掘立柱建物を確認する。

- ・10月23日~27日、A-2・3区の遺構掘り下げを終え、全体の掃除や部分写真の撮影などを行う。

- ・10月28日、ラジコンヘリによる航空測量、俯瞰写真等の撮影。

- ・10月29日、検出された井戸6基を重機で断ち割り、写真撮影や断面図作製を行い、本日をもって現地での調査を終了する。

注1 第3図は、(財)愛知県埋蔵文化財センター「1992『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第26集 吉田城遺跡』図版17を基に作製。」

## 第3章 遺構

21次調査区は、吉田城藩士屋敷地に位置し、近世を主体としているが、中世の遺構・遺物も検出されている。対象地はマンション建設予定地の590m<sup>2</sup>で、東西約30m、南北15~20m程の範囲で、平面形は「凸」状となる。調査区は、座標を基準に10mグリッドを設定している。西から東へA~D、北から南へ1~3として、その交点を区名（B-1区、D-3区など）とした。

基本層序は、盛土・造成土などの表土層の下が黄褐色砂礫土～粘質土（地山）で、部分的にはこの地山直上に黒灰色砂質土層・暗灰色砂質土層（=2層）が見られる。遺構には、溝（S D）、井戸（S E）、掘立柱建物（S B）、土壙（S K）がある。以下、各遺構毎に述べていくこととする。

### 1. 溝（第4図）

溝は、その可能性のあるものを含めて17条が確認されている。このうち、時期が推測できる溝は近代を除いて11条で、中世～戦国期が4条、残り6条はいずれも近世でその多くは後期である。

中世～戦国期の溝のうちS D-15とS D-17は、主軸を北から東へ17~18°程傾けたまま並行しており、溝の形状も類似していることから相互の関連性が推測される。

近世の溝では、主軸を北から東へ10~14°程傾け、東西方向では北から西へ81~89°程主軸を傾けている。これらの多くは、藩士屋敷地を区画する溝あるいは屋敷地内に配置された溝と考えられる。特にS D-11は、藩士屋敷図との重ね合わせ（第3図）から屋敷地を区画した道路の南側測溝である可能性が高い。

#### S D-01

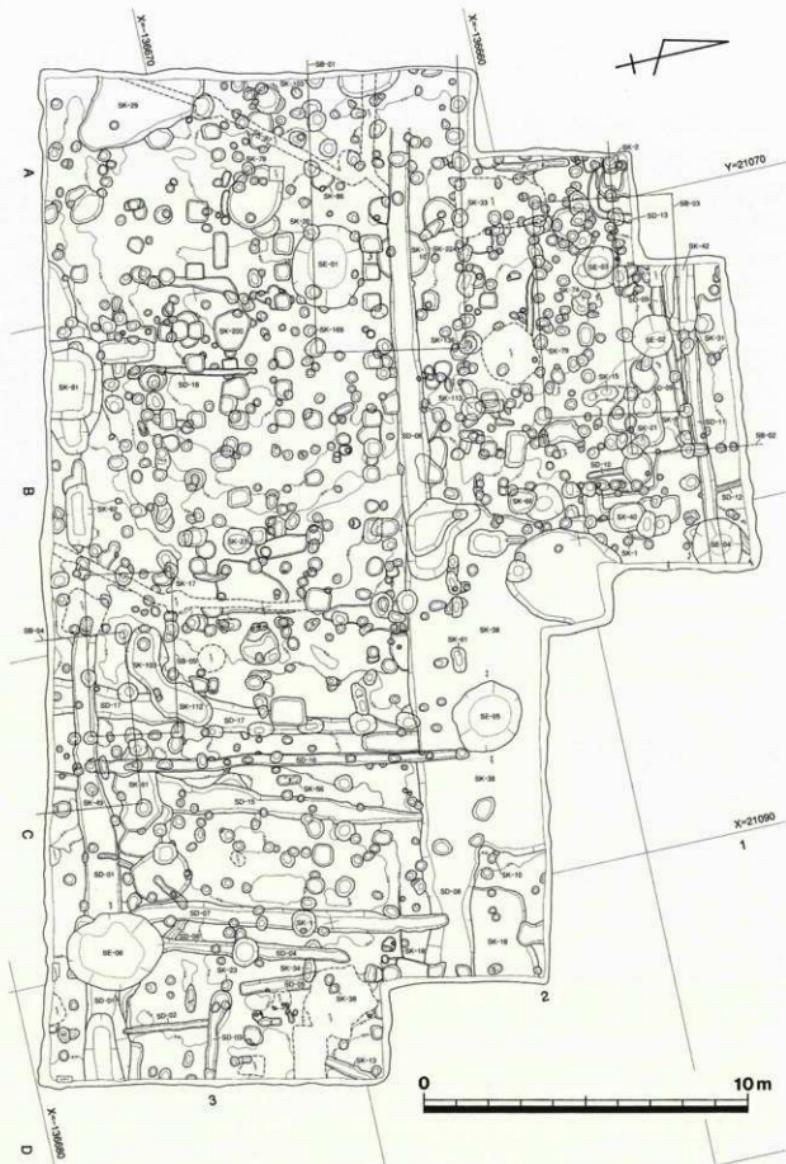
調査区南東隅のB~D-3区で検出されたもので、東西方向（N-81°-W）には直線的に延びており、S D-15やS D-17、S B-05を切っている。

規模は、幅最大1.1m、最小0.7m、平均1.0mで、長さは13.9mを測る。溝の断面は浅い「U」字状で、深さは10~15cm程となる。西端と東端との高低差は5cmで、西から東に向かって少しづつ低くなる。埋土は、暗灰色砂質土である。出土遺物には陶器碗・皿・擂鉢・壺・甕・磁器碗・皿、土師器熔・小皿、瓦、硯など（第8図1~21）があり、遺構は18世紀中葉～19世紀中葉であろう。

#### S D-02

調査区東端のD-3区で検出されたもので、南北方向には直線的に延びているが、溝ではなく細長い土壙となる可能性もある。両端は、S D-01やS D-03と接している。

規模は、幅が0.2m程と一定で、長さは27mを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは3cm程となる。北端と南端との高低差は4cmで、北から南に向かって少しづつ低くなる。埋土は、暗灰色砂質土である。遺物が出土していないため、遺構の時期ははつきりしない。



第4図 調査区全体図 (1/150)

**SD-03**

調査区東端のD-3区で検出されたもので、東西方向（N-72°-W）にはほぼ直線的に延びており、SD-02と接している。

規模は、幅が0.3~0.4m程と一定で、長さは2.8mを測る。溝の断面は浅い「U」字状で、深さは10cm程となる。東端と西端との高低差は6cmで、東から西に向かって少しづつ低くなる。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には陶器鉢・擂鉢、磁器碗、土師器鍋・小皿など（第8図22）があり、遺構は18世紀後半のものであろう。

**SD-04**

調査区東側のC-D-2・3区で検出されたもので、南北方向（N-17°-E）にはほぼ直線的に延びており、SD-06を切っている。

規模は、幅が0.4m前後と一定で、長さは5.8mを測る。溝の断面は浅い「U」字状で、深さは7~10cm程となる。北端と南端との高低差は5cmで、北から南に向かって少しづつ低くなる。埋土は、暗灰色砂質土である。遺物が出土していないため、遺構の時期ははつきりしない。

**SD-05**

調査区東側のD-3区で検出されたもので、南北方向にはほぼ直線的に延びているが、溝ではなく細長い土壤となる可能性もある。

規模は、幅が0.4m前後と一定で、長さは2.2mを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは3~4cm程となる。北端と南端との高低差はほとんどなく、溝底は平坦となる。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物は灰釉系陶器碗の破片1点のみで、遺構は12~14世紀のものであろう。

**SD-06**

調査区東側のC-3区で検出されたもので、北西方向から南東方向にはほぼ直線的に延びているが、細長い土壤となる可能性もある。両端は、SD-04やSD-07に切られている。

規模は、幅が0.3m前後と一定で、長さは0.7mを測る。溝の断面は浅い「U」字状で、深さは10cm程となる。北西端と南東端との高低差はほとんどなく、溝底は平坦である。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物は陶器灰釉丸碗の破片1点のみで、遺構は17~18世紀のものであろう。

**SD-07**

調査区東側のC-D-2・3区で検出されたもので、南北方向（N-14°-E）にはほぼ直線的に延びており、SD-08を切っている。

規模は、幅が0.6~0.7m程と一定で、長さは9.8mを測る。溝の断面は浅い「U」字状で、深さは10~15cm程となる。北端と南端との高低差は3cmで、北から南に向かって僅かに低くなる。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗、陶器碗・皿・鉢、磁器碗、土師器鍋・小皿、瓦片など（第8図23・24）がある。遺構は17世紀~18世紀前半のものであろう。

### SD-08

調査区ほぼ中央のA-D-2区で検出されたもので、東西方向（N-81°-W）にほぼ直線的に延びており、SD-07に切られ、SD-15を切っている。

規模は、B-C-2区SK-38の西側では幅0.8m前後と一定であるが、東側では幅が1.2~1.8mと一定しない。長さは26.3mを測る。溝の断面は底が広く平坦となるもので、深さは20~30cm程となる。西端と東端との高低差は17cmで、西から東に向かって僅かに低くなる。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗、陶器碗・皿・擂鉢、青磁碗、瓦質土器、土師器鍋・小皿など（第8図25~30）があり、遺構は16世紀末~17世紀初頭のものであろう。

### SD-09

調査区北端のB-1区で検出されたもので、東西方向（N-89°-W）にほぼ直線的に延びており、SB-03を壊し、SE-02に壊されている。

規模は、幅が0.3m前後と一定で、長さは4.6mを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは8cm程となる。西端と東端との高低差は4cmで、西から東に向かって少しづつ低くなる。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗片、陶器碗、土師器鍋などが僅かで、遺構は18世紀代のものであろう。

### SD-10

調査区北側中央のB-1区で検出されたもので、南北方向にほぼ直線的に延びているが、溝ではなく細長い土壤となる可能性もある。

規模は、幅が0.2m前後と一定で、長さは1.2mを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは5cm程となる。北端と南端との高低差はほとんどなく、溝底は平坦である。埋土は、暗灰色砂質土である。遺物は出土しておらず、遺構の時期ははっきりしない。

### SD-11

調査区北端のB-C-1区で検出されたもので、東西方向（N-85°-W）にほぼ直線的に延びている。2層（暗灰色砂質土）を掘り込み、SE-04を切っている。

規模は、幅が0.4m前後と一定で、長さは7.3mを測る。溝の断面は浅い「U」字状で、深さは10cm程となる。東端と西端との高低差はほとんどなく、溝底は平坦である。埋土は、砂質の強い暗灰色砂質土である。出土した遺物には陶器蓋・鉢・擂鉢、磁器碗、土師器鍋、瓦片など（第8図31~33）があり、遺構は19世紀前半のものであろう。

### SD-12

調査区北端のB-1区で検出されたもので、南北方向にほぼ直線的に延びているが、溝ではなく細長い土壤となる可能性もある。SD-11と接しているが、前後関係ははっきりしない。

規模は、幅が0.2m程と一定で、長さは1.4mを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは3~4cm程となる。北端と南端との高低差はほとんどなく、溝底は平坦である。埋土は、暗灰色砂質土である。遺物は出土しておらず、遺構の時期ははっきりしない。

#### SD-1 3

調査区北西隅のA・B-1区で検出されたもので、「L」字状に折れ曲がって延びている。SB-02の柱穴を掘り込んでいる。

規模は、幅が0.3m前後と一定で、長さは2.6mを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは5cm程となり、溝底の高低差はほとんどなく平坦である。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物は土師器鍋片のみで、遺構の時期は19世紀前半以降であろう。

#### SD-1 5

調査区やや東寄りのC-2・3区で検出されたもので、南北方向(N-18°-E)にほぼ直線的に延びており、SD-01やSD-08、SD-16に切られている。

規模は、幅最大1.1m、最小0.3m、平均0.7mで、長さは11.4mを測る。溝の断面は浅い「U」字状～皿状で、深さは10~15cm程となる。溝底は中央付近が最も高く、両端に向かって3~8cm程それぞれ低くなる。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・鉢・壺、土師器鍋など(第8図34~36)があり、遺構は13世紀後半のものであろう。

#### SD-1 6

調査区やや東寄りのC-2・3区で検出されたもので、南北方向(N-10°-E)にほぼ直線的に延びており、B・C-2区SK-38に切られ、SD-15を切っている。

規模は、幅が0.3~0.4m程と一定で、長さは11.1mを測る。溝の断面はやや深い「U」字状で、深さは20~30cm程となる。南端と北端との高低差は13cmで、南から北に向かって少しづつ低くなる。埋土は、地山土混じりの灰色砂質土である。出土した遺物には陶器壺、磁器碗、土師器鍋・小皿、瓦片などがあり、遺構は18世紀代のものであろう。なお、溝内には、比較的等間隔で並ぶ柱穴状の土塊があることから、溝は布堀状に掘られ目隠し塀のような構造物が造られた可能性が考えられる。

#### SD-1 7

調査区やや東寄りのC-2・3区で検出されたもので、南北方向(N-17°-E)にほぼ直線的に延びており、SD-01やSB-04に壊されている。

規模は、幅最大1.1m、最小0.5m、平均0.9mで、長さは11.2mを測る。溝の断面は浅い「U」字状で、深さは8~12cm程となる。南端と北端との高低差は6cmで、南から北に向かって少しづつ低くなる。埋土は、灰色砂質土である。出土遺物は灰釉系陶器碗・壺、陶器碗・擂鉢、青磁碗、土師器鍋など(第8図37)であるが、遺物の主体は灰釉系陶器であることから遺構は13世紀後半であろう。

### SD-18

調査区やや西寄りのB-2・3区で検出されたもので、南北方向にはほぼ直線的に延びているが、溝ではなく細長い土塙となる可能性もある。

規模は、幅が0.2~0.3m程と一定で、長さは4.0mを測る。溝の断面は浅い皿状で、深さは4cm前後となる。北端と南端との高低差は8cmで、北から南に向かって少しづつ低くなる。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物は磁器小碗片のみで、遺構は近代であろう。

## 2. 井戸 (第4・5図)

590m<sup>2</sup>という調査面積の中で、6基もの井戸が確認されている。いずれも素掘り井戸で、上屋構造はSE-03に伴う可能性が推測される。6基のうち3基が古代末~中世、残りの3基は近世で藩士屋敷に伴うものと考えられる。また4基の井戸では、標高5.2~5.7mの範囲で井戸底が確認できており、当時の地下水位は比較的高かったと推測される。

### A-2区SE-01

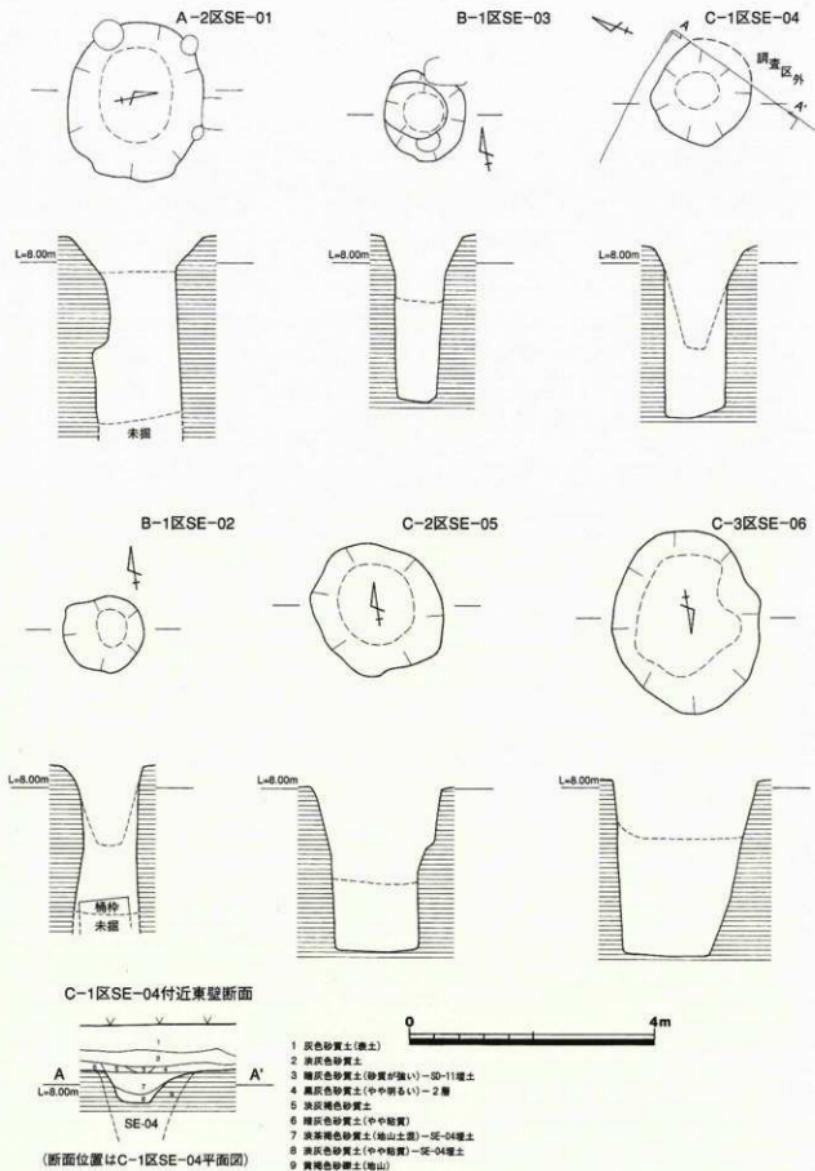
調査区西側のA-2区とB-2区の境で検出された井戸で、SB-01は井戸廃棄後に建てられている。検出時の平面形は梢円形で、規模は2.6m×2.2m程である。深さ0.5m程までは擂鉢状に窄まり、そこから先は重機で断ち割ったが径1.2m程の筒状ではほぼ垂直に掘られていることが確認された。検出面から約3.1m掘り下げてみたが、底までは達していない。埋土は、上部は明灰色砂質土で、下がるに従って暗く粘土質となる。出土した遺物には、灰釉系陶器碗・小皿・甕、土師器碗・小皿、木製品など（第9図38~48）があり、遺構は13世紀中葉のものであろう。

### B-1区SE-02

調査区北端のB-1区で検出された井戸で、SD-09を壊している。検出時の平面形は円形で、規模は径1.3m程である。手掘りで深さ1.3m程まで掘り下げ、その下は重機で断ち割ったが、径1.0m程の筒状ではほぼ垂直に掘られている。検出面から2.1m程のところでは、井戸枠への転用と考えられる桶が見つかった。この桶は、長さ68.5cm程、幅8~13cm、厚さ1.5~2.0cmの板材が18枚が使用され、竹釘で側面を留め外側の上下を竹で締めたタガの痕が確認された。復元される桶の径は58cm程であるが、底板は見つかっておらず、井戸に入る時点では既にはずされた可能性が高い。さらに、桶を取り上げて40cm程掘り下げたが、井戸底は確認できていない。埋土は、上部は暗灰色砂質土で、下がるに従って粘土質となる。出土した遺物には、陶器碗・鉢・急須・擂鉢、磁器碗、煙管、軒瓦、木製品など（第9図49~69）があり、遺構は19世紀前半のものであろう。

### B-1区SE-03

調査区北西隅のB-1区で検出された井戸で、SB-02は井戸廃棄後に建てられる。検出時の平面形は円形で、規模は径1.3m程である。深さ0.5m程までは擂鉢状に窄まり、それから下は径0.7~0.8



第5図 遺構実測図-1 (1 / 80)

m程の筒状ではば垂直に掘られ、検出面から約2.7m掘り下げた部分で底を確認した。埋土は、上部は暗茶褐色砂質土で、下がるに従って灰色が強く粘土質となる。出土した遺物には、灰釉系陶器碗・小皿・壺、土師器鍋・小皿、木製品など（第10図70～78）があり、遺構は13世紀中葉のものであろう。

#### C-1区SE-04

調査区北端のC-1区で検出された井戸で、SD-11は井戸廃棄後に掘られている。検出時の平面形は円形で、規模は径1.5m程である。深さ0.4m程までは擂鉢状に窄まり、それから下は径1.0m程の筒状ではば垂直に掘られ、検出面から約2.8m掘り下げた部分で底を確認した。埋土は、上部は地山土混じりの淡茶褐色砂質土や淡灰色砂質土で、下がるに従って灰色が強く粘土質となる。出土した遺物には、灰釉系陶器碗・小碗・片口鉢、土師器鍋、木製品、多数の炉壁など（第10図79～90）があり、遺構は12世紀中葉～後半のものであろう。

#### C-2区SE-05

調査区北東隅のC-2区で検出された井戸で、C-2区SK-38を壊している。検出時の平面形は円形で、規模は径2.0～2.3m程である。手掘りで深さ1.5m程までは掘り下げ、これから下は重機で断ち割った。径1.3～1.5mの筒状に掘られており、検出面から約2.7m掘り下げた部分で底を確認した。底径は1.3～1.4m程と推測される。埋土は、上部は暗灰色砂質土で、下がるに従って粘土質となる。遺物には陶器碗・皿・擂鉢・急須・壺、磁器碗・皿、土師器焼塩壺・軒瓦、木製品など（第10～12図91～145）があるが、その多くは井戸の上部から出土しており、廃棄土壤となった可能性が高い。遺物は17世紀～19世紀前半までのものを含んでおり、井戸が廃棄された時期は19世紀前半であろう。

#### C-3区SE-06

調査区南東隅のC-3区とD-3区の境で検出された井戸で、SD-07を壊しているが、SD-01との前後関係ははっきりしない。平面形は椭円形で、規模は長径3.0m×短径2.5m、手掘りで深さ1.1m程までは掘り下げ、これから下は重機で断ち割った。径2.2～1.5mの筒状に掘られており、検出面から約2.9m掘り下げた部分で底を確認した。底径は1.4m程と推測される。埋土は、上部は暗灰色砂質土で、下がるに従って粘土質となる。遺物には、陶器碗・皿・壺・擂鉢・壺、磁器碗・皿、土師器鍋・小皿・焼塩壺・軒瓦、硯・砥石など（第12・13図146～190）があるが、その多くは井戸の上部から出土しており、廃棄土壤となった可能性が高い。遺物は17世紀～19世紀中葉までのものを含んでおり、井戸が廃棄された時期は19世紀前半～中葉であろう。

### 3. 掘立柱建物（第4・6・7図）

掘立柱建物は、5棟が確認されているが、いずれも主軸方位を北から東へ10° 前後傾けている。また、柱穴状の土壤が多数検出されており、これ以外にも建物が存在する可能性は高い。なお、A-B-1・2区あたりに一辺50～70cm、深さ10～20cmで底面が比較的平坦な方形土壤が多く見られる。

これらの土壤は、埋土が灰色砂質土で拳大の礫が多数入っており、明治期以降の歩兵十八聯隊関連の建物基礎と考えられる。

#### S B - 0 1

調査区西端中央のA・B - 2 区で検出された5間以上×2間の掘立柱建物で、S E - 0 1を壊している。主軸方位はN - 11° - Eである。規模は桁行8.3m以上、梁間4.6mをそれぞれ測り、柱間は桁行で約1.8m、梁間で約2.3mとなり、桁行と梁間では大きな差がある。

柱穴は、径50cm前後と比較的一定である。深さは50~60cm程度が平均で、一部浅いものでは約30cmを測る。埋土は、暗灰色砂質土が主体で、一部には地山土混じりの灰色砂質土も見られる。柱穴からは灰釉系陶器碗・小皿、陶器碗・甕、土師器ぐの字形鍋・半球形鍋・小皿など（第14図204・205）の破片が出土しており、建物の時期は16世紀代と推測される。

#### S B - 0 2

調査区北西端のA・B - 1 区で検出された5間以上×2間以上の掘立柱建物で、S B - 0 3 や S D - 1 1などと重複している。主軸方位はN - 8° - Eである。規模は桁行9.1m以上、梁間3.2m以上をそれぞれ測り、柱間は桁行・梁間共に約1.8mで比較的一定している。

柱穴は、径40~60cm程で、深さは30~40cm程度が平均である。埋土は、暗灰色砂質土が主体で、一部には地山土混じりの淡灰色砂質土も見られる。柱穴からは陶器碗・皿・急須、磁器碗・小瓶、土師器半球形鍋など（第14図191~195）の破片が出土しており、建物の時期は19世紀前半と推測される。

#### S B - 0 3

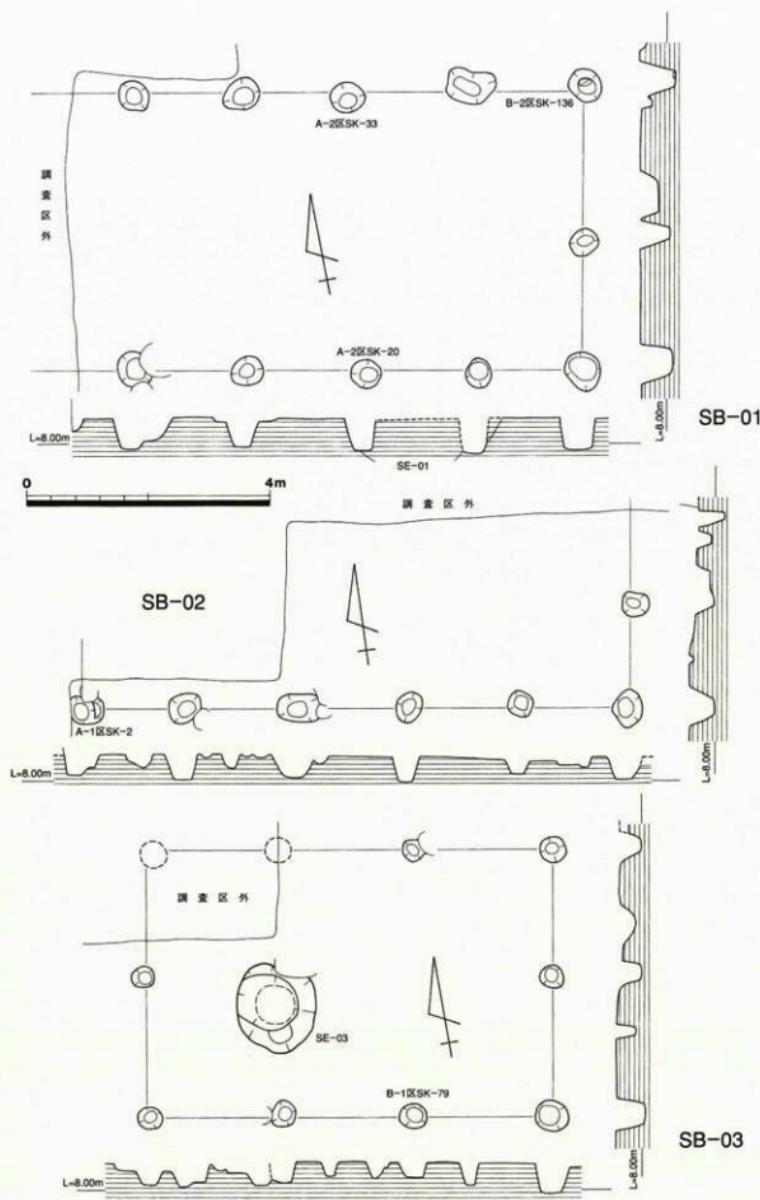
調査区北西のA・B - 1・2 区で検出された3間×2間の掘立柱建物で、S B - 0 2 や S D - 0 9などと重複している。主軸方位はN - 10° - Eである。規模は桁行6.7m、梁間2.2mをそれぞれ測り、柱間は桁行・梁間共に約2.2mで比較的一定している。

柱穴は、径40~50cm程と比較的一定であるが、深さは25~45cm程でややばらつきが見られる。埋土は、暗灰色砂質土が主体で、一部には灰色砂質土や暗茶褐色砂質土も見られる。柱穴からは灰釉系陶器碗・青磁碗、土師器鍋、土錘など（第15図241）の破片が出土しており、建物の時期は13世紀中葉と推測される。B - 1 区 S E - 0 3 を囲む位置にあり、これに伴う上屋であった可能性も推測される。

#### S B - 0 4

調査区南側中央のB・C - 3 区で検出された3間×1間以上の掘立柱建物で、S D - 1 7を壊している。主軸方位はN - 6° - Eである。規模は桁行5.4m、梁間2.7m以上をそれぞれ測り、柱間は一部で約2.4mを測る部分があるが、これ以外は約1.8mと比較的一定している。

柱穴は、径50~60cm程と比較的一定であるが、深さは20~45cm程でばらつきが見られる。埋土は、暗灰色砂質土または灰色砂質土で一部に暗茶褐色砂質土も見られる。柱穴からは陶器擂鉢・甕、磁器、土師器小皿、瓦などの小破片が出土しているだけで、建物の時期は18世紀代と推測される。



第6図 遺構実測図-2 (1/80)

**S B - 0 5**

調査区南側中央のB・C - 3 区で検出された3間×2間の掘立柱建物で、S D - 0 1 に切られてい る。主軸方位はN - 9° - Eである。規模は桁行5.1m、梁間2.7mをそれぞれ測り、柱間は1.4~1.8m でばらつきが目立つ。

柱穴は、径40~50cm程で比較的一定であるが、深さは20~45cm程でばらつきがある。また、長さ15 cm程の根石を伴う柱穴も確認された。埋土は、暗灰色砂質土または灰色砂質土で一部に黒灰色砂質土も見られる。柱穴からは灰釉系陶器碗・甕、土師器など（第17図271）の破片が出土しており、建物の時期は13世紀中葉と推測される。

**4. 土壙（第4・7図）**

溝・井戸・掘立柱建物の柱穴以外の遺構を土壙としているが、ここでは遺物が出土しているものを中心記すことにする。

**A - 2 区 S K - 10**

B - 2 区との境で検出されたもので、平面形は梢円形で、中央部分はS D - 0 8 によって壊されて いる。規模は長径1.6m×短径1.4m、底面は比較的平坦で深さは15~20cm程を測る。埋土は、暗灰色 砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・甕、土師器伊勢型鍋など（第14図196・197）があり、 遺構は13世紀後半のものであろう。

**A - 2 区 S K - 78**

平面形は円形で、規模は径0.3~0.35m、深さ56cm程を測る柱穴状の土壙である。埋土は、灰色砂質 土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗（第14図198・199）があり、遺構は13世紀中葉であろう。

**A - 2 区 S K - 86**

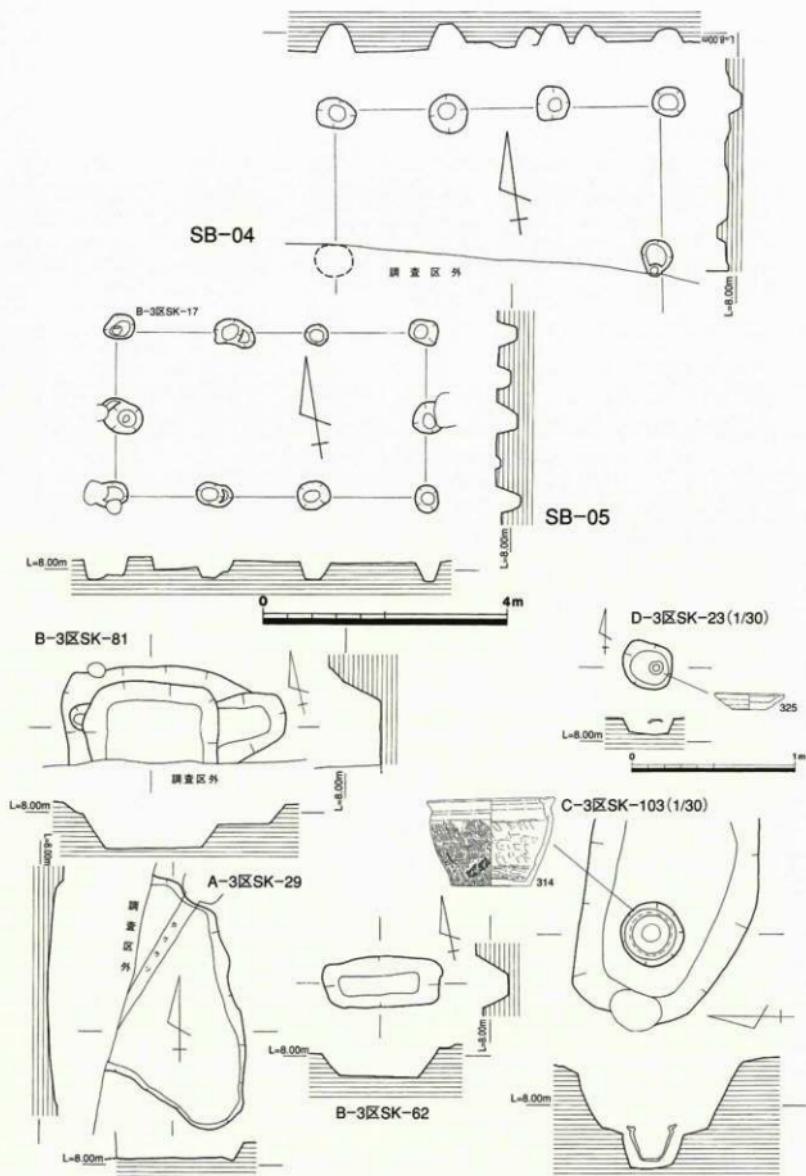
平面形は円形で、一部はS B - 0 1 の柱穴や近代の攪乱によって壊されている。規模は径0.7m、 底面は比較的平坦で深さは5 cm程を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶 器碗や土師器片など（第14図200・201）があり、遺構は13世紀中葉のものであろう。

**A - 2 区 S K - 97**

平面形は円形で、上部は近代の攪乱によって壊されている。規模は径0.4~0.45m、深さ35cm程を測 る柱穴状の土壙である。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物は灰釉陶器碗（第14図202）の みで、遺構は10世紀代のものであろう。

**A - 2 区 S K - 103**

平面形はやや不整な円形で、規模は径0.3~0.4m、深さ5 cm程を測る比較的浅い土壙である。埋土は、



第7図 遺構実測図-3 (1/80・1/30)

暗灰色砂質土である。1個体分の灰釉系陶器碗（第14図203）が伏せた状態で出土しており、造構は13世紀後半のものであろう。

#### A-3区SK-29

A-2区との境で検出されたもので、平面形は不整な楕円形と推測されるが一部は調査区外となりはっきりしない。規模は長径4.3m以上×短径2.3m以上、底面は中央付近がやや深くなるが比較的平坦で深さは14~24cm程を測る。埋土は、灰色砂質土である。陶器碗・皿・徳利・擂鉢・鍋・磁器碗・皿、土師器培塿・土人形・瓦片など（第14・15図206~225）多数の遺物が出土しており、廃棄土壌と考えられる。造構は19世紀前半のものであろう。

#### B-1区SK-8

平面形は円形で、上部はSD-09によって壊されている。規模は径0.4~0.45m、深さ44cm程を測る柱穴状の土壌である。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・小皿・土師器鍋片など（第15図226~228）があり、造構は13世紀後半のものであろう。

#### B-1区SK-15

平面形は楕円形で、南側には別の柱穴状の土壌が重なっている。規模は長径0.75m×短径0.45m、深さ61cm程を測る柱穴状の土壌である。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には陶器皿・擂鉢・土師器小皿・鍋など（第15図229~232）があり、造構は17世紀前葉のものであろう。

#### B-1区SK-21

平面形は円形で、南側には別の柱穴状の土壌が重なっている。規模は径0.4~0.45m、深さ40cm程を測る柱穴状の土壌である。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には陶器折縁鉢・土師器小皿・半球形鍋など（第15図233・234）があり、造構は17世紀前葉のものであろう。

#### B-1区SK-31

平面形は不整な楕円形と推測されるが、多くが調査区外となりはっきりしない。またB-1区SK-42に壊されている。規模は東西2.0m×南北0.8m以上、底面は深さ10cm程の比較的平坦で、南側付近は一段深くなり15cm程を測る。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・陶器皿・土師器片など（第15図235）があり、造構は16世紀末葉のものであろう。

#### B-1区SK-40

C-1区との境で検出されたもので、平面形は隅丸の長方形となる。規模は長さ1.15m×幅0.9m、底面は比較的広く平坦で深さは28cm程を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には陶器碗・甕・磁器碗・土師器小皿など（第15図236~238）があり、造構は18世紀代のものであろう。

**B-1区SK-74**

平面形はやや不整な円形で、西側には小土壙が重なっている。規模は径0.5~0.55m、深さ42cm程を測る柱穴状の土壙である。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗、土師器小皿・筒状土製品など（第15図239・240）があり、遺構は17~18世紀のものであろう。

**B-1区SK-42**

平面形は溝状に細長くなると推測されるが、一方が調査区外となるためはっきりしない。SD-1やB-1区SK-31を壊している。規模は長さ2.0m以上×幅1.0m、底面は比較的平坦で深さは30cm程、南側にはテラス状の段があり深さ20cm程を測る。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物には陶器皿・鉢・擂鉢・土瓶・蚊遣り、磁器碗・皿・壺など（第15・16図242~251）があり、遺構は19世紀中葉のものであろう。

**B-2区SK-113**

平面形は円形で、周囲にはいくつかの土壙が重なっている。規模は径0.7~0.75m、深さ70cm程を測る柱穴状の土壙である。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗片、土師器鍋、加工円盤（陶器擂鉢）など（第16図252）があり、遺構は16~17世紀のものであろう。

**B-2区SK-224**

平面形は円形で、北側に小土壙が重なっている。規模は径0.45m、深さ35cm程を測る柱穴状の土壙である。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗片、土師器鍋片、加工円盤（土師器小皿）など（第16図253）であるがいずれも小片となる。遺構は13世紀代の可能性が高い。

**B-C-2区SK-38**

平面形は長方形を呈すると推測されるが、北辺が調査区外となるためはっきりしない。SD-08とは南辺で揃い深さもほぼ同じであることから、何らかの関連性が考えられる。また、C-2区SE-05には壊されている。規模は、長さ10.5m×幅4.0m以上、底面は比較的広く平坦で、深さは15~20cm程を測り、南側に向かって僅かに低くなっている。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・甕、陶器碗・皿・擂鉢、磁器碗・皿・軒瓦など（第16図254~262）がある。このうち混入した遺物を除けば、遺構は16世紀末~17世紀初頭のものと推測される。

**B-2区SK-66**

平面形はやや不整な円形で、規模は径0.8~0.9m、底面は比較的平坦で深さ8cm程を測る。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物には陶器皿・甕、磁器碗・皿、瓦片など（第17図263・264）があり、遺構は17~18世紀のものであろう。

**B-2区SK-169**

平面形は円形で、規模は径0.35~0.4m、深さ37cm程を測る柱穴状の土壙である。埋土は、地山上混じりの暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗（第17図265）があり、遺構は13世紀代のものであろう。

**B-2区SK-200**

平面形はやや不整な楕円形で、規模は長径1.35m×短径1.1m、底面は比較的平坦で深さ7cm程を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗や土師器伊勢型鍋片（第17図266）があり、遺構は13世紀後半のものであろう。

**B-3区SK-62**

平面形は細長い長方形で、規模は長さ2.0m×幅0.8m、底面はやや狭いが平坦で深さ55cm程を測る。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物には陶器皿・鉢・磁器碗・皿、瓦片など（第17図267~269）があり、遺構は19世紀中葉のものであろう。

**B-3区SK-23**

平面形は円形で、規模は径0.8~0.9m、底面は比較的平坦で深さ30cm程を測る。埋土は、灰色砂質土である。出土遺物には土師器小皿・鍋片（第17図270）があり、遺構は12世紀代のものであろう。

**B-3区SK-81**

平面形は方形あるいは長方形になると推測されるが、南辺は調査区外となるためはっきりしない。また、東側には別の土壙が重なっている。規模は長さ3.1m程×幅1.6m以上で、壁面は角度を変えて掘られ、底面は広く平坦で深さ85cm程を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。陶器皿・鉢・擂鉢・急須、磁器碗・湯呑、土師器小皿・焰烙・十能、木製品、瓦片など（第17・18図272~307）多数の遺物が出土しており、廃棄土壙と考えられる。遺構は19世紀中葉のものであろう。

**C-1区SK-1**

平面形は円形で、規模は径0.3m、深さ19cm程を測る柱穴状の土壙である。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物は灰釉系陶器碗と土師器鍋片（第18図308）のみで、遺構は13世紀後半であろう。

**C-2区SK-10**

平面形は円形で、規模は径0.3m、深さ10cm程を測る柱穴状の土壙である。埋土は、暗茶褐色砂質土である。出土した遺物は灰釉系陶器碗（第18図309）のみで、遺構は13世紀後半のものであろう。

**C-2区SK-61**

平面形は円形であるが、東側には別の土壙が重なる。また、B・C-2区SK-38に壊されている。

規模は径0.45m、深さ50cm程を測る柱穴状の土壌である。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物は灯明皿として使用された土師器小皿（第18図310）のみで、遺構は16～17世紀のものであろう。

#### C-3区SK-1

平面形は不整な円形で、SD-07を壊している。規模は径0.75～0.8m、底面は比較的広く深さ15cm程を測る。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物は染付磁器碗小片だけで、遺構は18～19世纪前半であろう。また、混入と考えられる陶器皿（第18図311）が出土している。

#### C-3区SK-112+C-3区SK-103

平面形は緩く「く」の字状となるもので、SD-17を掘り込んでいる。当初は、ややくびれた中央部を境に東側をSK-112、西側をSK-103として掘り下げる。規模は長さ3.7m程で、幅は0.6～1.0m、深さは東側で30cm程で、西に向かって少し深くなり40cm程となる。埋土は、暗灰色砂質土である。また、西端には径0.4m、深さ20cm程の大きさの穴が掘られ、完形の常滑窯産甕が据えられていた。なお、甕の内部は埋土と同じで灰釉系陶器碗・甕、瓦など摩滅した小片が僅かに混じっていた。

出土した遺物にはSK-112部分では灰釉系陶器碗・小皿、陶器皿・播鉢、磁器片、土師器小皿、瓦片など（第18図312・313）が、SK-103部分では常滑窯産甕、磁器碗、土師器鍋・小皿、瓦片など（第18図314）があり、遺構は18世纪末葉～19世纪初頭のものであろう。

#### C-3区SK-56

平面形は細長い楕円形で、規模は長さ0.75m×幅0.25～0.3m、深さは5cm程で、北側は少し深くなり7cm程を測る。埋土は、炭混じりの灰色砂質土である。出土した遺物は土師器鉢（第18図315）のみで、遺構は近世のものであろう。

#### C-3区SK-61

平面形は不整な楕円形で、SD-16に壊されている。規模は長さ3.5m程×幅1.5m程、深さは東側のやや高い部分で10cm程、低い部分では17cm程を測るが底面はあまり平坦ではない。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には陶器皿・播鉢、磁器碗、土師器小皿・半球形鍋・焼壺壺など（第18図316～318）があり、遺構は18世纪前半のものであろう。

#### C-3区SK-49

平面形はやや不整な円形であるが、上部はSD-01によって壊されている。規模は径0.4m前後、深さ40cm程を測る柱穴状の土壌である。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・片口鉢（第18図319～321）があり、遺構は13世纪後半のものであろう。

#### D-2区SK-18

平面形はやや不整な方形あるいは長方形と推測されるが、多くは調査区外となるためはっきりしな

い。SD-07やSD-08などに壊されている。規模は東西2.8m以上、南北4.2m程、底面は比較的平坦で深さ5~7cm程を測る。埋土は、淡灰褐色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗（有高台）・小皿・甕、土師器片などがあり、遺構は13世紀代のものであろう。また、混入品と考えられる土師器焼塩壺（第18図322）が出土している。

#### D-3区SK-13

平面形は細長い溝状と推測されるが、北端は調査区外で南端は現代の擾乱によって壊されているためはつきりしない。規模は長さ1.6m以上×幅0.3~0.4m、深さ5~10cm程を測る。埋土は、淡灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗や土師器鍋片などがあり、遺構は13世紀代のものであろう。また、混入品と考えられる須恵器甕（第18図323）が出土している。

#### D-3区SK-34

平面形は梢円形で、両端はSD-04やSD-05によって壊されている。規模は長径0.75m×短径0.4m、深さ36cm程を測る。埋土は、灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗と土師器伊勢型鍋（第18図324）があり、遺構は13~14世紀のものであろう。

#### D-3区SK-23

平面形は円形で、規模は径0.35m、深さ21cm程を測る柱穴状の土壙である。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物は灰釉系陶器小皿（第18図325）のみで、遺構は13世紀後半のものであろう。

#### D-3区SK-38

平面形は円形で、規模は径0.3m、深さ30cm程を測る柱穴状の土壙であるが、上部は現代の擾乱によって壊されている。埋土は、暗灰色砂質土である。出土した遺物には灰釉系陶器碗・小皿・土師器鍋片（第18図326・327）があり、遺構は13世紀後半のものであろう。

## 第4章 遺物

### 1. 溝 (第8図)

#### SD-01 (1~21)

1~6は陶器である。1は端反皿で、高台部は削り出し。全面に長石軸が掛かり、内面には印花文が見られる。大窯4前半。2は丸皿で、高台部削り込み。底部外面付近を除いて鉄軸が掛かる。志戸呂窯産。3は灯明受皿で、体部外面回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。内外面に鉄軸が掛かる。4は水滴で、体部は偏平となる。外面に染付、底部外面を除いて灰軸が掛かる。5は鬢盤で、底部外面はヘラケズリ、無軸である。外面には鉄絵が見られる。6は小型の擂鉢で、口縁部は屈曲して立ち上がる。体部外面回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。内外面に鉄軸が掛かる。

7~13は磁器である。7~9は丸碗で、7・9の外面には梅樹文や草花文などの染付が見られる。9は焼成がやや不良。10・11は蕎麦猪口で、口縁部は外上方へ直線的に伸びる。外面に丸文や草花文などの染付。10は肥前産、11は瀬戸美濃産。12は型打皿で、内外面に草花文などの染付。13は小瓶で、高台部は削り出し。体部は卵形で、口縁部は細く長く伸びる。外面に笠文などの染付。

14~19は土師器である。14は焼塩壺で、端部は蓋受けの段となる。内面には布目痕が残り、外面は丁寧なナデで、判読不明の刻印。15・16は焼塩壺蓋で、上面から側面は非常に緩やかで端部は厚く丸く収める。内面には布目痕が残る。17・18は小皿で、内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。18の口縁端部には、油煙が厚く付着。19は半球形鍋で、口縁部は内弯気味に伸び端部は内傾した面となる。口縁端部ヨコナデ、内面板ナデ、外面はナデ指押さえで煤が付着。20は瓦質土器十能で、把手部分は中空。ナデ・指押さえによる成形。21は長方形の硯で、海部には墨の痕跡が残る。凝灰岩製と考えられる。

これらのうち、1・2・4・15~19は16世紀末~17世紀代、5は17世紀末葉、これら以外は18世紀中葉~19世紀中葉のものであろう（注1）。

#### SD-03 (22)

22は陶器擂鉢で、口縁部は内弯気味に立ち上がり端部は面となる。内外面回転ナデで、鉄軸が掛かる。これは、18世紀後半のものであろう。

#### SD-07 (23・24)

23は陶器皿で、口縁部は外反気味で端部は丸く収める。内外面には灰軸。24は土師器小皿で、口縁部は小さく立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえ。これらは、17世紀代のものであろう。

#### SD-08 (25~30)

25~28は陶器である。25は天目茶碗で、口縁部は小さく屈曲して端部は丸く収める。高台部削り出し。高台付近は露胎で、これ以外には鉄軸が掛かる。26は瀬戸黒茶碗で、口縁部は筒状に伸び端部は丸く収める。高台部を僅かに削り出す。高台付近は露胎で、これ以外は鉄軸。25・26は大窯4後半。

27は丸皿で、口縁部は緩やかに立ち上がり端部は丸く收める。高台部は削り出しで、輪ドチ痕が残る。全面に灰釉が掛かる。大窯2。28は擂鉢で、端部を下方へ折り広げる。内外面回転ナデ、鉄釉が掛かる。大窯4後半。これら陶器の主体となる時期は、16世紀末~17世紀初頭である。

29は土師器半球形鍋で、口縁部は内弯気味に伸び端部は面となる。底部は丸味を帯び、三方に小さな脚が付く。口縁端部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ナデ・指押さえで、底部付近は内外面共にヘラケズリ。外面の体部上半から口縁端部にかけては、煤が付着している。30は銅製の煙管吸口。これらは、陶器に伴う時期のものであろう。

#### SD-11 (31~33)

31は陶器落とし蓋で、口縁部は鉗状に開き、中央には摘みが付く。底部は回転糸切り、これ以外は回転ナデによる調整。外面に灰釉が掛かる。32は磁器端反碗、33は同丸碗で、いずれも内外面に虫文?や松文などの染付が見られる。これらは、19世紀前半のものであろう。

#### SD-15 (34~36)

34~36は灰釉系陶器碗で、高台は低く偏平なもの(34・35)と細く高いもの(36)があり、34には粗穂痕が見られる。底部外面は糸切り後ナデのもの(34)と、糸切り後未調整のもの(35・36)がある。36は12世紀後半、34・35は13世紀後半のものであろう。

#### SD-17 (37)

37は無文の青磁碗と考えられ、高台部は削り出しで、体部外面の回転ヘラケズリが目立つ。全面に鈍い緑色の釉が掛かる。また、高台には砂粒が付着する。15世紀代の中国輸入磁器であろう。

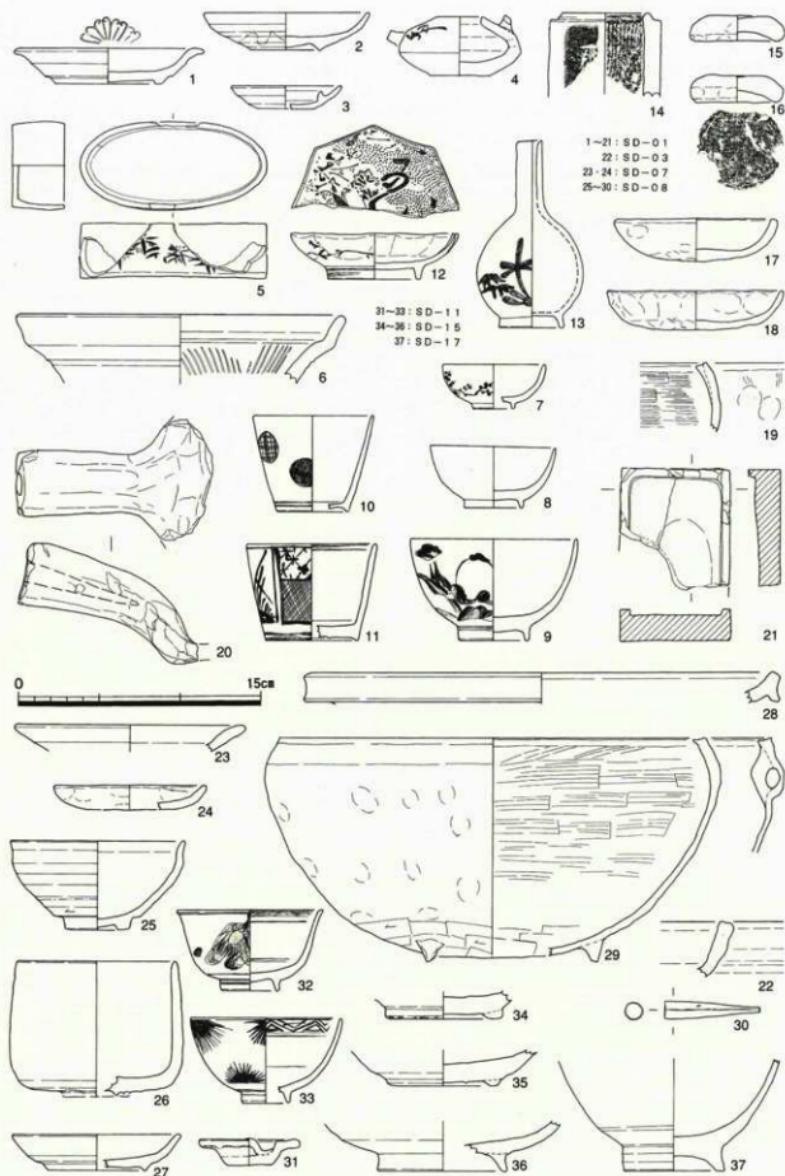
## 2. 井戸 (第9~13図)

#### A-2区SE-01 (38~48)

38~43は灰釉系陶器である。38~41は碗で、高台は低く偏平となる。38の口縁部は外上方へ直線的に伸び、端部は丸く收める。39は、口縁部が内弯気味に伸びる。底部外面糸切り後ナデ、これ以外は回転ナデによる調整。なお、38の内外面と39・41の内面には煤が付着しており、灯明具としての転用が推測される。42・43は小皿で、底部は平坦で口縁部の立ち上がりは明瞭である。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデによる調整。これら灰釉系陶器は、13世紀中葉のものであろう。

44は古瀬戸瓶子で、底部は平底で糸切り痕が見られる。体部外面は回転ヘラケズリで、淡緑灰色の釉が掛かる。内面は回転ナデ。45は土師器皿で、いわゆるロクロ成形による。底部は平坦で、口縁部は小さく立ち上がる。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデによる調整。48は曲物の底板で、土圧のため断面は凹凸となるが、本来は平坦な一枚板である。端部は僅かに内傾しており、径10cm、厚さ0.5cm程を測る。これらは、灰釉系陶器に伴う時期のものであろう。

46は土師器の字形鍋で、頭部は比較的の屈曲する。口縁部は垂直気味で、端部は外側に小さく折り



### 第8図 出土遺物実測図-1 (1/3)

返す。口縁部はヨコナデで、外面に煤が付着。15~16世紀であろう。47は鉄釘と考えられ、両端は欠損する。断面は方形となる。46・47は、井戸の比較的浅い部分から出土し、混入品と考えられる。

#### B-1区SE-02 (49~69)

49~58は陶器である。49は碗で、高台部は削り出し。高台付近を除いて灰釉。50は染付廣東碗で、高台部は削り出し。51は小碗で、高台部付近を除いて灰釉。52は灯明受皿で、内側に栈が付く。体部外面は回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデで、内外面に鉄釉。53は徳利で、口縁部は筒状に伸び端部は肥厚する。内外面に灰釉。54は擂鉢で、体部から口縁部は途中屈曲するが直線的に伸びる。端部は、やや肥厚し外傾した面となる。内外面に鉄釉。55は行平で、口縁端部は受け口状となる。内面に灰釉。56は鍋で、体部はやや丸味を帯び端部は受け口状となる。体部外面下半は回転ヘラケズリで、煤が付着。体部外面下半以外に灰釉。57は土瓶で、底部から体部外面下半は回転ヘラケズリで煤が付着。これ以外は回転ナデで、内外面に鉄釉。58は水壺で、体部は直線的に伸び端部は肥厚し面となる。外面には陰刻された文様が見られ、内外面は灰釉。これら陶器は、19世紀前半のものであろう。

59・60は磁器である。59は端反碗で、焼成はやや不良となる。60は丸碗で、いずれも草花文などの染付が見られる。61は土師器小皿で、口縁部は比較的高く立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ、指押さえによる調整。62は軒棟瓦で、丸瓦部を持たず、板状の部分が付く。瓦当部の文様は、中心に先の開いた花文様、両側には2反転した唐草文が見られる。全面がナデによる調整。63は煙管雁首であるが、火皿部が欠損するなど遺存状態は良くない。64~69は木製品である。64は数珠玉と考えられるもので、径0.6~1.0cm程の紐通しの穴が見られ、外面には赤漆が僅かに残る。65は櫛で、断面は細長い二等辺三角形となる。外面には、黒漆が塗られていたようである。66は箱物の板材と考えられ、一面に黒漆が塗られている。67は竹材による串状のもので、一方は削られて尖り、もう一方は四角く面取りされる。68は箸で、断面が丸く加工されているが両端は欠損する。69は差し歯式の下駄で、断面は山形となる。59~69は、いずれも陶器に伴う時期のものであろう。

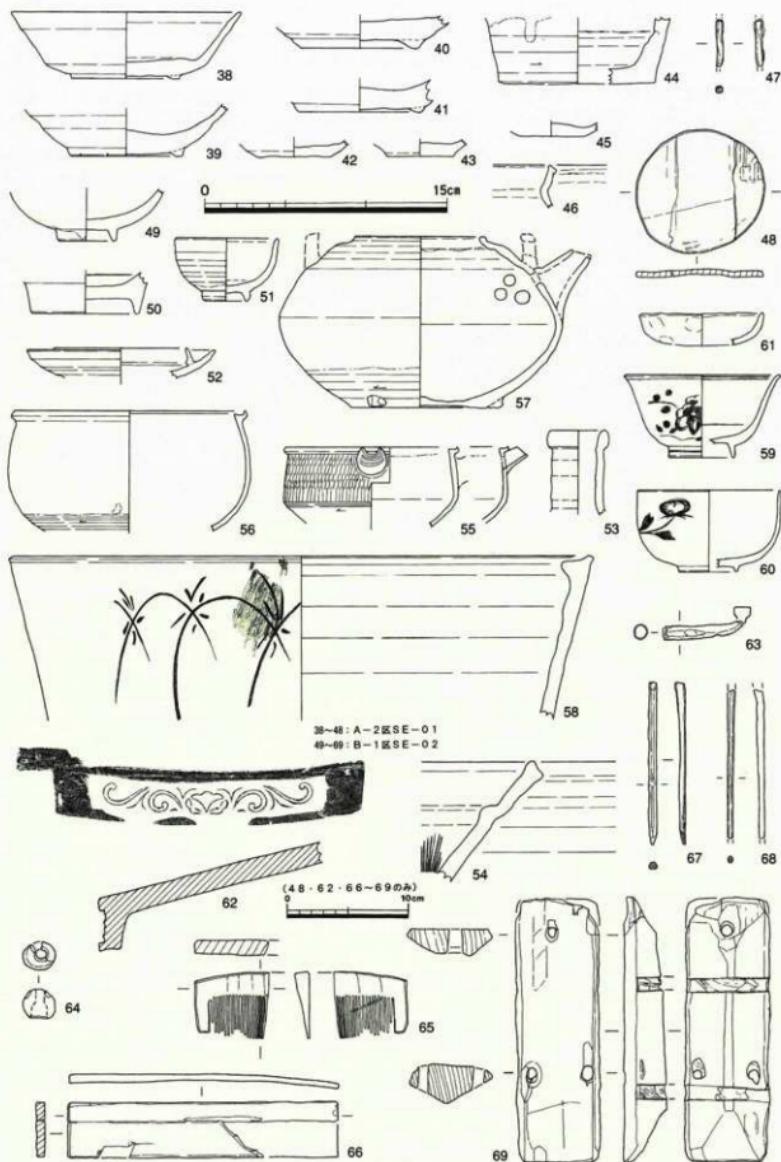
#### B-1区SE-03 (70~78)

70~76は灰釉系陶器である。70~73は碗で、高台はいずれも低く偏平となる。底部は平坦で、口縁部は内弯気味に立ち上がる。底部外面糸切り後ナデ、これ以外は回転ナデによる調整。70の内面には煤が付着しており、灯明具としての転用が推測される。74・75は小皿で、底部は平坦で口縁部の立ち上がりは明瞭である。74は底部外面糸切り後ナデ、75は糸切り後未調整、これ以外はいずれも回転ナデによる調整。これら灰釉系陶器は、13世紀中葉のものであろう。

77は土師器伊勢型鍋で、口縁部はあまり立ち上がらず、端部の折返しが薄く広い。口縁部の調整はヨコナデと考えられるが、摩滅が著しい。78は曲物の底板で、表面には線刻状の傷が多く残る。これらは、灰釉陶器に伴う時期のものであろう。

#### C-1区SE-04 (79~90)

79は須恵器有台坏で、高台はやや丸味を帯びる。底部は、中央付近が少し低くなり高台よりも僅か



第9図 出土遺物実測図-2 (1/3・1/4)

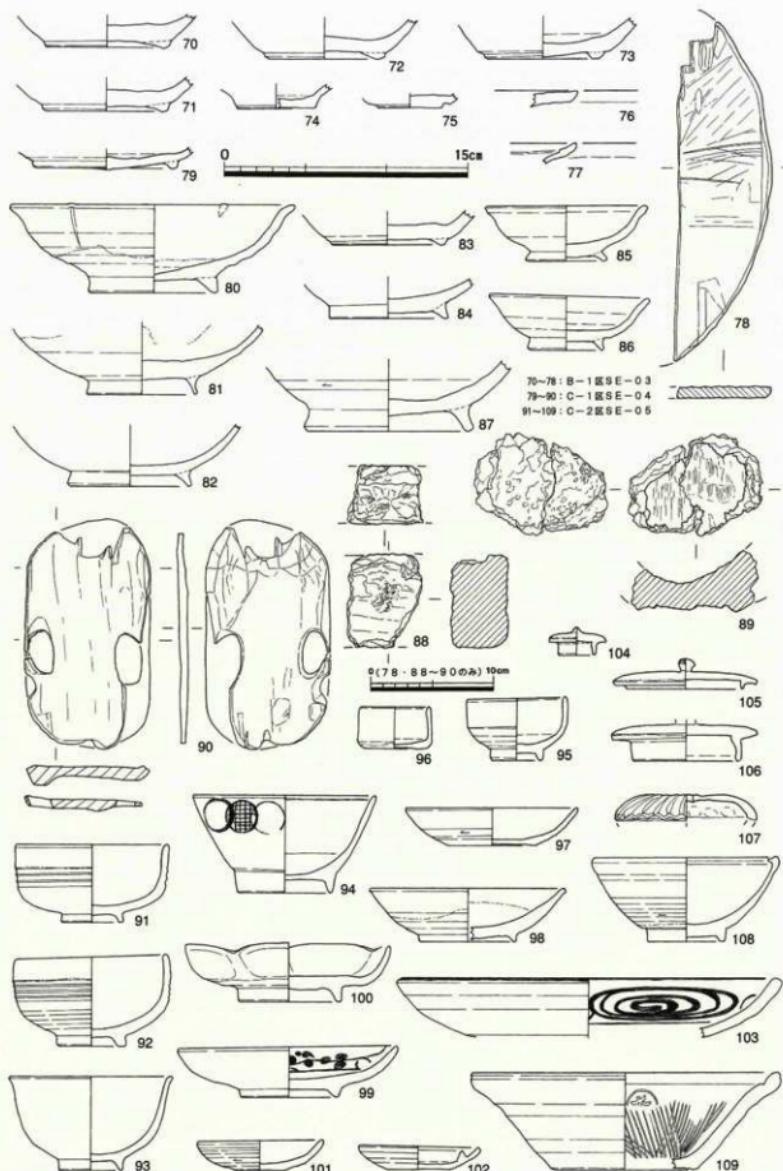
に突出する。底部外面回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。8世紀代のものであろう。

80~87は灰釉系陶器である。80~84は碗で、83を除いて高台は細くて高い丁寧な作りである。体部は内弯気味に立ち上がり、口縁部は外反する(80)。また、輪花を有するもの(80)や口縁部に灰釉が掛かるもの(81・82)も見られる。調整はいずれも底部外面糸切り未調整、これ以外は回転ナデ。83は低く丸味を帯びた高台を有する。内面には煤が付着し、灯明具としての転用が推測される。85・86は小碗で、高台は比較的高く「ハ」の字状にしっかりと付く。口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部近くは僅かに外反する。底部外面糸切り後ナデ、これ以外は回転ナデ。85の内面には、自然釉が厚く掛かる。87は片口鉢で、高台は比較的高くしっかりとしている。底部は平坦で、体部は内弯気味に立ち上がる。体部外面回転ヘラケズリ、内面は回転ナデによる調整。80~82・84~87は12世紀中葉~後半のものであり、83のみ13世紀後半で混入品の可能性が高い。

88・89は溶解炉等の炉壁と考えられ、内外面は被熱により変色・変質が著しい。ナデ・指押さえによる成形で、スサや粉穀の痕跡が見られる。89の丸味を帯びた部分には、羽口が接するのであろう。これら以外にも多数の炉壁が出土している。90は一本造りによる下駄と考えられ、平面形は長方形ではなく長楕円形となる。板の厚みは薄く、歯部とされる部分の突出も少ない。これらは、80~82・84~87の灰釉系陶器に伴う時期のものであろう。

#### C-2区S E-05 (91~145)

91~117・129は陶器である。91・92は腰錦茶碗で、器高はいずれも少し低く高台部は削り出し。93は端反碗で、全面は灰釉で口縁部には綠釉がさらに漬け掛け。94は広東碗で、丸文などの染付。95は小碗で、高台部付近を除いて灰釉。96は小坏で、底部外面糸切り。底部外面を除いて灰釉。97は灯明皿で、体部外面下半回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデによる調整。内外面に鉄釉。98は志戸呂窯産丸皿で、高台部は削り出し。口縁部に鉄釉。口縁端部を打ち欠き、内外面に油煙が付着しており、灯明皿に転用されたようである。99は染付丸皿で、高台部削り出し。内面には梅樹文などの染付。100は型打皿で、内面に二葉松文の染付。101は灯明皿で、内外面に鉄釉。102は灯明受皿で、内側に1ヶ所切れ込みの入った棧が付く。内外面は鉄釉。103は馬の目皿で、内外面に長石釉が掛かり内面には鉄絵。104~106は蓋で、外面には灰釉が掛かるが、106は綠釉が加わる。105・106は土瓶などの蓋であろう。107は黄瀬戸水滴で、底部は欠損し頂部中央には径0.6cm程の穴が開く。外面には綠釉や鉄釉。108は片口で、口縁端部は内傾した面となり高台部は削り出し。高台付近を除いて灰釉。109は小型の擂鉢で、端部近くの内側は段となり端部は丸く収める。内面に「㊀」の刻印。内外面に鉄釉。110は擂鉢で、体部から口縁部は途中屈曲するが直線的に伸びる。端部はやや肥厚して外傾した面となる。内外面は鉄釉で、内側に「㊀」の刻印が2個並ぶ。111は有耳壺で、高台部は削り出し。口縁部から体部外面にかけて灰釉。112は徳利で、体部は下膨れで高台部は削り出し。全面に灰釉が掛かり、外面には「八百□」とヘラ書き後灰釉を掛ける。113は甕で、口縁部は屈曲し端部は肥厚する。内外面に鉄釉。114は鍋で、口縁部は受け口状となる。体部外面下半や断面割れ口にも煤が付着。内外面は鉄釉。115は小型鍋で、口縁部は受け口状で底部には三方に小さな脚が付く。底部外面を除いて鉄釉。116は小瓶で、底部外面糸切り。底部外面を除いて灰釉。117は仏龕具で、脚部は外反気味に



第10図 出土遺物実測図-3 (1/3・1/4)

開き坏部は内弯気味に立ち上がる。坏部を除いて灰釉。129は焜炉と考えられ、口縁部は大きく外反し、端部近くの内側に突起が付く。無釉で素焼きに近い。これら陶器は、98・107が17世紀代、100は18世紀代、これ以外は19世紀前半のものであろう。

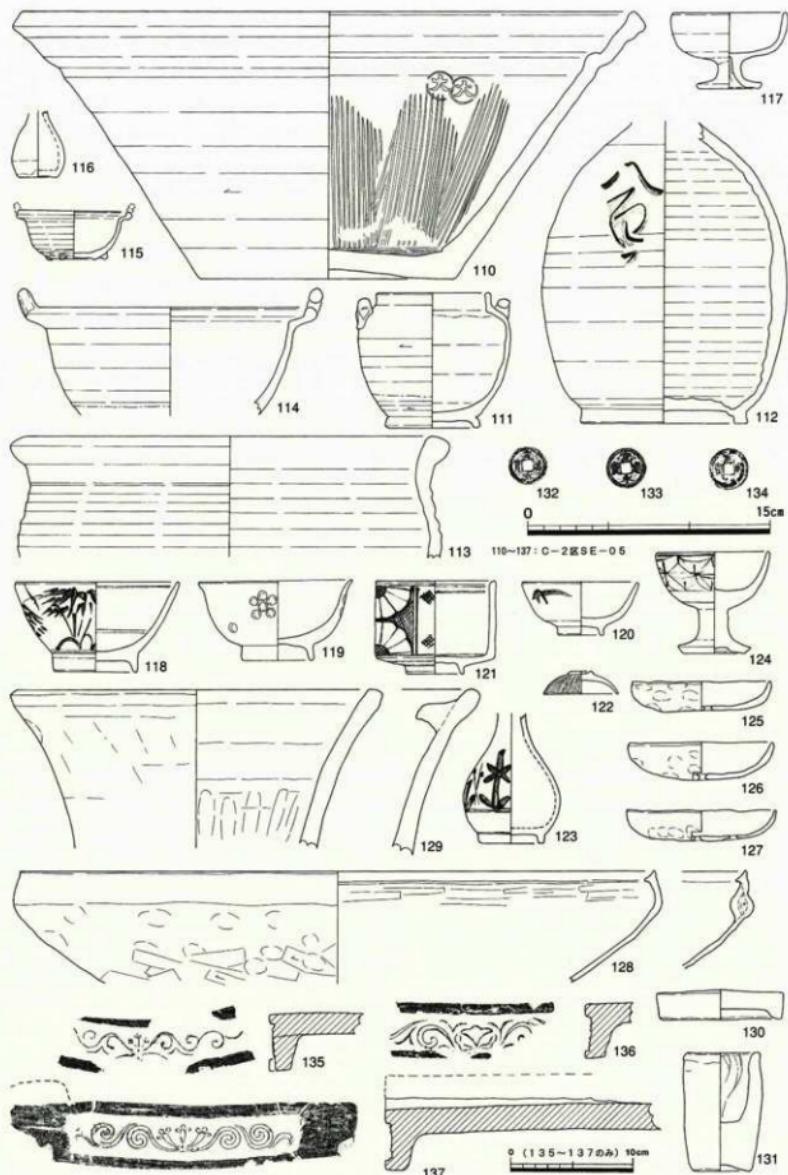
118～124は磁器である。118は広東碗で、筆文などの染付。119は端反碗で、小円状に型打ちして文様としている。120は小碗で、筆文の染付。121は湯呑で、口縁部は筒状となる。内外面に、菊花散し文や幾何文などの染付。122は白磁型打紅皿で、頂部付近を除いて釉が掛かる。123は小瓶で、高台部は削り出し。体部は下彫れとなり、外面には草花文などの染付。124は仏前具で、外面には幾何文の染付。これらは、18世紀～19世紀前半のものであろう。

125～128・130・131は土師器である。125～127は小皿で、口縁部は比較的高く立ち上がる。内面ナデ、外側ナデ・指押さえ。いずれも底部付近に径3～5mmの穴が焼成後に1～2ヶ所開く。また、125・126は口縁端部に油煙が付着し、灯明皿として使用されたようである。128は焰烙で、口縁部は内側に屈曲し端部は内傾した面となる。口縁端部ヨコナデ、内面板ナデ・ナデ、外側ナデ・指押さえで下半はヘラケズリ。外面には煤が付着。なお、内耳部分の穴の径は1mm程と小さく、紐を通した可能性は少ない。130は焼塙壺蓋で、頂部は平坦で側面は垂直気味に折れる。内面には布目痕が残る。131は焼塙壺で、体部は筒状で口縁端部は僅かに面となるが作りは一定ではない。内面には、螺旋状によじれた布目痕が残る。125～127は17世紀代、これ以外は18世紀～19世紀前半のものであろう。

132～134は銭貨で、「寛永通寶」であるが、背に文字はない。いずれも文字が不鮮明で、134には鋳型のずれも見られる。135・136は軒平瓦である。瓦当の文様は、135が中心に単線による3葉でその先に花文様を付け、両端には単線の唐草文が付く。136は中心に先の開いた花文様で、両側には2反転した唐草文が見られる。137は軒棟瓦で、丸瓦部を持たず、板状の部分が付く。瓦当の文様は、中心飾りに複線による3葉でその先に花文様を付け、両側には2反転した唐草文が見られる。138～145は木製品である。138は径12.5cm程の円盤状板材で、中心には径4.7cmの穴が開く。一部には桜皮で留めた部分が残る。139は長梢円形の板材で鬱盤の蓋と考えられ、「全久」と墨書がある。140は用途不明の木材で、各面が丁寧に加工されている。141は両面に黒漆が塗られた比較的厚手の板材で、穿孔や漆の厚みによる文様が見られる。142・143は曲物の底板と考えられ、142は径10.6cm程、143は径7.0cm程とかなり小さい。144は径16.8cm、厚さ1.2～1.7cmのやや厚手の板材で、桶の底板の可能性が高い。145は桶の側板と考えられ、上部がやや広めになる。外側には上下2段にタガの痕が残り、内側の底板が当たる部分は少し削られている。瓦や木製品は、陶器や磁器が廃棄された時期のものであろう。

### C-3 区 S E - 06 (146～190)

146～161・180・181は陶器である。146は丸碗で、口縁部は直線的に伸び端部は丸く收める。全面に灰釉が掛かる。147は碗で、高台部は削り出し。高台付近を除いて灰釉で、内面には山水文の呉須絵。また底部外側には、墨書き及び「松久」の刻印。148は灯明皿で、底部から体部外側は回転ヘラケズリ。外側には鉄釉。149は志戸呂窯産丸皿で、高台部削り込み。内面から口縁部には鉄釉。150は黄瀬戸菊皿で、内面にはトチン痕が見られる。151は灯明受皿で、内側には桟が付く。内外面に鉄釉。152は灯明皿で、高台部は削り込み。内面から口縁部に鉄釉。153は蓋で、頂部には丸い摘みが付く。



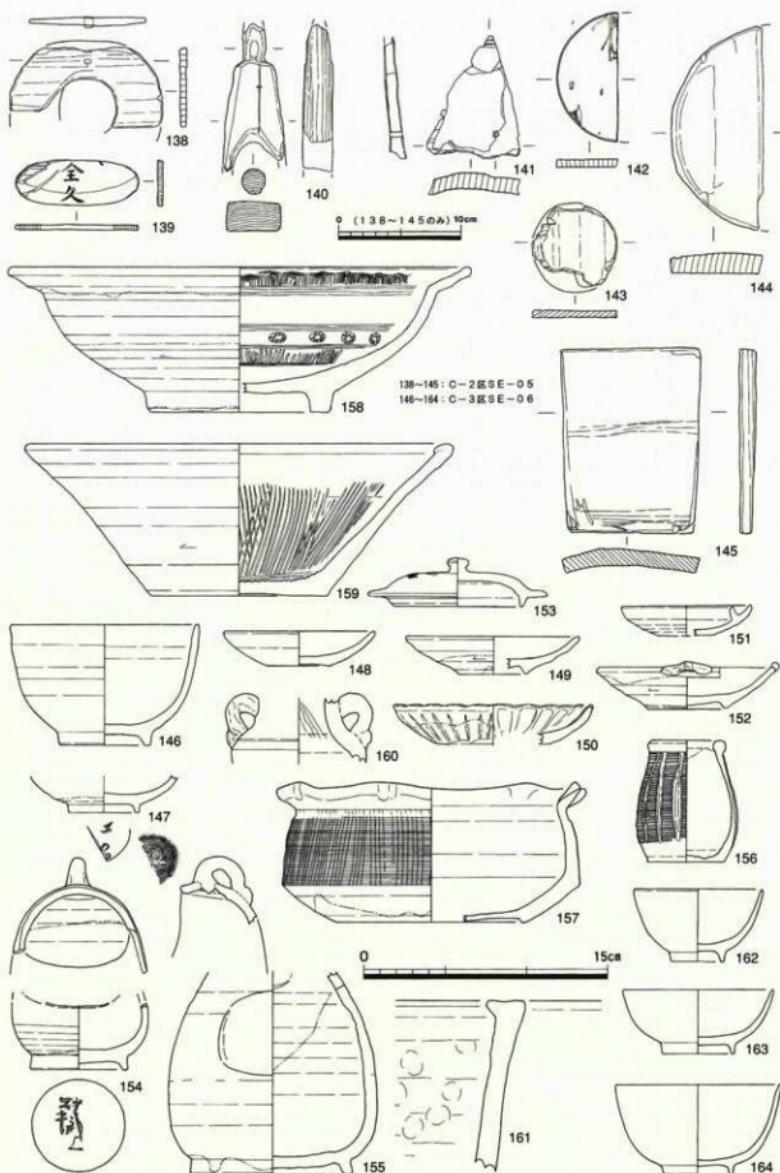
第11図 出土遺物実測図-4 (1/3・1/4)

外面には灰釉で、呉須絵が見られる。154・155は火もらいで、154の底部外面には墨書「十貳上（改行）ユキ」が見られる。154の外面は灰釉、155は鉄釉が掛かる。156は灰落しで、底部外面は糸切り。口縁部は灰釉、体部外面は鉄釉の掛け分けである。157は鉢で、口縁部は指押さえにより波状に成形され、体部にはカキ目が施される。高台部は削り込みで、底部付近を除いて鉄釉。158は肥前産折縁鉢と考えられ、内面には白泥による花文・波状文などの象嵌文様が見られる。外面に鉄釉、口縁部から内面には灰釉。159は擂鉢で、底部外面は糸切り。口縁部は外反気味に伸び端部は僅かに内側に折り曲げる。外面に鉄釉。160は仏花瓶で、外面は鉄釉。161は常滑窯産甕で、口縁部は直線的で端部は面となる。赤物。180は火鉢で、口縁部は内弯気味で端部は丸く收める。内面及び割れ口に煤が付着。181は蚊遣りで、底部は平坦でその外面は未調整で砂粒痕が付く。内面や窓の部分に煤が付着。180・181は無釉で素焼きに近い。147・149・150は17世紀代、148・151・159は19世紀前半～中葉、これ以外は18世紀のものであろう。

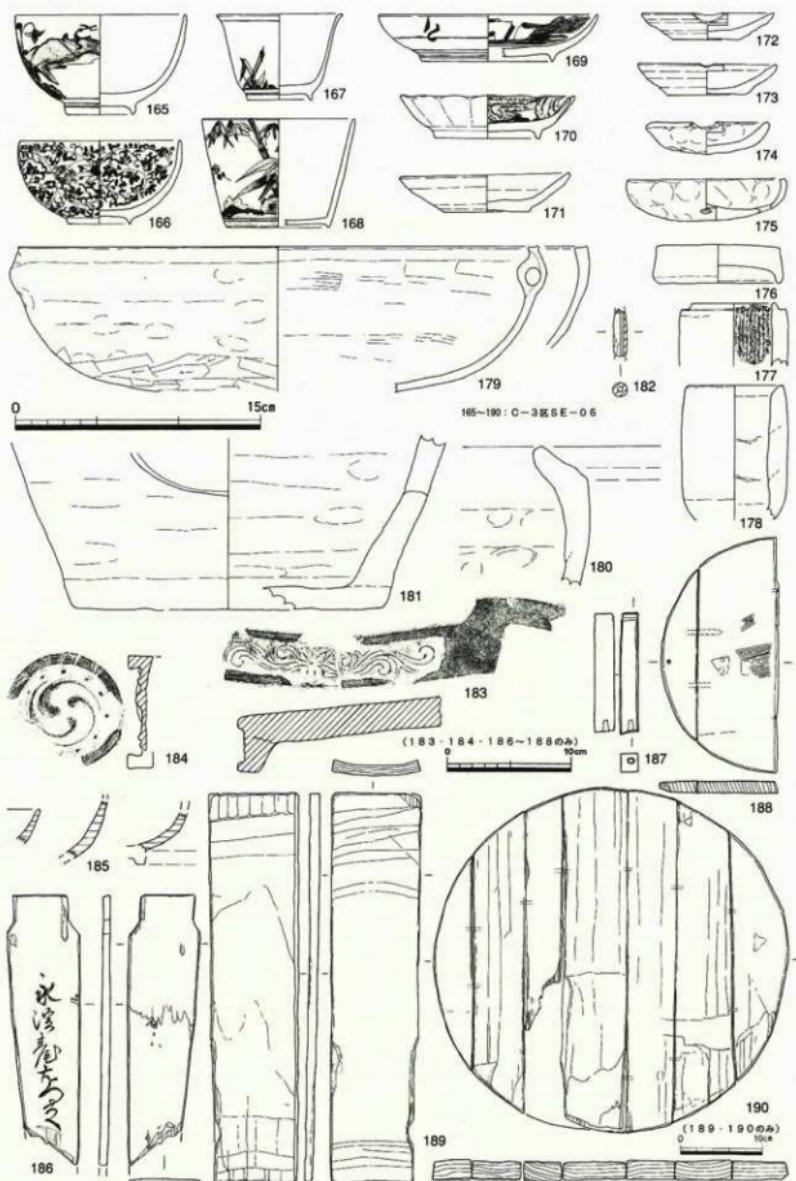
162～170は磁器である。162～164は染付のない白磁碗である。162の高台内側には砂粒が付着。165は碗で、外面に草花文の染付。底部外面に「大明年製」。166は碗で、内外面に牡丹唐草文の染付。167は湯呑で、外面に草文、底部外面に「大明年製」。168は蕎麦猪口で、外面に筆竹文や梅文などの染付。169は丸皿で、内外面に草花文などの染付。170は型打皿で、内面に草花文などの染付。これら磁器は、18世紀を中心としたものであろう。

171～179は土師器である。171は皿、172・173は小皿で、口縁部は全体的に厚手となる。いずれも底部外面糸切り、これ以外は回転ナデで、いわゆるロクロ成形による。172・173は口縁端部を打ち欠き、173の端部には油煙が付く。174・175は非ロクロによる小皿で、174は口縁端部を打ち欠きその周間に油煙が付く。175は底部に焼成後の穿孔が見られる。176は焼塩壺蓋で、頂部は平坦で側面は垂直気味に折れる。内面には布目痕が残る。177・178は焼塩壺で、177の端部は蓋受けの段となる。内面には布目痕が残り、外面は丁寧なナデ。178は体部が筒状で口縁端部は丸く收めるが作りは一定ではない。内側には粘土の接合痕が明瞭に残る。179は半球形鍋であるが、体部はやや偏平となる。口縁部は内弯気味に立ち上がり端部は面となる。口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、外面はナデ・指押さえで下半はヘラケズリ。外面には煤が付着。これら土師器は、18世紀代のものであろう。182は土錘で、径0.8cm程の小さなものである。ナデ・指押さえによる成形。時期ははっきりしない。

183は軒棧瓦で、丸瓦部を持たず、板状の部分が付く。瓦当部の文様は、中心飾りは3葉でその先に花文様を付け、両側には2反転した唐草文が見られる。184は軒丸瓦で、瓦当には右回りで細長い三つ巴文と小さな珠文が付く。185～190は木製品である。185は漆椀で、内面には赤漆が、外面には黒漆がそれぞれ塗られている。また、端部は使用のためか摩耗している。186は木札で、上部は抉り状に切られ、また下方に向かってやや幅が狭くなる。一面には「永濱臺右衛門殿」と墨書きがあり、もう一面にも墨書き（判読不能）が見られる。187は用途不明の木材で、断面正方形で一方には穴が開いている。188は厚さ10cm程とやや厚手の板材で、桶の底板の可能性が高い。板材の側面は、竹釘で2ヶ所留めている。189は樽の側板で、外側の上下にタガの痕跡が残り、内側には両端に天板や底板が接した痕跡が残る。190は189に伴う樽の底板と考えられ、7枚の板材の側面2ヶ所に竹釘を打って繋いでおり、径は約42cmを測る。これら瓦や木製品は、陶器や磁器が廃棄された時期のものであろう。



第12図 出土遺物実測図一5 (1/3・1/4)



第13図 出土遺物実測図-6 (1/3・1/4・1/6)

### 3. 挖立柱建物 (第14・15・17図)

#### SB-01/A-2区SK-20 (204)・A-2区SK-33 (205)

204は土師器半球形鍋で、口縁部は内弯気味に伸び端部は直となる。口縁端部ヨコナデ、内面板ナデ、外面はナデ・指押さえで煤が付着する。205は同小皿で、口縁部は比較的緩やかに立ち上がる。内面ナデ、外面はナデ・指押さえで煤が付着。これらは、16世紀代のものであろう。

#### SB-02/A-1区SK-2 (191~195)

191~193は陶器である。191は香炉で、高台部は削り出し。口縁部外面に灰釉が掛かる。192は植木鉢で、高台部は削り出し。体部外面に鉄釉。193は土瓶で、底部外面には煤が付着する。底部近くに小さな脚が付き、体部外面には灰釉が掛かる。これら陶器は、19世紀前半のものであろう。

194は染付のない白磁碗。195は磁器小瓶で、外面には若松に筆文の染付。いずれも高台には、砂粒が付着している。これらは、陶器に伴う時期のものであろう。

#### SB-03/B-1区SK-79 (241)

241は灰釉系陶器碗で、高台はかなり低く粗穀痕が見られる。口縁部は外上方へ外反気味に伸び端部は丸く収める。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。13世紀中葉~後半のものであろう。

#### SB-05/B-3区SK-17 (271)

271は灰釉系陶器碗で、底部は平坦でやや低いがしっかりとした高台が付く。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。13世紀中葉のものであろう。

### 4. 土壙 (第14~18図)

#### A-2区SK-10 (196・197)

196は灰釉系陶器碗で、口縁部は比較的まっすぐに伸び端部は丸く収める。内外面回転ナデ、内面には煤が付着。197は土師器伊勢型鍋で、口縁部は比較的立ち上がり端部は短く折り返す。口縁部ヨコナデで、外面には煤が付着。これらは、13世紀後半のものであろう。

#### A-2区SK-78 (198・199)

198・199は灰釉系陶器碗で、高台は台形で低いがしっかりとしている(198)。口縁部は比較的まっすぐに伸び、端部は丸く収める(199)。底部外面糸切り後ナデ、これ以外は回転ナデによる調整。これらは、13世紀中葉のものであろう。

#### A-2区SK-86 (200・201)

200・201は灰釉系陶器碗で、高台はやや低く丸味を帯びている。口縁部は内弯気味に立ち上がり、

端部近くは強いヨコナデで僅かに稜となる(200)。底部外面糸切り後ナデ、これ以外は回転ナデによる調整。これらは、13世紀中葉のものであろう。

#### A-2区SK-97 (202)

202は灰釉陶器碗で、高台は貼り付けで細く高い。内外面回転ナデで、灰釉が掛かる。底部外面の調整は不明。内面には重ね焼きの痕が残る。10世紀代のものであろう。

#### A-2区SK-103 (203)

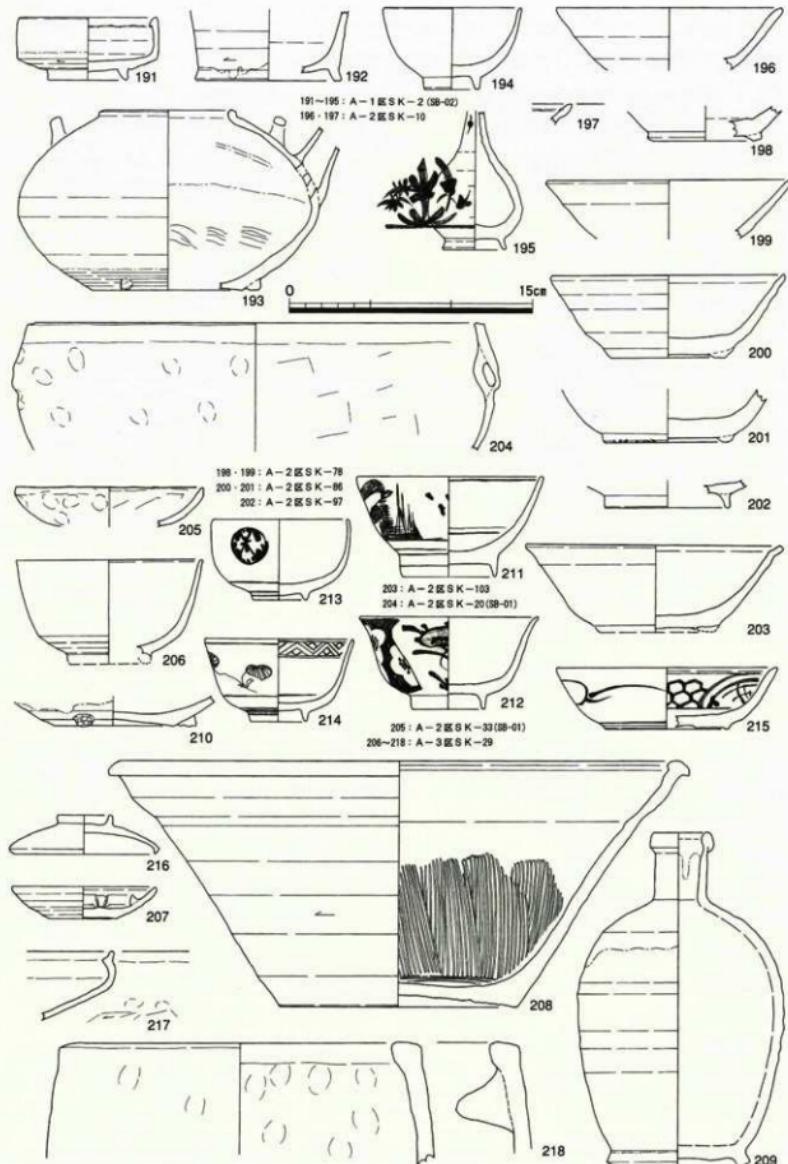
203は灰釉系陶器碗で、高台は全て剥離しているが本来は低く偏平となろう。口縁部は内弯気味に立ち上がり、端部近くは強いヨコナデで僅かに外反する。底部外面糸切り後ナデ、これ以外は回転ナデによる調整。13世紀後半のものであろう。

#### A-3区SK-29 (206~225)

206~210・218・219は陶器である。206は丸碗で、高台部は削り出し。内外面に灰釉。207は灯明受皿で、内側に1ヶ所切れ込みの入った線が付く。内外面は鉄釉。208は擂鉢で、口縁部は外上方へ直線的に伸び端部は横に肥厚して丸く収める。体部外面から底部は回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。内外面には鉄釉。209は徳利で、高台部は削り出し。口縁部は鉄釉、高台部を除いた体部は灰釉が掛かる。210は土瓶または鍋の底部で、三方に脚が付く。内面は灰釉で、外面及び割れ口には煤が付着。218は風炉で、口縁部はやや内傾し端部は僅かに面となる。内側には突起が付き、口縁端部を中心に煤が付着。無釉で素焼きに近い焼成で、表面は剥離が著しい。219は蚊遣りで、内面上部は煤の付着が顕著。肩部に2方向の把手と体部に8ヶ所の穿孔が見られる。底部外面未調整で砂粒が付き、口縁部はヨコナデ、これ以外はナデ・板ナデ。無釉で赤褐色の焼成。これら陶器は、19世紀前半のものであろう。

211~216は磁器である。211は広東碗で、外面に山水文などの染付。212は端反碗で、外面に草花文の染付。213・214は丸碗で、213の外面には丸文など、214の外面には花文や見込みには寿文の染付。215は丸皿で、高台は蛇目高台で、唐草文、亀甲文などの染付。216は染付のない白磁蓋で、頂部には環状の摘みが付き、端部は小さく折り曲げる。これら磁器は、陶器に伴う時期のものであろう。

217は土師器焙烙で、口縁部は垂直気味に屈曲し端部は肥厚して段となる。口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ、下半はヘラケズリ。外面全体に煤が付着。220は瓦質土器焜炉で、内部は二重になるとされる。底部は平坦で、三方に脚が付く。体部は筒状で、一部に円い窓が開く。全面ナデによる調整。221・222は土人形で、いずれも型起しで中空となる。221は恵比寿で、瓦質である。222は笠をかぶった男子像で、土師質の焼成・胎土で肩から腰部は緑色の釉、眉や目は黒色の釉、笠は赤色の胎土が用いられる。223は火打石と考えられ、石質はチャートで、淡緑灰色と白色の織状である。224は軒平瓦で、瓦当は中心飾りが菊花状の先の丸い5葉と珠文で、両側は2反転した単線の唐草文。225は軒丸瓦で、瓦当はやや太く短い三つ巴文と大きな珠文。丸瓦部の凸面はナデ、凹面には布目痕。



第14図 出土遺物実測図-7 (1/3)

**B-1区SK-8 (226~228)**

226・227は灰釉系陶器碗で、高台は226が低く四角く、底部外面糸切り後ナデ。227の高台は低く偏平で作りが難となり、底部外面は糸切り未調整。228は同小皿で、底部は比較的広く口縁部は明瞭に立ち上がる。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。これらは、13世紀後半のものであろう。

**B-1区SK-15 (229~232)**

229は陶器志野丸皿で、口縁端部は僅かに外反する。割れ口には漆の接合痕。大窯4後半。230は同折縁皿で、高台部削り出し。内面に鉄絵、高台付近を除いて長石釉が掛かる。登窯1。231は同擂鉢で、端部近くは小さく屈曲し端部は外傾した面となる。内外面に鉄釉。これらは、17世紀前葉であろう。

232は土師器小皿片を転用した加工円盤で、口縁部付近を利用して周囲を打ち欠いている。

**B-1区SK-21 (233・234)**

233は陶器折縁鉢で、内外面に灰釉。登窯1。234は土師器小皿で、口縁部は小さく立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえで、口縁端部付近に油煙が付着。これらは、17世紀前葉のものであろう。

**B-1区SK-31 (235)**

235は陶器内禿皿で、底部内面は露胎でこれ以外に灰釉が掛かる。高台は削り込み。大窯3後半。16世紀末葉のものであろう。

**B-1区SK-40 (236~238)**

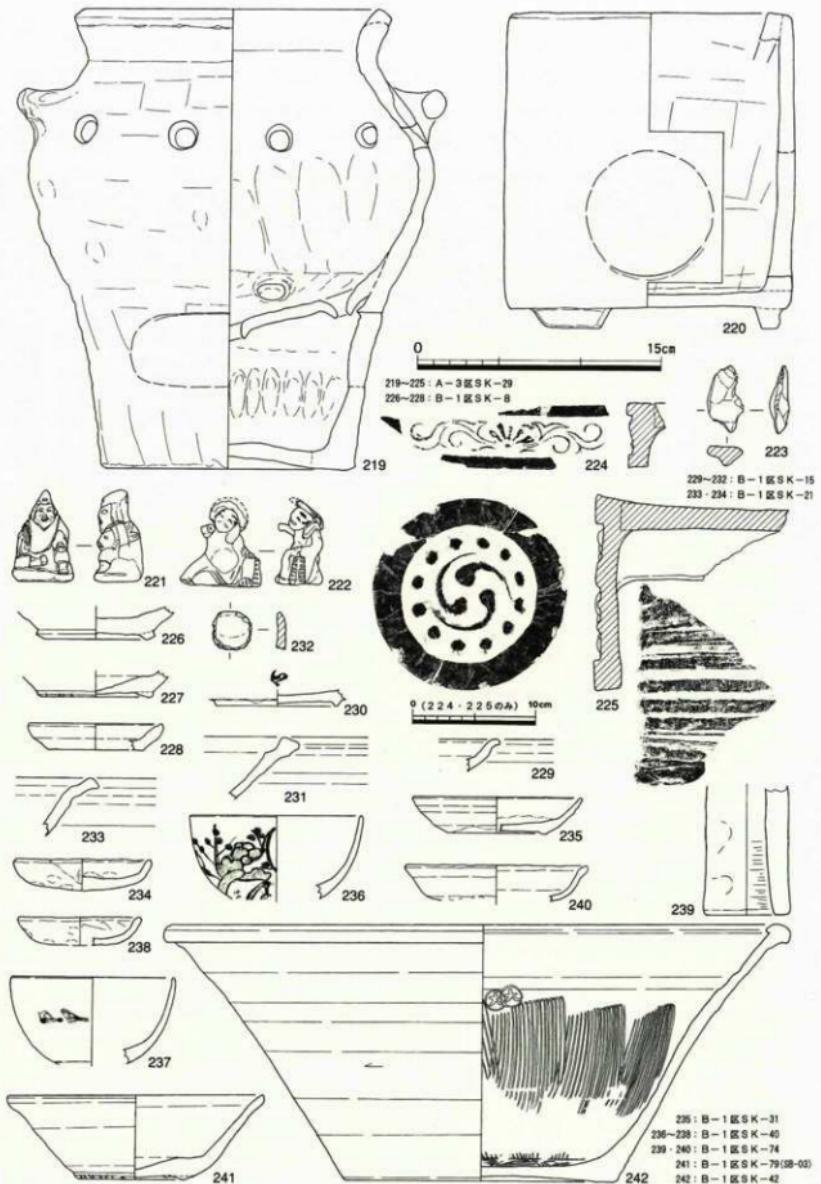
236・237は磁器丸碗で、外面に梅樹文などの染付が見られる。238は土師器小皿で、内面ナデ・板ナデ、外面ナデ・指押さえ。これらは、18世紀代のものであろう。

**B-1区SK-74 (239・240)**

239は土師器筒状土製品で、外面はナデ・指押さえで内面には筋状の痕が残る。胎土や法量から焼塩壺ではなく、把手状のものであろう。240は同皿で、口縁端部は小さく外反する。口縁部ヨコナデ、これ以外はナデ・指押さえ。内面は被熱した可能性が高い。これらは、17~18世紀のものであろう。

**B-1区SK-42 (242~251)**

242~246・250は陶器である。242は擂鉢で、口縁部は外上方へ直線的に伸び端部は横に肥厚して丸く収める。体部外面から底部は回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。内外面は鉄釉で、内側に「⑧」の刻印が2個並ぶ。櫛目は使用のためかなり摩耗。243は土瓶で、体部には窪みを有する。244は土瓶蓋で243に伴うと考えられ、いずれも外面に鉄釉。土瓶の底部は三方に脚が付き、煤が見られる。245は落とし蓋で、円形に摘みが付く。内外面に鉄釉。246は常滑窯産甕で、口縁部は「丁」字状となる。口縁部ヨコナデ、体部内外面ナデ・板ナデ、底部外面は未調整で砂粒が付く。内面赤褐色を呈する赤物。250は蚊遣りで、内面上部は煤の付着が著しい。肩部に2方向の把手と体部に8ヶ所の穿孔。内部仕切



第15図 出土遺物実測図-8 (1/3・1/4)

りは中央に1ヶ所、周囲に5ヶ所の穴が開く。底部外面は未調整で砂粒が付き、口縁部はヨコナデ、これ以外はナデ・板ナデ。無釉で淡橙色の焼成。これらは、19世紀中葉のものであろう。

247~249は磁器である。247は丸碗で、248は丸皿としたが蓋の可能性がある。内外面には花唐草文・雷文などの染付。249は仏龕具で、外面に染付。251は鉄斧で、上部は袋状に巻き、肩部はなで肩で刃部はほとんど欠損している。これらは、陶器に伴う時期のものであろう。

#### B-2区SK-113 (252)

252は陶器鉢片を転用した加工円盤で、周囲を丸く打ち欠いている。内外面には鉄軸が残る。供伴遺物からは、16~17世紀のものと推測される。

#### B-2区SK-224 (253)

253は土師器小皿片を転用した加工円盤で、周囲を丸く打ち欠く。供伴遺物からは、13世紀代のものと推測される。

#### B・C-2区SK-38 (254~262)

254~261は陶器である。254は白天目茶碗で、口縁端部は大きく屈曲する。高台付近は露胎、これ以外は長石釉で鉄軸を散らす。外面に煤が付着し、火を受けているようである。登窯2。255は天目茶碗で、口縁端部は小さく屈曲する。高台付近は露胎、これ以外は鉄軸。大窯4後半。256は丸碗で、高台付近は露胎、これ以外は灰釉。大窯4前半。257は端反碗で、高台部削り出し。全面に灰釉が掛かり、口縁端部に染付が見られる。258は丸皿で、高台部削り出しで、底部外面には輪ドチ痕が見られる。全面に灰釉。大窯2。259は丸皿で、高台部削り出し。内外面に灰釉。260は折線鉢で、口縁端部を丸く摘み上げる。外面は灰釉。261は鉢鉢で、口縁端部は上下に広げている。口縁部は回転ナデで、内面には掘り目が見られる。外面は鉄軸。大窯4前半。254は17世紀中葉、257・259・260は18世紀~19世紀前半のもので混入の可能性が高く、これ以外は16世紀中葉~17世紀初頭のものであろう。

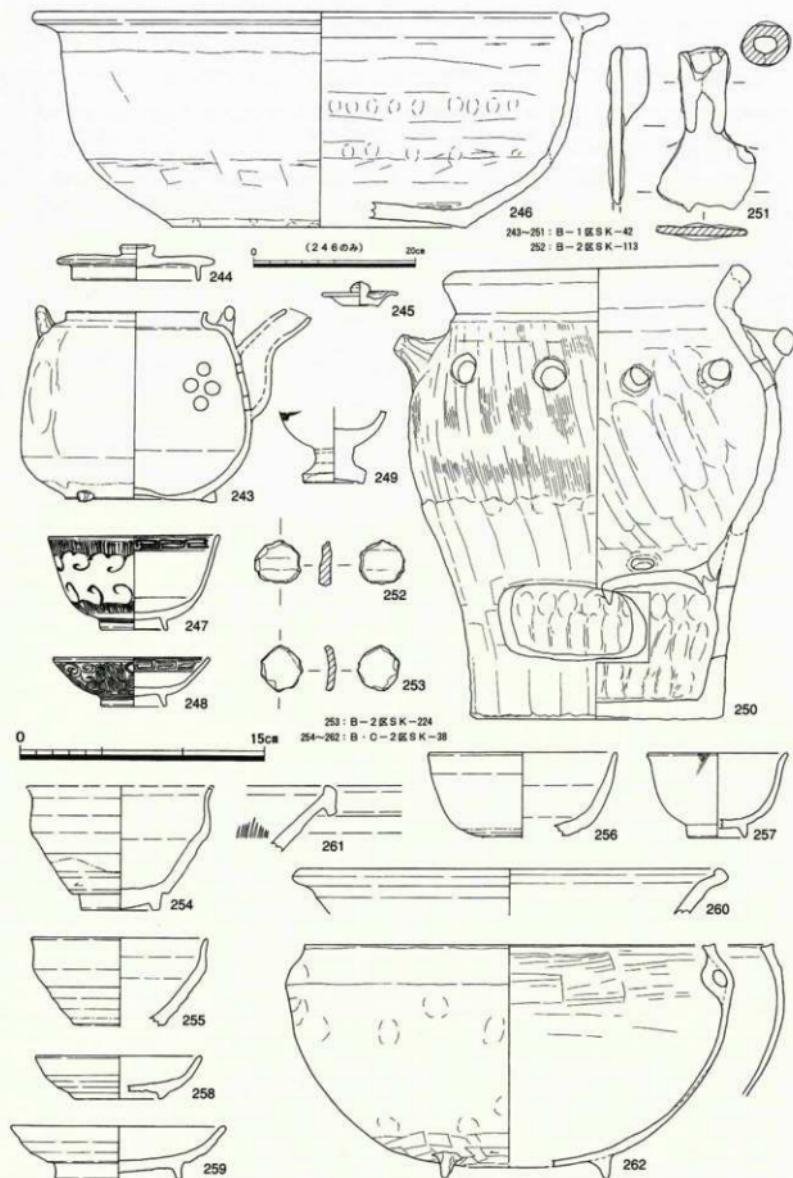
262は土師器半球形鍋で、底部近くには三方に脚が付く。体部から口縁部は内弯気味に伸び、端部は内傾した面となる。外面には煤が付着する。口縁端部ヨコナデ、内面板ナデ、外面ナデで下半はヘラケズリ。16世紀後半~17世紀前半のものであろう。

#### B-2区SK-66 (263・264)

263は磁器端反皿で、高台に砂が付着。内面には山水文の染付。17~18世紀のものであろう。264は陶器丸碗で、器高は低く高台も僅かに削り出す。内外面には灰釉。登窯1。17世紀前葉。

#### B-2区SK-169 (265)

265は灰釉系陶器碗で、口縁部は直線的に外方に開き端部は僅かに外反する。内外面回転ナデ。13世紀代のものであろう。



第16図 出土遺物実測図一9 (1/3・1/6)

**B-2区SK-200 (266)**

266は灰釉系陶器碗で、高台は低く偏平である。底部は平坦で口縁部は内窓気味に立ち上がる。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。内面及び割れ口（打ち欠いた部分か）に煤が付着し、灯明具として転用された可能性が高い。13世紀後半のものであろう。

**B-3区SK-62 (267~269)**

267~269は陶器である。267は菊皿で、高台部削り出し。口縁部から内面に灰釉。268は灯明皿で、底部は小さく口縁部は僅かに立ち上がる。内外面に鉄釉。269は捏鉢で、口縁端部を外側に大きく折り返す。内外面に灰釉。267は17世紀後半、これ以外は19世紀中葉のものであろう。

**B-3区SK-23 (270)**

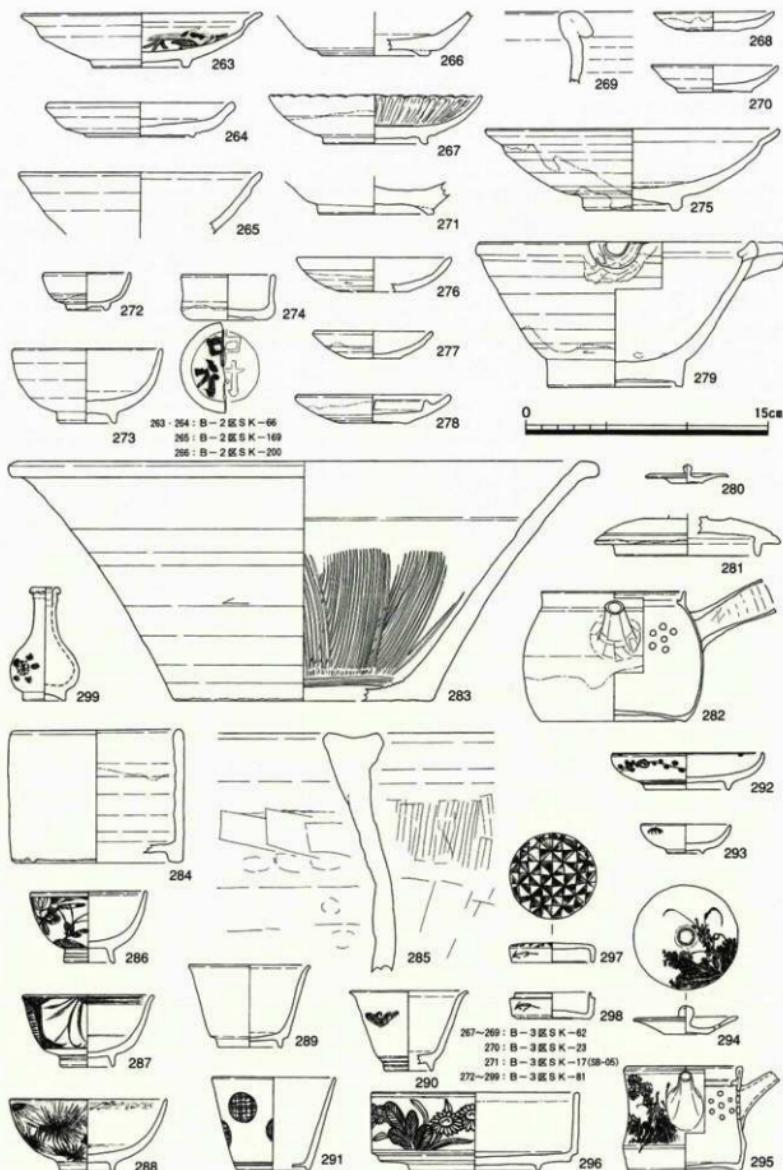
270は土師器小皿で、底部は平坦で口縁部は端部に向かってやや細くなる。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。いわゆるロクロ成形で、12世紀代の灰釉系陶器に伴うものであろう。

**B-3区SK-81 (272~307)**

272~285は陶器である。272は小碗で、高台部削り出し。高台付近を除いて灰釉。273は丸碗で、高台接地面を除いて黒緑色の鉄釉。274は小杯で、底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。底部外面を除いて灰釉、墨書「中村」か。275は輪禿皿で、高台付近を除いて灰釉、口縁部から内面は綠釉。276・277は灯明皿で、口縁端部に油煙が付着。276は灰釉、277は鉄釉。278は灯明受皿で、内側に棟が付く。内外面に鉄釉。279は片口で、高台部は削り出しで口縁端部は内側に折り返す。高台付近を除いて灰釉。280は落とし蓋で、頂部に円形に摘みが付く。外面に鉄釉。281は黄瀬戸の返り付蓋で、頂部外面はヘラによる文様。282は急須で、器壁は非常に薄い。底部はやや上げ底で、口縁部は蓋受け状となる。283は擂鉢で、口縁部は直線的で端部は僅かに外反する。体部から底部外面は回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。内外面に鉄釉。284は鉢で、火入れの可能性が高い。底部外面を除いて灰釉で、口縁部は綠釉が掛かる。底部外面は被熱し、意図的に底を割って穴を開けているようである。285は常滑窯座甕で、口縁端部は中央部がやや窪んだ「T」字状となる。赤物。口縁部ヨコナデ、体部ナデ・板ナデ。これら陶器は、18世紀中葉~19世紀中葉のものであろう。

286~299は磁器である。286は丸碗で外面に櫻文・草花文など、287は端反碗で内外面に区画文などの染付。288は丸碗で外面に松葉文、内面に崩れた割小菱と「文化年製」の染付。289は湯呑で、無文の白磁。290は湯呑で松文など、291は蕎麦猪口で外面に九文などの染付。292は丸皿で外面に梅樹文、内面に鳥・馬などの染付。293は小皿で外面に筆文、294・295は水注とその蓋でいずれも外面に草花文の染付。296は段重で外面に菊花文、297・298は蓋物とその蓋で格子文・折松葉文の染付。299は小瓶で、筆文や梅文の染付。これら磁器は、陶器に伴う時期のものであろう。

300・301は土師器小皿で、口縁部は比較的高く立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえで、301の端部は打ち欠き。302は同十能で、把手部分は中実と考えられる。内外面ナデ・ヘラケズリ・指押さえによる成形。303は凝灰岩製と考えられる砥石で、一方の端部を欠いているがいずれの面も利用さ



第17図 出土遺物実測図-10 (1/3)

れている。304～306は木製品で、304は竹の一端が斜めに加工されている。305は桶などの側板であろう。306は擦り粉木で、下端は丸味を帯びている。307は長さ40～42cm程のシユロ製の紐で、各先端には銅線が環状に付いている。これらは、陶器や磁器に伴うものであろう。

#### C-1区SK-1 (308)

308は灰釉系陶器碗で、口縁部は直線的に外方に開く。内外面回転ナデ。13世紀後半のものであろう。

#### C-2区SK-10 (309)

309は灰釉系陶器碗で、高台は低く偏平である。底部は平坦で口縁部は外上方へ開き、端部は強いヨコナデにより外反気味となる。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。13世紀後半のものであろう。

#### C-2区SK-61 (310)

310は土師器小皿で、口縁部は比較的高く立ち上がる。内面ナデ、外面ナデ・指押さえで、口縁端部には煤が付着する。16～17世紀のものであろう。

#### C-3区SK-1 (311)

311は陶器丸碗で、僅かに高台部を削り出す。全面に灰釉。大窯4後半。16世紀末～17世紀初頭。

#### C-3区SK-112 (312・313)

312は陶器折縁皿で、高台部は削り込み。内外面は鉄釉。18世紀末葉～19世紀初頭のものであろう。313は同擂鉢で、口縁端部を受け口状に屈曲させる。内外面は鉄釉。登窯4。17世紀末葉。

#### C-3区SK-103 (314)

314は常滑窯産甕で、底部は広く平坦である。体部は僅かに肩が張り、口縁部は肥厚して端部は中央部がやや深んだ「T」字状となる。口縁部ヨコナデ、体部ナデ・板ナデ、底部外面未調整で砂粒が付着。18世紀末葉～19世紀初頭のものであろう。

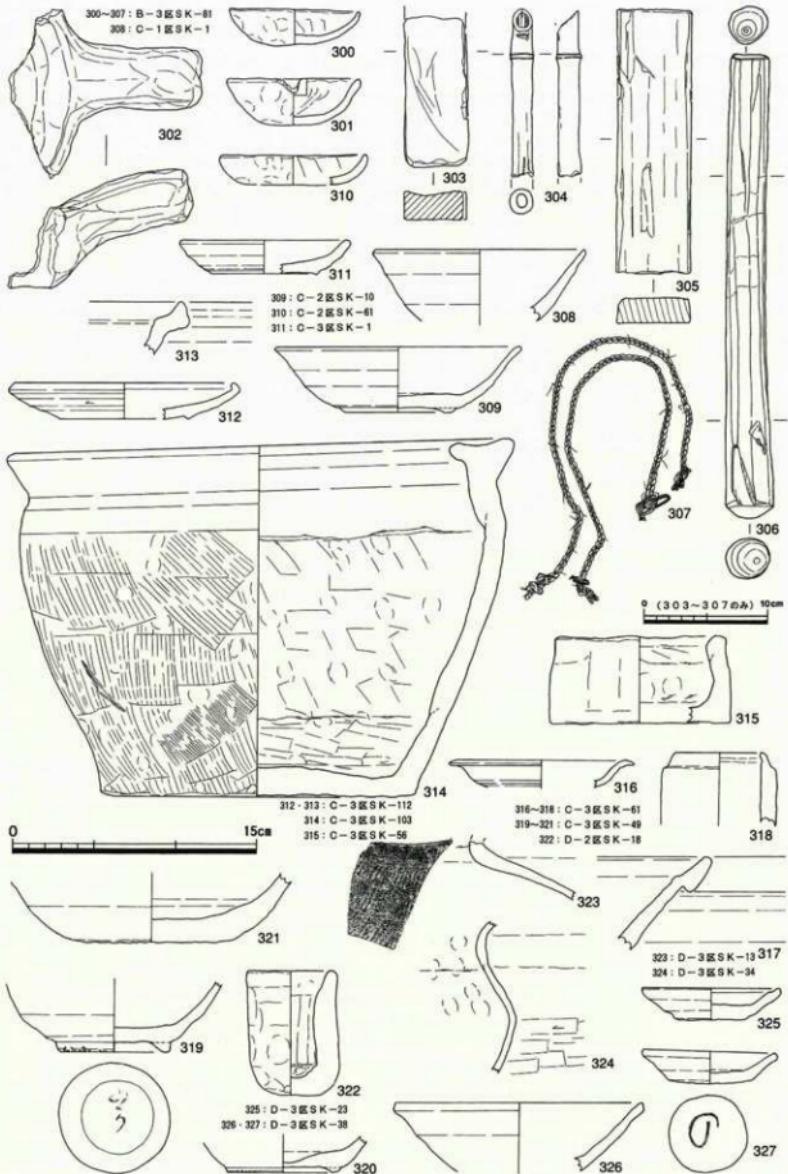
#### C-3区SK-56 (315)

315は土師器鉢で、底部は平坦で体部は垂直気味に立ち上がる。内外面ナデ・板ナデによる調整。外面は被熱しているようである。近世のものであろう。

#### C-3区SK-61 (316～318)

316は陶器端反皿で、内外面に灰釉。317は同擂鉢で、端部近くを屈曲させる。内外面に鉄釉。318は土師器焼塙壺で、口縁端部は蓋受けの段が付く。内面には布目痕。18世紀前半のものであろう。

#### C-3区SK-49 (319～321)



第18図 出土遺物実測図-11 (1/3・1/4)

319・320は灰釉系陶器碗で、319の高台は低いがしっかりとしている。底部外面に墨書。320の高台は低く小さい断面三角形。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。321は同片口鉢で、無高台で底部から体部はやや丸味を持つ。底部外面は未調整、これ以外は回転ナデ。13世紀後半のものであろう。

#### D-2区SK-18 (322)

322は土師器焼壺壺で、内面は芯型のため六角形状となり、外面はナデ・指押さえ。刻印は見られない。17世紀後半のものであろう。

#### D-3区SK-13 (323)

323は須恵器甕の頸部片で、体部外面平行タタキ後回転ナデ、内面同心円當て具痕後ナデ。9世紀前後のものであろう。

#### D-3区SK-34 (324)

324は土師器伊勢型鍋で、体部はやや腰が張り口縁部は大きく外反する。内面ナデ・指押さえ、体部外面ナデで下半はヘラケズリ。13~14世紀のものであろう。

#### D-3区SK-23 (325)

325は灰釉系陶器小皿で、底部は平坦で口縁部との境ははっきりしている。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。13世紀後半のものであろう。

#### D-3区SK-38 (326・327)

326は灰釉系陶器碗で、口縁部は直線的に開く。内外面は回転ナデ。327は同小皿で、底部は平坦で口縁部との境ははっきりしている。底部外面糸切り、これ以外は回転ナデ。底部外面に墨書。これらは、13世紀後半のものであろう。

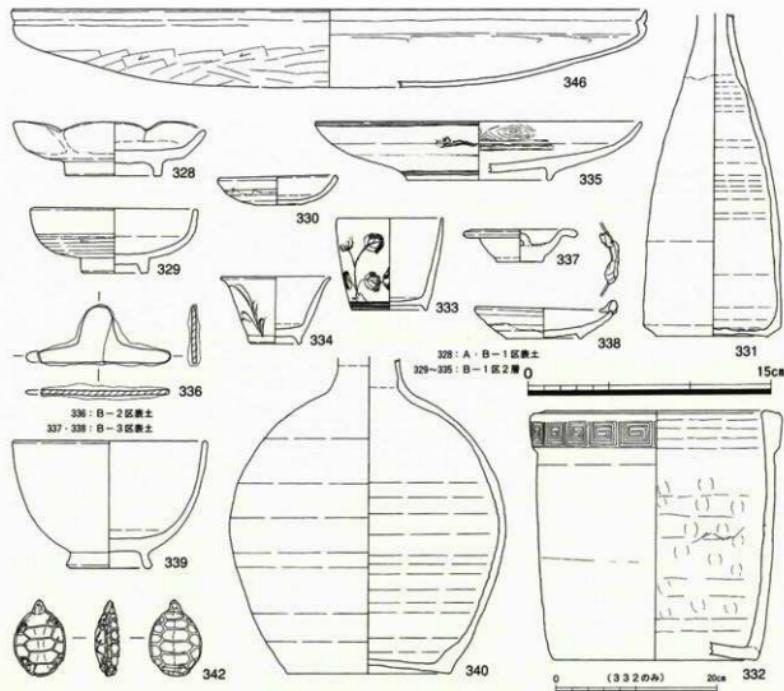
### 5. 表土他 (第19図)

#### A・B-1区表土 (328)

328は陶器型打皿で、高台部削り出し。内外面は灰釉で、内面に二葉松文の染付。18世紀代であろう。

#### B-1区2層 (329~335)

329は陶器丸碗で、高台部削り出し。口縁部から内面が灰釉で見込みに鉄絵。330は同灯明皿で、内外面に鉄釉。331は同徳利で、底部は平坦となる。外面には灰釉や鉄釉が掛かる。332は常滑窯産甕で、焼き締め。口縁端部は肥厚し、外面に雷文。333は磁器蕎麦猪口で、334は同湯呑で、いずれも外面には草花文の染付。335は同丸皿で、内外は上絵付による割小菱・草花文など(黄・赤など)が見られる。これらは、19世紀前葉~中葉のものであろう。



**B－2区表土（336）**

336はT字状の火打金。鋸が厚く、実際は2～3mm程の厚さである。近世のものである。

**B－3区表土（337・338）**

337は陶器落とし蓋で、頂部に環状の摘みが付く。底部回転ヘラケズリ、これ以外は回転ナデ。全面に鉄軸。338は同灯明皿は、高台部削り込み。底部外面を除いて鉄軸が掛かる。これらは、18世紀後半のものであろう。

**C－1区2層（339～347）**

339は肥前産の陶器丸碗で、高台部削り出し。接地面を除いて灰軸が掛かる。340は備前産と考えられ同徳利で、底部は広く肩部はなで肩となる。341は同擂鉢で、口縁部は直線的に伸び端部は横に肥厚して丸く取める。内面に「⑥」の刻印2ヶ所。底部外面は使用により摩耗が著しい。また、内面には煤が厚く付着し何らかに転用された可能性が高い。342は土人形亀で、型起しで中空となる。土師質の焼成・胎土で甲羅部分には緑色の軸。343は磁器小碗で、外面に梅樹文？の染付。344は同端反碗で同心円文・唐草文、345は同丸皿で内面に草花文の染付。346は土師器焙烙で、口縁部は垂直気味に短く立ち上がり端部は段となる。口縁端部ヨコナデ、内面ナデ、外面ナデ、下半はヘラケズリ。347は瓦質土器五徳で、口縁端部には三方に突起が付く。体部に丸い穿孔が6ヶ所、半円形は1ヶ所。これらは、19世紀代前葉～中葉のものであろう。

**C－2区表土（348）**

348は軒丸瓦で、中心飾りは沢瀉文と考えられる。周囲に珠文を巡らす。

**C－3区表土（349）**

349は陶器端反皿で、高台部は削り込み。内外面に灰軸が掛かる。17世紀後半のものであろう。

**D－3区表土（350）**

350は陶器小碗で、高台部削り出し。高台付近を除いて灰軸が掛かる。18世紀後半のものであろう。

注1 出土遺物の編年的な位置付けについては、次の文献を主に参考にしている。

瀬戸市教育委員会 1990 『尾呂』

藤澤良祐 2005 「施釉陶器生産技術の伝播」『全国シンポジウム 中世窯業の諸相～生産技術の展開と編年～』

豊橋市教育委員会他 1994 『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第21集 吉田城址(Ⅰ)』

(財)愛知県埋蔵文化財センター 1995 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第59集 吉田城遺跡(Ⅱ)』

(財)愛知県埋蔵文化財センター 1990 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第16集 名古屋城三の丸遺跡(Ⅲ)』

(財)愛知県埋蔵文化財センター 1992 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第37集 名古屋城三の丸遺跡(Ⅳ)』

(財)愛知県埋蔵文化財センター 1993 『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第44集 名古屋城三の丸遺跡(Ⅴ)』

第1表 土出土遺物観察表

国名・道名	地区	遺物	器種	分類	口径	高さ	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	備考	
8-	D-3 SD-01	T	壺反転	1.0.8	2.2	6.4		審	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	内外に灰色、印文△ 大変4後		
2-C-3 SD-01	T	丸壺	1.0.1	2.3	4.2			審	良好	淡灰褐色	高台部削り込み	内外面に灰褐色、志戸呂鹿		
3-C-3 SD-01	T	灯明受皿	6.7	1.4	3.5			審	良好	灰白色	魯部外下半削りヘラケズリ	内外面に灰褐色、美濃産		
4-D-3 SD-01	T	水滴	2.8	3.6	2.7	最大径7.4		審	良好	淡乳褐色	魯部外下半削りヘラケズリ	内外面に灰褐色、志戸呂鹿		
5-D-3 SD-01	T	盤	直径11.5	3.4	直径5.2			審	良好	淡黃褐色	魯部外下ヘラケズリ	内外面に灰褐色、志戸呂鹿△本		
6-D-3 SD-01	T	盤	1.9.6	(4.3)				審	良好	淡褐色	魯部外下半削りヘラケズリ	内外面に灰褐色		
7-C-3 SD-01	Z	丸壺	6.2	2.7	2.4			審	良好	白色	高台部削り出し	朱付丸壺、志戸呂鹿		
8-D-3 SD-01	Z	丸壺	7.6	3.8	3.5			審	良好	淡灰褐色	高台部削り出し			
9-D-3 SD-01	Z	丸壺	1.0.1	6.3	4.1			審	やや不良	淡灰褐色	高台部削り出し	朱付丸壺△口肥前産		
10-C-3 SD-01	Z	青磁露口	7.3	5.9	4.2			審	良好	白色	高台部削り出し	朱付青磁露口△志戸呂鹿		
11-C-3 SD-01	Z	青磁露口	7.8	6.0	5.6			審	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	朱付青磁露口△志戸呂鹿		
12-D-3 SD-01	Z	燈型壺	1.0.2	2.8	5.6			審	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	朱付		
C-3 D-3 SD-01	Z	小瓶	1.5	1.1.5	3.8			審	良好	白色	高台部削り出し	朱付小瓶		
D-3 SD-01	H	塊壺	5.4	(5.2)				審	良好	淡茶褐色	内面に布目痕	外面上印刷		
D-3 SD-01	H	塊壺蓋	4.8	1.6				審	良好	淡褐色	外面上ナメ	内面に布目痕		
D-3 SD-01	H	塊壺蓋	4.9	1.7				審	良好	淡茶褐色	外面上ナメ	内面に布目痕		
C-3 SD-01	H	小壺	9.6	2.6				審	良好	淡褐色	外面上ナメ・指押さえ	口縁端部に傷付着		
C-3 SD-01	H	小壺	1.0.7	2.4				審	良好	淡褐色	外面上ナメ・指押さえ	口縁端部に傷付着		
D-3 SD-01	H	壺		(4.2)				審	良好	淡茶褐色	体部内面板ナメ	外面上に傷付着		
C-3 SD-01	N	十能	長(12.2)					審	良好	淡灰褐色	ナメ・唇押さえによる整形	把手部は中空		
C-3 SD-01	R	鏡	長(17.4)	幅6.7	厚2.0			審	良好	淡灰褐色		石質・鏡裏若?		
D-3 SD-03	T	盤		(3.3)				審	良好	淡褐色	口縁部削りナメ	内外面上灰褐色		
B-2 SD-07	T	壺	1.3.7	(1.7)				審	良好	淡褐色	魯部外削りナメ	外面上灰褐色		
C-3 SD-07	H	小壺	9.4	(1.5)				審	良好	淡褐色	外面上ナメ・指押さえ	口縁端部に傷付着		
C-2 SD-08	T	天井系統	1.0.6	5.5	3.9			審	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	内外面上灰褐色、大変4後		
B-2 SD-08	T	瓶	9.6	(8.3)				審	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	内外面上灰褐色、大変4後		
B-2 SD-08	T	丸壺	1.0.1	2.2	6.0			審	良好	淡褐色	高台部削り出し	内外面上灰褐色、大変2		
B-2 SD-08	T	盤	2.8	(1.9)				審	良好	淡褐色	口縁部削りナメ	内外面上灰褐色、大変4後		
C-2 SD-08	H	壺	2.6.2	(1.3.8)				審	良好	淡褐色	口縁端部削りコナメ	外面上に傷付着		
D-2 SD-08	I	櫛管吸口	長5.9	直径1.1								鋼製		
B-C-1 SD-11	T	壺とし	6.0	1.6				審	良好	淡乳褐色	底部系切り	外面上に灰褐色		
B-C-1 SD-11	Z	壺反転	8.8	5.0	3.5			審	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	朱付壺反転		
B-C-1 SD-11	Z	丸壺	9.2	5.3	2.8			審	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	朱付丸壺		
C-3 SD-15	P	碗		(1.7)	6.7			審	良好	淡褐色	底部外削り後ナメ	高台部に移設痕		
C-2 SD-15	P	碗		(2.2)	5.8			審	良好	淡灰褐色	底部外削り後ナメ	高台部に移設痕		
C-2 SD-15	P	碗		(3.1)	7.8			審	良好	淡褐色	底部外削り後ナメ	高台部に移設痕		
C-3 SD-17	Z	青磁碗		(6.9)	6.1			審	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	内外面上に緑色の縫		
A-2 SE-01	P	碗	1.4.0	4.1	6.6			審	良好	暗褐色	底部外削り後ナメ	内面に黒斑		
A-2 SE-01	P	碗		(3.2)	6.7			審	良好	暗褐色	底部外削り後ナメ	内面に黒斑		
A-2 SE-01	P	碗		(2.0)	6.9			審	良好	暗褐色	底部外削り後ナメ	高台部に移設痕		
A-2 SE-01	P	碗		(2.0)	7.2			やや粗雑	良好	暗褐色	底部外削り後ナメ	内面に黒斑		
A-2 SE-01	P	小盆		(1.1)	4.5			審	良好	淡褐色	底部外削り後ナメ	内面に黒斑		
A-2 SE-01	P	小盆		(1.0)	4.0			審	良好	淡褐色	底部外削り後ナメ	内面に黒斑		
A-2 SE-01	T	盤子		(4.0)	9.7			審	良好	淡褐色	体部外削り輪へカズリ	外面上に灰褐色・古塵跡		
A-2 SE-01	H	皿		(0.8)	3.8			審	良好	淡褐色	底部外削り	クロロ成形		
A-2 SE-01	Z	盤		(2.6)				審	良好	淡褐色	底部外削り	外面上に傷付着		
A-2 SE-01	I	鉗釘	長(3.3)	一寸(0.4)								鉗釘		
A-2 SE-01	W	曲物底板	厚(1.1)	厚0.5								一枚板による		
B-1 SE-02	T	碗		(3.2)	3.2			審	良好	淡褐色	高台部削り出し	内外面上灰褐色		
B-1 SE-02	T	広口碗		(2.6)	6.4			審	良好	淡褐色	高台部削り出し	内外面上灰褐色		
B-1 SE-02	T	小碗	6.1	3.9	2.6			審	良好	淡褐色	高台部削り出し	内面に黒斑		
B-1 SE-02	T	灯明受皿	1.1.5	(1.8)				審	良好	灰	魯部外削り後ナメ	内面に黒斑		
B-1 SE-02	T	利	3.3	(5.2)				審	良好	淡褐色	口縁部削りナメ	内面に黒斑		
B-1 SE-02	T	盤		(7.4)				審	良好	淡褐色	魯部外削り後ナメ	内面に黒斑		
B-1 SE-02	T	行平	1.0.6	(4.9)				審	良好	灰	魯部外削り後ナメ	内面に黒斑		
B-1 SE-02	T	萬	1.4.2	(7.4)				審	良好	灰	魯部外削り後ナメ	内面に黒斑		
B-1 SE-02	T	土瓶	7.8	1.0.5				審	良好	淡褐色	魯部外削り後ナメ	内面に黒斑		
B-1 SE-02	T	水甕	3.5.4	(1.0.2)				審	良好	淡褐色	口縁部削りナメ	内面に黒斑		
B-1 SE-02	Z	壺反転	9.4	5.1	3.9			審	やや不良	白色	高台部削り出し	朱付壺反転		
B-1 SE-02	Z	丸壺	8.7	5.0	3.5			審	良好	白色	高台部削り出し	朱付丸壺		
B-1 SE-02	H	小壺	9.4	(1.9)				審	良好	淡褐色	外面上ナメ・指押さえ			
B-1 SE-02	N	斜枝瓦						審	良好	淡褐色		鉗釘		
B-1 SE-02	I	椎管首器	長(3.3)	径0.9								鉗釘		
B-1 SE-02	W	数珠玉	径2.8	厚1.8							表面に赤茶残る			
B-1 SE-02	W	桶	長(4.5)	厚3.7	厚0.9						表面に黒斑か?			
B-1 SE-02	W	箱	長(2.2)	幅4.7	厚0.7						表面に黒斑			
B-1 SE-02	W	串?	長(2.4)	幅0.6	厚0.8						先端部を尖らせる	竹材		
B-1 SE-02	W	箸	長(1.2)	径0.6	厚0.6						丸く加工			
B-1 SE-02	W	下駄	長2.20	幅6.8	厚(2.5)						柔軟性の下駄			
10-70	B-1 SE-02	P	碗	(2.0)	7.1			審	良好	淡褐色	底部外削り後ナメ	高台部に移設痕		

図版・遺物名	地区	遺物	器種	分類	口径	器高	底径	その他	出土	焼成	色調	調査等	備考
10- 71	B-1	SE-0-3	P	瓶		(2.1)	6.9		密	良好	淡灰色	底部外周面あちり	
72	B-1	SE-0-3	P	瓶		(2.4)	6.8		密	良好	淡灰色	底部外周面あちり後ナデ	
73	B-1	SE-0-3	P	瓶		(2.5)	6.6		密	良好	淡灰色	底部外周面あちり後ナデ	
74	B-1	SE-0-3	P	小瓶		(1.4)	4.6		密	良好	淡灰色	底部外周面あちり後ナデ	
75	B-1	SE-0-3	P	小瓶		(0.9)	3.6		密	良好	淡灰色	底部外周面あちり	
76	B-1	SE-0-3	P	吏		(1.1)			密	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ	
77	B-1	SE-0-3	H	鍋		(1.3)				やや粗雑やや不良	淡灰褐色	口縁部ヨコナデ	伊勢型鍋
78	B-1	SE-0-3	W	曲腹板長	(27.8)	幅(1.7)	厚1.1						
79	C-1	SE-0-4	S	有台环		(1.4)	8.5		密	良好	淡灰色	底部外周面回転ヘラケズリ	底部が僅かに突出
80	C-1	SE-0-4	P	瓶	17.2	5.4	7.5		密	良好	淡灰色	底部外周面あちり	口縁部に灰褐色、輪花
81	C-1	SE-0-4	P	瓶		(4.3)	6.6		密	良好	淡灰色	底部外周面あちり	口縁部に灰褐色
82	C-1	SE-0-4	P	瓶		(3.8)	7.2		密	良好	灰白色	底部外周面あちり	
83	C-1	SE-0-4	P	瓶		(2.1)	6.7		密	良好	淡灰色	底部外周面あちり	内面に墨? 高台部に鉛粒痕
84	C-1	SE-0-4	P	瓶		(2.4)	7.0		密	良好	灰白色	底部外周面あちり	
85	C-1	SE-0-4	P	小瓶	9.6	3.4	4.6		密	良好	淡灰色	底部外周面あちり	
86	C-1	SE-0-4	P	小瓶	9.7	3.4	4.4		密	良好	淡灰色	底部外周面あちり後ナデ	
87	C-1	SE-0-4	P	荪		(4.3)	9.8		密	良好	淡灰色	底部外周面下平軸輪、ヘラケズリ	
88	C-1	SE-0-4	D	鋤	茎(4.1)	厚1.7	厚1.7		やや粗雑	良好	淡褐色	ナダ・指押さによる整形	溶解解?
89	C-1	SE-0-4	D	鋤	茎(3.3)	厚1.3	厚2.2-3.8		やや粗雑	良好	淡赤褐色	内面に粗表面あり	溶解解?
90	C-1	SE-0-4	W	丁字	茎(3.3)	厚1.1	厚0.8						
91	C-2	SE-0-5	T	腰茶碗	9.2	4.8	3.6		密	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	灰褐色・焦褐色
92	C-2	SE-0-5	T	腰茶碗	9.1	5.6	3.9		密	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	灰褐色・焦褐色
93	C-2	SE-0-5	T	腰灰陶	9.8	5.8	3.8		密	良好	淡乳褐色	高台部削り出し	灰褐色・綠褐色
94	C-2	SE-0-5	T	広茶碗	11.0	6.0	5.5		密	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	内外面に灰褐色
95	C-2	SE-0-5	T	小瓶	6.0	3.8	3.0		密	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	内外面に灰褐色
96	C-2	SE-0-5	T	小环	4.2	2.6	3.6		密	良好	淡乳褐色	高台部削り出し	内外面に灰褐色
97	C-2	SE-0-5	T	灯明皿	10.4	2.3	5.3		密	良好	淡褐色	体外端下平軸輪ヘラケズリ	外外面に焦褐色
98	C-2	SE-0-5	T	丸瓶	11.8	3.3	5.8		密	良好	淡茶褐色	体外端下平軸輪ヘラケズリ	口縁部・底丸窓、灰褐色、灰青色
99	C-2	SE-0-5	T	丸瓶	11.3	3.2	5.7		密	良好	淡褐色	高台部削り出し	内外面に灰褐色
100	C-2	SE-0-5	T	盤打皿	12.4	3.6	6.0		密	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	内外面に灰褐色
101	C-2	SE-0-5	T	灯明皿	7.6	1.8	3.0		書	良好	淡灰褐色	体外端下平軸輪ヘラケズリ	外外面に焦褐色
102	C-2	SE-0-5	T	灯明皿	7.2	1.4	3.8		密	良好	淡褐色	体外端下平軸輪ヘラケズリ	外外面に焦褐色
103	C-2	SE-0-5	T	馬の目皿	2.2	2.8	(3.6)		密	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	石踏石・面上に焦褐色
104	C-2	SE-0-5	T	蓋	2.2	1.7		最大径3.5	密	良好	淡乳褐色	口縁部削り出し	長石踏・面上に焦褐色
105	C-2	SE-0-5	T	蓋	7.1	1.8		最大径8.8	密	良好	淡褐色	内外面削り出し	天井部外面に灰褐色
106	C-2	SE-0-5	T	蓋	6.4	(2.2)		最大径8.9	密	良好	淡乳褐色	内外面削り出し	天井部外面に灰褐色
107	C-2	SE-0-5	T	水滴	8.5	1.6			密	良好	淡乳褐色	内面アマ・指押さえ	水滴の上部・黄褐色
108	C-2	SE-0-5	T	口片	10.9	5.2	4.6		密	良好	淡灰褐色	体外端下平軸輪ヘラケズリ	内外面に灰褐色
109	C-2	SE-0-5	T	鑊	18.6	6.0	8.4		密	良好	淡褐色	体外端下平軸輪ヘラケズリ	外外面に焦褐色、剥落あり
110	C-2	SE-0-5	T	鑊	3.7	1.6	1.4	最大径5.6	密	良好	淡褐色	体外端下平軸輪ヘラケズリ	外外面に焦褐色
111	C-2	SE-0-5	T	耳有瓶	6.7	8.3	5.4	最大径9.4	密	良好	淡褐色	体外端下平軸輪ヘラケズリ	外外面に灰褐色
112	C-2	SE-0-5	T	利	(1.8.6)	1.0.1	最大径1.5.2		密	良好	淡白褐色	高台部削り出し	内外面に焦褐色
113	C-2	SE-0-5	T	蓋	2.4.8	(7.5)			密	良好	淡褐色	体外端下平軸輪ヘラケズリ	内外面に焦褐色
114	C-2	SE-0-5	T	棒槌鍋	17.2	(6.6)			密	良好	淡褐色	体外端下平軸輪ヘラケズリ	内外面に焦褐色
115	C-2	SE-0-5	T	小型鍋	6.7	3.0	2.7		密	良好	淡乳褐色	体外端下平軸輪ヘラケズリ	内外面に焦褐色
116	C-2	SE-0-5	T	小瓶		(4.1)	2.4	最大径3.2	密	良好	淡乳褐色	底部外周面削り	外外面に灰褐色
117	C-2	SE-0-5	T	仏具	6.9	4.7	3.6		密	良好	淡乳褐色	口縁部削り出し	内外面に灰褐色
118	C-2	SE-0-5	Z	広茶碗	9.9	5.6	5.0		密	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	内外面に灰褐色
119	C-2	SE-0-5	Z	環足碗	9.3	4.9	4.2		密	良好	淡灰白色	高台部削り出し	内外面に灰褐色
120	C-2	SE-0-5	Z	小瓶	7.0	2.3	2.8		密	良好	淡灰白色	高台部削り出し	染付灰褐色
121	C-2	SE-0-5	Z	海舟	7.3	5.7	3.4		密	良好	淡白色	高台部削り出し	染付灰褐色
122	C-2	SE-0-5	Z	紅皿	4.5	1.4	1.3		密	良好	白色	高台部削り出し	白磁付紅皿
123	C-2	SE-0-5	Z	小瓶		(8.0)	3.6	最大径5.9	密	良好	白色	高台部削り出し	染付小瓶
124	C-2	SE-0-5	T	仏龕具	6.8	6.3	3.7		密	良好	淡灰白色	脚部削り出し	染付
125	C-2	SE-0-5	H	小瓶	8.4	1.8			密	良好	淡褐色	外表面アマ・指押さえ	底部に穿孔2ヶ所
126	C-2	SE-0-5	H	小瓶	8.8	2.3			密	良好	淡褐色	外表面アマ・指押さえ	底部に穿孔1ヶ所
127	C-2	SE-0-5	H	小瓶	9.1	1.9			密	良好	淡褐色	脚部削り出し	染付
128	C-2	SE-0-5	H	漏	3.8.9	(6.9)			密	良好	淡褐色	外表面アマ・指押さえ	底部に穿孔2ヶ所
129	C-2	SE-0-5	T	刷毛	2.1.6	(9.8)			密	良好	淡褐色	体外端下平軸輪ヘラケズリ	染付灰褐色
130	C-2	SE-0-5	T	燒造壺	7.2	1.9			密	良好	淡褐色	ナダによる丁寧な整形	内面に布目模
131	C-2	SE-0-5	H	燒造壺	4.3	7.3			密	良好	淡褐色	ナダによる整形	内面に布目模
132	C-2	SE-0-5	I	眞寶	直径2.3			重量19g					寛皮で締じた痕跡あり
133	C-2	SE-0-5	I	眞寶	直径2.5			重量31g					「全久」と墨書き
134	C-2	SE-0-5	I	眞寶	直径2.5			重量32g					寛皮で締じた痕跡あり
135	C-2	SE-0-5	N	軒平瓦					密	良好	淡灰色		
136	C-2	SE-0-5	N	軒平瓦					密	良好	淡灰色		
137	C-2	SE-0-5	N	軒瓦瓦					密	良好	淡灰色		
12- 138	C-2	SE-0-5	W	不明	幅12.5	内寸7	厚0.6						
139	C-2	SE-0-5	W	蓋?	幅10.8	幅3.7	厚0.4						
140	C-2	SE-0-5	W	不明	幅(1.1)	幅(1.8)	厚2.4						

固形・液体	地区	道場	器種	分解	口径	高径	底径	その他	胎土	焼成	色調	調整等	参考
32 - 141	C - 2	SE - 0.5	W 不明	葦(1.0)	径(7.6)	厚1.3						内部に黒漆が2層以上 後による接縫2条	
142	C - 2	SE - 0.5	W 曲面底板	径1.0		厚1.6							
143	C - 2	SE - 0.5	W 曲面底板	径7.0		厚0.6							
144	C - 2	SE - 0.5	W 插底板	径1.6		厚1.7							
145	C - 2	SE - 0.5	W 植物柄	幅5.3	横1.1.5	厚1.4						外面にカギの痕跡を有する	
146	C - 3	SE - 0.6	T 丸瓶	1.1.4	7.4	3.4			審	良好	淡灰褐色	各部外削下寸胴輪ヘラケズリ 内外面に灰釉	
147	C - 3	SE - 0.6	T 瓶		(2.3)	4.4			審	良好	淡乳褐色	高台部削り出し 背部-足部外削下寸胴輪ヘラケズリ	背部-足部外削下寸胴輪に墨書き「長久」印記
148	C - 3	SE - 0.6	T 灯明皿	9.2	2.1	2.8			審	良好	淡灰褐色	底部外削輪ヘラケズリ 内外面に灰釉	
149	C - 3	SE - 0.6	T 丸皿	10.3	2.2	4.2			審	良好	淡灰褐色	各部外削下寸胴輪ヘラケズリ 内外面に灰釉	
150	C - 3	SE - 0.6	T 瓶	9.2	1.2	(2.4)			審	良好	淡黃白色	高台部削り出し 背部-足部外削下寸胴輪ヘラケズリ	黃蘿口/第4
151	C - 3	SE - 0.6	T 灯明皿	7.9	1.8	3.4			審	良好	暗灰褐色	各部外削下寸胴輪ヘラケズリ 内外面に灰釉	
152	C - 3	SE - 0.6	T 灯明皿	10.0	2.6	4.8			審	良好	淡灰褐色	各部外削下寸胴輪ヘラケズリ 内外面に灰釉	
153	C - 3	SE - 0.6	T 瓶	7.8	2.0		最大径11.0		審	良好	淡灰白色	天端部外削に灰釉	
154	C - 3	SE - 0.6	T 火らしい		(11.1.3)	5.8			審	良好	淡乳褐色	各部外削下寸胴輪ヘラケズリ 内外面に灰釉	
155	C - 3	SE - 0.6	T 火らしい		(11.2.5)	9.8			審	良好	淡灰褐色	高台部削り出し 背部-足部外削	
156	C - 3	SE - 0.6	T 底落盃	4.1	7.5	4.7			審	良好	淡灰褐色	底部外削切り	灰釉+執拂掛け分け
157	C - 3	SE - 0.6	T 林	19.0	8.7	11.4			審	良好	淡灰褐色	各部外削下寸胴輪ヘラケズリ 内外面に灰釉-志 <sup>シ</sup> に灰釉?	
158	C - 3	SE - 0.6	T 折枝瓶	2.8	8.9	9.0			審	良好	灰褐色	各部外削下寸胴輪ヘラケズリ 灰釉+執拂	
159	C - 3	SE - 0.6	T 折枝瓶	2.5.6	9.3	10.8			審	良好	淡灰褐色	各部外削下寸胴輪ヘラケズリ 内外面に灰釉	
160	C - 3	SE - 0.6	T 仏花瓶		(4.3)		最大径8.2		審	良好	白	各部外削下寸胴輪ヘラケズリ 灰釉+執拂	
161	C - 3	SE - 0.6	T 瓶		(1.0.5)				審	良好	赤褐色	口縁部削輪ナダ	常滑窑、市物
162	C - 3	SE - 0.6	Z 丸瓶	7.8	4.5	3.2			審	良好	淡灰白色	高台部削り出し	
163	C - 3	SE - 0.6	Z 丸瓶	9.2	4.0	4.3			審	良好	淡灰白色	高台部削り出し	
164	C - 3	SE - 0.6	Z 丸瓶	9.9	5.6	4.0			審	良好	白	高台部削り出し	
13 - 165	C - 3	SE - 0.6	Z 丸瓶	10.3	6.1	4.1			審	良好	白	高台部削り出し	象付丸瓶
166	C - 3	SE - 0.6	Z 丸瓶	9.7	5.0	3.7			審	良好	白	高台部削り出し	象付丸瓶
167	C - 3	SE - 0.6	Z 海舟	7.4	5.2	3.9			審	良好	白色	高台部削り出し	象付海舟
168	C - 3	SE - 0.6	Z 芭蕉団子	9.2	6.6	6.2			審	良好	淡乳褐色	高台部削り出し	象付-芭
169	C - 3	SE - 0.6	Z 丸皿	13.3	2.8	7.9			審	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	象付丸皿
170	C - 3	SE - 0.6	T 直打瓶	10.5	2.6	6.2			審	良好	白	高台部削り出し	象付直打瓶
171	C - 3	SE - 0.6	H 瓶	10.2	2.2	5.2			審	良好	淡灰褐色	底部外削切り	ロクロ整形
172	C - 3	SE - 0.6	H 小皿	7.9	1.6	4.1			審	良好	淡灰褐色	底部外削切り	口縁部削打欠き
173	C - 3	SE - 0.6	H 小皿	8.4	1.9	4.8			審	良好	淡灰褐色	底部外削切り	口縁部削打欠き、油漬着
174	C - 3	SE - 0.6	H 小皿	7.2	1.9				審	良好	淡灰褐色	底部外削切り	口縁部削打欠き、油漬着
175	C - 3	SE - 0.6	H 小皿	9.6	2.1	5			審	良好	淡灰褐色	底部外削切り	底部に穿孔
176	C - 3	SE - 0.6	H 袋足壺	7.4	2.4	2			審	良好	淡系褐色	ナデによる丁寧な整型	内面に布目模
177	C - 3	SE - 0.6	H 備燒窯	5.0	(3.7)				審	良好	淡灰褐色	ナデによる丁寧な整型	内面に布目模
178	C - 3	SE - 0.6	H 燐蒸器	5.6	(8.2)				やや粗雑	良好	淡灰褐色	ナデによる整型	
179	C - 3	SE - 0.6	H 瓶	31.6	(8.8)				審	良好	淡灰褐色	各部外削下寸胴輪ヘラケズリ 半底形崩	
180	C - 3	SE - 0.6	T 火鉢		(8.5)				審	良好	淡赤褐色	口縁部削輪ナダ	内面に煤付着
181	C - 3	SE - 0.6	T 積造竈		(10.6.1.0)	8.3			審	良好	淡赤褐色	底部外削下寸胴輪	内面に煤付着
182	C - 3	SE - 0.6	D 土瓶	II.2.8	径0.6	高0.3			審	良好	淡赤褐色	ナデ-指拂えによる整型	
183	C - 3	SE - 0.6	N 斧瓦						審	良好	灰白色	ナデ調整	
184	C - 3	SE - 0.6	N 斧丸瓦						審	良好	灰白色	ナデ調整	
185	C - 3	SE - 0.6	W 滾		(2.5)							内面赤錆、外面黒漆	
186	C - 3	SE - 0.6	W 本札	木札	長(22.2)	幅0.9	厚0.7						墨書きあり
187	C - 3	SE - 0.6	W 不明	長9.7	幅1.4	厚1.4							
188	C - 3	SE - 0.6	W 楠板	徑19.0		厚1.0							
189	C - 3	SE - 0.6	W 滾	4.7	幅10.8	厚1.2							189の底板
190	C - 3	SE - 0.6	W 滾-楕円板	II.2.8		厚2.5							
14 - 191	A - 1	SK-153-12	T 香炉	8.4	3.9	4.8			審	良好	淡灰褐色	各部外削下寸胴輪ヘラケズリ 口縁部に灰釉	
192	A - 1	SK-153-12	T 林		(4.2)	8.8			審	良好	淡灰褐色	各部外削輪ヘラケズリ 外面に灰釉	
193	A - 1	SK-153-12	T 土瓶	7.6	11.1	9.2	最大径18.5		審	良好	淡灰褐色	各部外削下寸胴輪ヘラケズリ 外面に灰釉	
194	A - 1	SK-153-12	Z 丸瓶	8.4	5.0	3.2			審	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	
195	A - 1	SK-153-12	Z 小瓶		(8.5)	3.8	最大径5.8		審	良好	白	高台部削り出し	象付小瓶
196	A - 2	SK - 10	P 瓶	13.8	(3.8)				審	良好	灰白色	口縁部削輪ナダ	
197	A - 2	SK - 10	H 瓶		(1.2)				やや粗雑	良好	淡系褐色	口縁部コナダ	伊勢型瓶
198	A - 2	SK - 78	P 瓶		(2.1)	5.9			審	良好	灰白色	内面削輪ナダ	
199	A - 2	SK - 78	P 瓶	15.0	(3.6)				審	良好	淡灰褐色	口縁部削輪ナダ	
200	A - 2	SK - 86	P 瓶	14.3	5.1	7.0			審	良好	淡灰褐色	底部外削切り後ナダ	高台部に砂粒痕
201	A - 2	SK - 96	P 瓶		(3.3)	7.3			審	良好	淡灰褐色	底部外削切り後ナダ	高台部に灰斑痕
202	A - 2	SK - 97	K 瓶		(1.7)	7.5			審	良好	淡灰褐色	内面削輪ナダ	内面に灰斑痕
203	A - 3	SK - 103	P 瓶	15.6	(5.2)				やや粗雑	良好	淡灰褐色	底部外削切り後ナダ	
204	A - 2	SK-153-10	H 瓶	27.2	(7.8)				審	良好	茶褐色	口縁部コナダ	外面上に煤付着
205	A - 2	SK-153-10	H 小瓶	1.4	(2.4)				審	良好	淡灰褐色	口縁部削輪ナダ	
206	A - 3	SK - 29	T 丸瓶	11.4	(6.2)				審	良好	淡灰褐色	各部外削下寸胴輪ヘラケズリ	内面に灰釉
207	A - 3	SK - 29	T 灯明皿	8.8	2.0	4.0			審	良好	暗灰褐色	各部外削下寸胴輪ヘラケズリ	内面に灰釉
208	A - 3	SK - 29	T 鎔鉢	3.4.2	1.5.2	1.4.6			審	良好	淡灰褐色	各部外削下寸胴輪ヘラケズリ	内面に灰釉
209	A - 3	SK - 29	T 樹脂	3.1	2.0.6	7.3	最大径12.7		審	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	灰釉+執拂掛け分け
210	A - 3	SK - 29	T 上瓶/瓶		(1.9)	7.2			審	良好	淡灰褐色	底部外削輪ヘラケズリ	外に焦痕、内面に灰斑

回数・遺物名	地区	遺物	器種	分類	口径	器高	底径	その他	胎土	焼成	色調	調査等	備考	
14 - 211	A - 3	SK - 29	Z	広東碗	11.4	6.2	5.6		密	良好	淡灰色	高台部削り出し	染付広東碗	
212	A - 3	SK - 29	Z	端反碗	10.9	5.7	4.2		密	良好	白色	高台部削り出し	染付端反碗	
213	A - 3	SK - 29	Z	丸碗	8.2	5.0	3.2		密	良好	淡灰白色	高台部削り出し	染付丸碗	
214	A - 3	SK - 29	Z	丸碗	9.0	5.1	3.3		密	良好	淡灰白色	高台部削り出し	染付丸碗	
215	A - 3	SK - 29	Z	丸皿	13.4	3.8	7.2		密	良好	淡所白色	高台部削り出し	染付丸皿	
216	A - 3	SK - 29	Z	蓋	8.7	2.4			密	良好	白色	側面部削り出し		
217	A - 3	SK - 29	H	信書	(4.3)				密	良好	茶褐色	体外面部下部ハラケズリ	外面部に墨付着	
218	A - 3	SK - 29	T	風呂勺	19.2	(7.7)			密	良好	暗褐色	ナマ指捺さによる變形	口縁部部が焼ける	
15 - 219	A - 3	SK - 29	T	鍔造勺	17.8	2.8	14.6		密	良好	赤褐色	底部外表面未整	内面部に墨付着	
220	A - 3	SK - 29	N	鏡鉢	9.8	1.9	18.8		密	良好	暗灰褐色	底部内面ナデ	内部が二重になる	
221	A - 3	SK - 29	D	土人形	65.5	5.2	2.9		密	良好	黑色	型成形	瓦質	
222	A - 3	SK - 29	D	土人形	51.1	4.9	2.8		密	良好	淡乳褐色	型成形	緑色の釉	
223	A - 3	SK - 29	R	火打石	耀4.1	横2.2	厚1.2	重量 8.5 g				右質 - チャート (縦)	全体的にローリング	
224	A - 3	SK - 29	N	軒平瓦					密	良好	灰色			
225	A - 3	SK - 29	N	軒丸瓦					密	良好	淡褐色	内面ナデ調整	丸瓦部に墨付	
226	B - 1	SK - 8	P	碗	(2.0)	6.2			密	良好	淡灰褐色	底部外表面赤切り後ナマ	高台部に砂押痕	
227	B - 1	SK - 8	P	碗	(1.6)	6.4			密	良好	淡灰褐色	底部外表面赤切り	高台部に初期痕	
228	B - 1	SK - 8	P	小皿	8.1	1.6	5.8		密	良好	淡乳白色	底部外表面赤切り		
229	B - 1	SK - 15	T	志村丸皿	(1.9)				密	良好	淡褐色	口縁部削除ナマ	外面部に長石粉/大窓1後	
230	B - 1	SK - 15	T	折沿盤	(1.0)	7.4			密	良好	淡乳褐色	高台部削り出し	外面部瓦質/登1	
231	B - 1	SK - 15	T	盤	(3.8)				密	良好	淡褐色	体外面部下部ハラケズリ	内面部に鉄斑	
232	B - 1	SK - 15	H	加工凹盤	8.1~1.4	厚0.5			密	良好	明褐色	土器器小口の口縁部片を加工		
233	B - 1	SK - 21	T	折沿盤	(3.5)				密	良好	淡乳褐色	口縁部削除ナマ	外面部に灰褐色/登1	
234	B - 1	SK - 21	H	小皿	8.2	1.9			密	良好	淡乳褐色	外面部ナマ・指捺さえ	口縁部に僅く付着	
235	B - 1	SK - 31	T	内堀皿	10.2	2.2	6.0		密	良好	淡乳褐色	体外面部下部ハラケズリ	外面部に灰褐色/大窓3後	
236	B - 1	SK - 40	Z	丸碗	10.4	(5.1)			密	良好	淡灰白色	口縁部削除ナマ	染付丸碗	
237	B - 1	SK - 40	Z	丸碗	9.8	(5.3)			密	良好	淡灰白色	口縁部削除ナマ	染付丸碗	
238	B - 1	SK - 40	Z	小皿	7.4	1.7			密	良好	淡褐色	ナマ・指捺さによる變形		
239	B - 1	SK - 74	H	粘土製品	(7.9)	4.8			密	良好	明褐色	外面部ナマ・指捺さえ		
240	B - 1	SK - 74	H	皿	11.1	(2.1)			やや粗雑	良好	明褐色	口縁部ヨコヨコ		
241	B - 1	M-5/3-3	P	瓶	15.4	5.1	6.4		やや粗雑	良好	淡灰褐色	底部外表面赤切り		
242	B - 1	SK - 42	T	盤	3.6	1.5	1.6	4	密	良好	淡褐色	体外面部下部ハラケズリ	外面部に鉄斑、内面部に削	
16 - 243	B - 1	SK - 42	T	土瓶	8.5	11.4	8.4	最大径 14.2	密	良好	淡褐色	底部外表面ハラケズリ	外面部に鉄斑	
244	B - 1	SK - 42	T	土瓶蓋	7.7	2.2			密	良好	淡褐色	内面部削除ナマ	天井部外表面鉄斑	
245	B - 1	SK - 42	T	落とし蓋	2.2	1.4			密	良好	暗褐色	底部外表面赤切り	内面部に鉄斑	
246	B - 1	SK - 42	T	蓋	6.8	2.6	3.5	4	密	良好	赤褐色	内面部コナマ・指捺さえ	外面部に鉄斑	
247	B - 1	SK - 42	T	丸瓶	10.4	5.8	4.0		密	良好	白色	高台部削り出し	染付丸瓶	
248	B - 1	SK - 42	Z	丸皿	9.6	3.0	3.8		密	良好	白色	高台部削り出し	染付丸皿	
249	B - 1	SK - 42	Z	粗陶具	(4.4)	3.6			密	良好	白色	脚部削除ハラケズリ	染付	
250	B - 1	SK - 42	T	鍔造勺	17.4	2.7	14.6		密	良好	淡褐色	内面部ナマ・指捺さえ	内面部に墨付着	
251	B - 1	SK - 42	T	鍔	13.0	5.8	2.3		密	良好	淡褐色	内面部ナマ・指捺さえ	手斧先	
252	B - 2	SK - 113	T	加工盤	11.1~1.2	厚3.5~3.8			密	良好	淡乳褐色	脚部擦傷を加工		
253	B - 2	SK - 224	H	加工皿	11.1~1.8	厚0.4			密	良好	淡褐色	土器器小窓を加工		
254	B-C-1	SK - 38	T	白日本刷	(7.6)	4.6			密	良好	淡褐色	体外面部下部ハラケズリ	内面部に鉄斑・窓2	
255	B-C-1	SK - 38	T	天目茶碗	1.0	(5.4)			密	良好	淡褐色	体外面部下部ハラケズリ	外面部に鉄斑・大窓4後	
256	B-C-1	SK - 38	T	丸碗	1.1	(5.2)			密	良好	淡褐色	体外面部下部ハラケズリ	内面部に灰褐色・大窓4前	
257	B-C-1	SK - 38	T	端反碗	8.4	5.2	3.4		密	良好	淡乳褐色	高台部削り出し	染付端反	
258	B-C-1	SK - 38	T	丸皿	10.0	2.7	5.2		密	良好	灰白色	体外面部下部ハラケズリ	外面部に灰褐色・大窓2	
259	B-C-1	SK - 38	T	丸皿	12.8	3.3	7.6		密	良好	灰褐色	高台部削り出し	内面部に灰褐色	
260	B-C-1	SK - 38	T	折沿盤	2.5	2.6	(2.8)		密	良好	淡褐色	口縁部削除ナマ	外面部に鉄斑	
261	B-C-1	SK - 38	T	盤	(4.1)				密	良好	淡乳褐色	口縁部削除ナマ	外面部に鉄斑・大窓4前	
262	B-C-1	SK - 38	H	鍋	2.5	1.4			密	良好	淡褐色	底部外表面ハラケズリ	半埋削開、外面部に墨付着	
17 - 263	B - 2	SK - 66	Z	端反皿	14.6	3.3	5.9		密	良好	淡灰白色	高台部削り出し	染付端反裏	
264	B - 2	SK - 66	Z	丸皿	11.2	2.1	6.4		密	良好	白色	高台部削り出し	内面部に灰褐色	
265	B - 2	SK - 169	P	碗	14.8	(3.8)			密	良好	淡褐色	口縁部削除ナマ	内面部に灰褐色	
266	B - 2	SK - 200	P	碗	(2.7)	6.4			密	良好	淡褐色	底部外表面赤切り	口縁部・割れ口に保付着	
267	B - 3	SK - 62	T	肴皿	13.2	3.0	6.2		密	良好	淡褐色	高台部削り出し	内面部に灰褐色	
268	B - 3	SK - 62	T	灯明皿	7.3	1.2	3.1		密	良好	灰褐色	体外面部下部ハラケズリナマ	内面部に鉄斑	
269	B - 3	SK - 62	T	盤	(4.5)				密	良好	淡灰褐色	脚部削除ハラケズリナマ	内面部に灰褐色	
270	B - 3	SK - 23	H	小皿	7.7	1.7	4.5		やや不良	明褐色	底部外表面赤切り	ロクシ形態		
271	B - 3	SK - 7-01-0	P	碗	(2.1)	6.8			密	良好	淡灰褐色	底部外表面赤切り	高台部に移動痕	
272	B - 3	SK - 81	T	小碗	5.2	2.3	2.3		密	良好	淡乳褐色	体外面部下部ハラケズリ	内面部に灰褐色	
273	B - 3	SK - 81	T	丸碗	9.1	4.4	3.4		密	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	内面部に鉄斑	
274	B - 3	SK - 81	T	小环	5.5	2.8	3.9		密	良好	淡褐色	底部外表面赤切り	底部外表面に墨付	
275	B - 3	SK - 81	T	輪光瓶	18.0	5.0	5.6		密	良好	淡褐色	体外面部下部ハラケズリ	内面部に灰褐色	
276	B - 3	SK - 81	T	灯明瓶	9.4	(2.1)	4.3		密	良好	淡褐色	体外面部下部ハラケズリ	内面部に灰褐色	
277	B - 3	SK - 81	T	灯明瓶	7.2	1.7	3.2		密	良好	淡褐色	体外面部下部ハラケズリナマ	内面部に鉄斑、口縁部に墨付着	
278	B - 3	SK - 81	T	灯明文量	9.4	1.8	4.2		密	良好	淡褐色	体外面部下部ハラケズリ	内面部に灰褐色	
279	B - 3	SK - 81	T	口片	16.7	8.9	8.2		密	良好	淡褐色	体外面部下部ハラケズリ	内面部に灰褐色	
280	B - 3	SK - 81	T	落とし蓋	2.0	1.1			最大径 5.1	密	良好	淡灰褐色	内面部削除ナマ	内面部に鉄斑

国名・遺物名	地区	遺物	器種	分類	口径	高さ	底径	その他	騎士	地成	色調	調査等	備考		
17 - 281	B - 3 SK - 81	T 瓶	直	8.6 (2.4)		最大径1.1	審	良好	乳白色	内外面回転ナデ	天井部外側に灰釉				
282	B - 3 SK - 81	T 急須	直	8.8 8.0	9.0		審	良好	淡褐色	内外面回転ナデ	内外面に灰釉				
283	B - 3 SK - 81	T 錠鉢	3.4.9	14.8 15.6			審	良好	淡褐色	各部外削下回転ヘラケズリ	内外面に灰釉				
284	B - 3 SK - 81	T 鉢	19.2	8.2 9.9			審	良好	淡褐色	高台部削り出し	内外面に灰釉、火入れ?				
285	B - 3 SK - 81	T 瓶	14.8	(14.8)			審	良好	暗赤褐色	体部内面回転ナデナダ	深赤褐色				
286	B - 3 SK - 81	Z 丸瓶	7.0	4.4 2.9			審	良好	白色	高台部削り出し	朱付丸瓶				
287	B - 3 SK - 81	Z 錠反瓶	7.9	4.5 3.2			審	良好	白色	高台部削り出し	朱付反瓶				
288	B - 3 SK - 81	Z 丸瓶	9.6	4.5 3.2			審	良好	白色	高台部削り出し	朱付丸瓶				
289	B - 3 SK - 81	Z 湯呑	7.3	3.1 3.8			審	良好	白色	高台部削り出し					
290	B - 3 SK - 81	Z 湯呑	7.0	5.0 2.8			審	良好	淡灰白色	高台部削り出し	朱付湯呑				
291	B - 3 SK - 81	Z 薬味口	7.4	5.8 4.3			審	良好	淡灰白色	高台部削り出し	朱付薬味口				
292	B - 3 SK - 81	Z 丸瓶	9.2	2.2 5.2			審	良好	白色	高台部削り出し	朱付丸瓶				
293	B - 3 SK - 81	Z 小瓶	5.4	1.8 2.2			審	良好	白色	高台部削り出し	朱付小瓶				
294	B - 3 SK - 81	Z 水注瓶	2.6	1.7			最大径6.4	審	良好	白色	内外面回転ナデ	朱付			
295	B - 3 SK - 81	Z 水注	7.1	6.5 6.7			審	良好	白色	内外面回転ナデ	朱付				
296	B - 3 SK - 81	Z 段重	12.6	4.9 7.9			審	良好	白色	高台部削り出し	朱付				
297	B - 3 SK - 81	Z 薬味瓶	5.0	1.2			審	良好	白色	内外面回転ナデ	朱付				
298	B - 3 SK - 81	Z 薬瓶	4.6	1.6 4.4			審	良好	白色	腹部外削回転ヘラケズリ	朱付、底部外面に墨書き				
299	B - 3 SK - 81	Z 小瓶	1.6	7.0 2.6			審	良好	白色	高台部削り出し	朱付小瓶				
300	B - 3 SK - 81	H 小皿	7.9	2.3			審	良好	淡褐色	内外面ナデ、指揮さえ	口縁部打ち欠き				
301	B - 3 SK - 81	H 小皿	8.0	2.8			審	良好	淡褐色	内外面ナデ、指揮さえ	把手部打ち欠き				
302	B - 3 SK - 81	H 十能	R (11.3) 厚 (1.0)				審	良好	淡灰褐色	把手部ナデ、ヘラケズリ	把手部は中央				
303	B - 3 SK - 81	R 砂石	R (11.2) 厚 1.8	厚 1.7				審	良好	白色	石質・斑岩質?				
304	B - 3 SK - 81	W 不明	R (11.7)	厚 2.8							先端部を斜めに加工	竹村			
305	B - 3 SK - 81	W 板材	R 21.5	厚 0.1	厚 2.0							板端部小			
306	B - 3 SK - 81	W 粘土粉	R 23.8	厚 0.2								先端部は丸くなる			
307	B - 3 SK - 81	-	板	長 49 4.2								シユロをもって接着している	先端部に織目あり		
308	C - 1 SK - 1	P 瓶	12.2	8 (4.4)			審	良好	淡灰色	口縁部回転ナデ					
309	C - 2 SK - 10	P 瓶	14.6	4.0 6.4			審	良好	淡灰色	腹部外削回転	高台部に砂鉄斑				
310	C - 2 SK - 61	H 小皿	8.6	(1.8)			審	良好	淡褐色	内外面ナデ、指揮さえ	口縁部に複数付着				
311	C - 3 SK - 1	T 丸皿	10.2	2.1 6.4			審	良好	淡褐色	口縁部回転ナデ	内外面に灰釉・大穴後				
312	C - 3 SK - 12	T 折線瓶	13.2	2.2 9.6			審	良好	淡灰色	各部外削下回転ヘラケズリ	内外面に灰釉				
313	C - 3 SK - 12	T 錠鉢	10.2	(3.3)			審	良好	淡乳白色	口縁部回転ナデ	内外面に灰釉・登4				
314	C - 3 SK - 103	T 瓶	3.0	2 1.5 19.2			審	良好	淡乳白色	内外面ナデ、灰釉ナデ	完品				
315	C - 3 SK - 56	H 体	10.4	5.2 10.9			審	良好	淡灰褐色	内外面ナデ、指揮さえ	桃瓶?				
316	C - 3 SK - 81	T 錠反瓶	11.4	(1.6)			審	良好	淡灰褐色	各部外削下回転ヘラケズリ	内外面に灰釉				
317	C - 3 SK - 61	T 錠鉢	5.7				審	良好	淡乳白色	口縁部回転ナデ	内外面に灰釉				
318	C - 3 SK - 61	H 燭臺	5.4	(4.5)			やや粗朶	やや粗朶	淡褐色	内外面ナデ	内外面に布目痕				
319	C - 3 SK - 49	P 瓶		(4.3) 6.8			審	良好	淡灰色	腹部外削系切り後ナデ	底部外面に墨書き				
320	C - 3 SK - 49	P 瓶		(2.2) 6.4			やや粗朶	やや粗朶	淡灰色	腹部外削系切り	高台部に斜切				
321	C - 3 SK - 49	P 片口鉢		(4.3) 9.9			更	良好	淡灰色	腹部外削系調整					
322	D - 2 SK - 18	H 燭臺	5.1	7.7			審	良好	淡褐色	内外面ナデ	布目痕無し				
323	D - 3 SK - 13	S 瓶		(3.5)			審	良好	淡乳白色	体部内面ナデ					
324	D - 3 SK - 34	H 瓶		(9.3)			やや粗朶	やや粗朶	淡褐色	体部内面ナデ・指揮さえ	伊豆型瓶				
325	D - 3 SK - 23	P 小皿	8.2	1.9 4.2			審	良好	淡灰色	腹部外削系切り					
326	D - 3 SK - 38	P 瓶	15.2	(4.2)			審	良好	淡褐色	口縁部回転ナデ					
327	D - 3 SK - 38	P 小皿	7.9	2.0 4.9			審	良好	淡灰色	腹部外削系切り	底部外面に墨書き				
19 - 328	A-B-1 表土	T 型打堀	11.5	3.2 3.9			審	良好	淡乳白色	高台部削り出し	内外面に灰釉、内外面染付				
329	B - 1 2層	T 丸瓶	9.9	4.0 3.6			審	良好	淡乳白色	内外面ナデ					
330	B - 1 2層	T 灯明瓶	7.2	1.7 2.9			審	良好	淡灰褐色	各部外削下回転ヘラケズリ	内外面に灰釉				
331	B - 1 2層	T 慈利	(1.9.6)	6.8			更	良好	淡褐色	高台部削り出し	内外面に灰釉、灰釉				
332	B - 1 2層	T 瓶	2.6 8	3 0.5 2 4.6			審	良好	淡褐色	体部内面指揮さえ後ナデ	内外面に灰釉				
333	B - 1 2層	Z 薬味口	6.4	5.7 4.4			審	良好	淡灰白色	高台部削り出し	朱付薬味口				
334	B - 1 2層	Z 湯呑	6.6	4.1 3.0			審	良好	淡灰褐色	高台部削り出し	朱付湯呑				
335	B - 1 2層	Z 丸瓶	19.9	3.6 8.8			審	良好	淡灰白色	高台部削り出し	内外面染付				
336	B - 2 表土	I 火打金	3.4	重 (1.1) 厚 0.3							既製				
337	B - 3 表土	T 手しお	2.6	2.0			最大径7.8	審	良好	淡褐色	体部外削系切り	内外面に灰釉			
338	B - 3 表土	T 灯明瓶	8.4	1.8 4.6			審	良好	淡灰褐色	各部外削下回転ヘラケズリ	内外面に灰釉				
339	C - 1 2層	T 丸瓶	11.7	7.8 4.8			審	良好	淡乳白色	高台部削り出し	内外面に灰釉 / 膜斑				
340	C - 1 2層	T 慈利	(1.9.3)	9.9			最大径17.6	審	良好	晴透褐色	口縁部回転ナデ	膜斑			
341	C - 1 2層	T 錠鉢	3.5 0	1.6 7 14.2			審	良好	淡褐色	各部外削下回転ヘラケズリ	内外面に灰釉、内外面に削印				
342	C - 1 2層	D 人形土瓶	4.6	3.2 1.5			審	良好	淡褐色	高台部削り出し	朱付丸瓶				
343	C - 1 2層	Z 小瓶	6.7	4.6 3.0			審	良好	白色	高台部削り出し					
344	C - 1 2層	Z 錠反瓶	7.6	3.3 2.9			審	良好	白色	高台部削り出し	朱付錠反瓶				
345	C - 1 2層	Z 丸瓶	11.8	2.4 6.2			審	良好	白色	高台部削り出し	朱付丸瓶				
346	C - 1 2層	H 烟袋	3.8 8	(4.8)			審	良好	淡茶褐色	底部外縁ヘラケズリ	外縁に保存着				
347	C - 1 2層	N 五徳	1.5 5	1.0 5 2 0.6			審	良好	灰白色	内外面ナデ					
348	C - 2 表土	N 丸九丸					審	良好	淡褐色	内外面ナデ	「丸に足跡」家紋瓦				
349	C - 3 表土	T 錠反瓶	11.2	2.1 6.6			審	良好	淡褐色	各部外削下回転ヘラケズリ	内外面に灰釉				
350	D - 3 表土	T 小瓶	7.9	4.6 3.8			審	良好	灰白色	各部外削系切り	内外面に灰釉				

※器物記号 H - 土器類 K - 磁器類 D - 木製品 R - 石器・石製品 P - 玻璃製品 T - 陶器・土器類 Z - 瓶類 I - 金属製品 N - 瓦・瓦質土器 W - 木製品  
法度の単位はcm ( ) は残存状態。既往には、脚部焼けや底台焼けを含む。

## 第5章 総括

### 1. 調査区の遺構変遷 (第20図)

今回の吉田城址21次調査について、I～III期に大きく分けて遺跡の変遷を見ていくことにする。

#### I期 (9～13世紀)

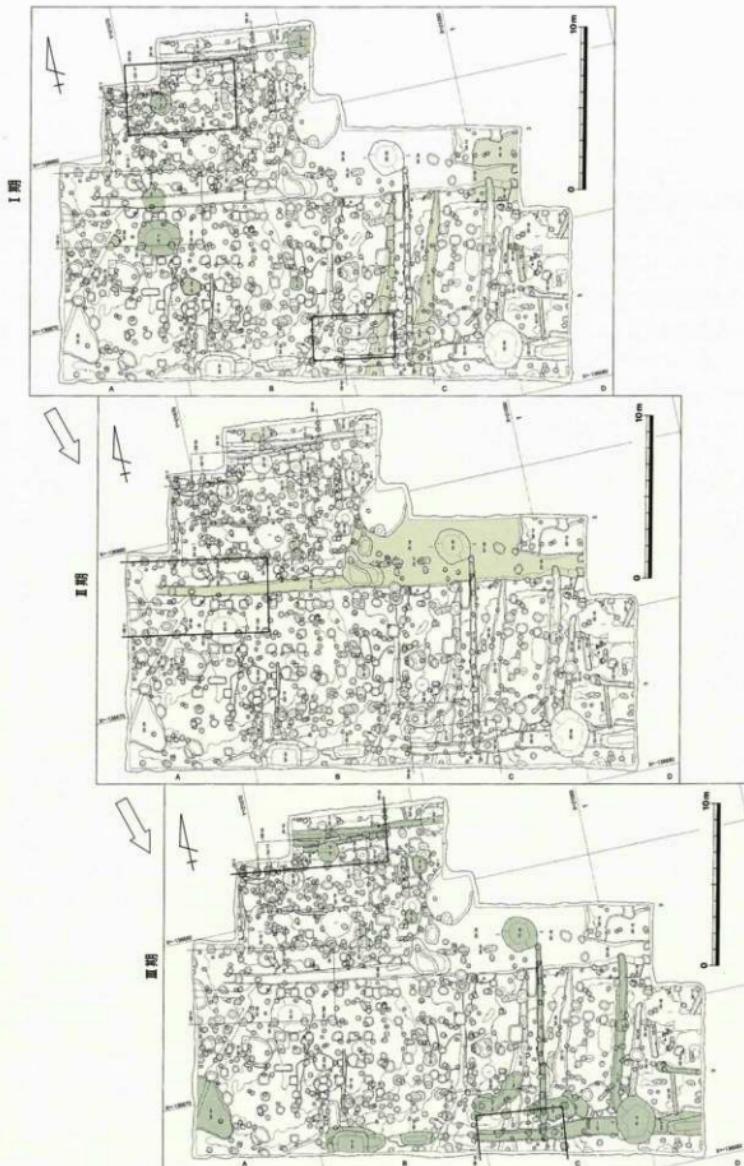
9世紀代の須恵器や10世紀代の灰釉陶器が僅かながら出土していることから、I期の始まりはこの頃と考えられる。調査区北側には、古代官衙の存在が推測される飽海遺跡が広がっているが、その南端に近いことを示しているのであろう。その後、12世紀中葉～後半にはSE-04が存在するが、他に同時期の遺構・遺物はなく、遺跡の状況はほとんどはっきりしない。陸上競技場に隣接した18次・19次調査地点(注1)や愛知県東三河事務所地点(8次調査-注2)などからも僅かに同時期の遺物が見つかっているが、集落の規模・性格等を把握することが困難である。なお、SE-04から出土した炉壁からは、周辺で小規模ながら鍛冶が行われたことを予想させる。

13世紀中葉～後半には、掘立柱建物SB-03・SB-05、井戸SE-01、溝SD-15・SD-17、土壙等や多くの遺物が確認されるようになり、I期の中で最も中心となる時期と言えよう。今回確認された建物(SB-03・05)はいずれも13世紀中葉で、主軸はそれぞれ東に10°程傾いていることから同時存在の可能性が高い。また溝(SD-15・17)はいずれも13世紀後半で、主軸がそれぞれ東に18°程傾き並行していることからこれも同時存在していたのであろう。そしてこの溝は、断面形が浅く区画溝と言うよりも道の側溝の可能性が考えられる。なお、隣接する愛知県東三河事務所地点で確認された13世紀前半を主体とした溝は、主軸が西に30～40°傾くものが多い。これらのことから13世紀という時期は、小規模な範囲で集落が少しずつ形成され始めた時期と言えよう。但し、このような13世紀代の集落は周辺の調査区でも多く見つかっているが、いずれも本調査区と同様に14世紀代に続くことはなく絶する。

#### II期 (16～17世紀)

永正2(1505)年に今橋城が築城され池田照政(輝政)が吉田城主となる直前の時期において、隣接した18次・19次調査地点や愛知県東三河事務所地点ではほとんど遺構は見つかっていない。一方南東の14次・15次調査地点ではそれぞれ井戸が1基検出されているが、詳細な時期や位置付けは不明である。今回確認されたSB-01についてはこうした時期の遺構と考えられるが、中世吉田城の中での位置付けははっきりしない。

一方、SD-08やそれに接するB・C-2区SK-38については、大窯第4段階に位置付けられることから、池田照政による吉田城大改修時の遺構である可能性が高い。特にSD-08は、東西方に向直線的に延び、その幅や深さも比較的一定している規格性の高い溝である。このため、家臣屋敷地の区画溝と考えられ、16世紀末～17世紀初頭の段階に吉田城の屋敷地整備がこの範囲まで及んでた



第20図 調査区構造変遷図（1／300）

ことは確かであろう。但し、このSD-08出土の遺物は僅かでその後の遺物もないことから、区画溝としてはほとんど継続していないようである。また、それ以降の17世紀代についても遺構・遺物は照政期以前と同じで極めて少ない。さらに18次・19次調査地点でも同じように17世紀～18世紀前葉の陶磁器は僅かでこれに伴う遺構は見つかっておらず、愛知県東三河事務所地点では区画溝以外の屋敷地内の遺構は非常に少ない。これらのことから江戸時代前期においては、本丸から最も離れ外堀に近いこの周辺では藩士屋敷地はあまり機能していなかった可能性が高い。

### Ⅲ期（18～19世紀中葉）

今回の調査の中心となる時期で、図に示した以外にも多くの遺構が該当しよう。江戸時代前期にはあまり機能していないと推測される調査区周辺の藩士屋敷地であるが、この時期になると建物・井戸・土壌・区画溝など様々な遺構と多数の遺物が見られるようになり、幕末まで藩士屋敷地として続いたことは明らかである。

豊橋市都市計画基本図と「參州吉田城図」（豊橋市中央図書館所蔵－享保12(1726)年～1800年代前半作製）を合成した図面（注3－第3図参照）からすると、本調査地は南北方向の小路（袋小路）と東西方向の小路が接する角地の屋敷地付近に相当し、北側には東西方向の屋敷地境が想定される。なお、天保6(1835)年～嘉永2(1849)年の間に作製されたとされる「吉田藩士屋敷図」（豊橋市美術博物館所蔵）によると、この屋敷地は「澤 平八」邸に比定され、調査区はその邸内にはば収まっている。

図面上では屋敷地北側の地境の主軸はN-82°-Wで、ほぼ同位置で検出されたSD-11の主軸がN-85°-Wであることから、この溝が小路の南側側溝あるいは屋敷地の区画溝である可能性が高い。但し、SB-02がこの溝を越えて想定されたり、愛知県東三河事務所地点で検出されている区画溝（幅1.5～2.5m程、深さ0.5m前後）と比べて規模が小さいことから若干の不安が残る。これ以外の溝については、SD-01の主軸がN-81°-Wで、これも図面上の屋敷地北側の地境とほぼ並行している。また、屋敷地西側の地境が図面上でN-13°-Eを測り、SD-07がN-14°-Eではほぼ並行し、SD-16もN-10°-Eでかなり近い。このことから、相互の関連性はかなり高く、屋敷地内の溝（SD-01・SD-07）であったり目隠し塀に伴う溝（SD-16）などであろう。

屋敷地内の建物については、やや不確かなSB-02を除いてSB-04しか確認できていないが、その柱穴は根石を伴わないものであった。またこれ以外の柱穴状の土壌も多くは根石がなく、出土した瓦の量もそれほど多くないことから、瓦葺き建物の存在は僅かであろう。

井戸については、SE-02・SE-05・SE-06の3基が確認され、いずれも19世紀前半～中葉にはその機能を停止している。実際に機能した時期を特定することは難しいが、屋敷地の区割りは江戸時代を通じて大きく変わっていない（注4）ことから、同一屋敷地内に3基が併存した可能性も十分に推測される。

なお、明治18(1885)年には旧日本陸軍歩兵第十八聯隊が吉田城址に設置され、これに伴ってこの地にも関連した建物が建てられたようである。A・B-1・2区あたりに見られる一辺50～70cm、深さ10～20cm程の方形土壌には根石が入っており、それらから礎石建ち建物であったと推測される。

## 2. まとめにかえて

今回の21次調査では、大きく3期に分けて捉えることができ、中世集落の様相、照政期の吉田城大改修、18世紀以降の藩士屋敷地の状況などが明らかとなった。

本調査地や愛知県東三河事務所地点などの周辺で確認された13世紀代の集落は、掘立柱建物や井戸・土壌などが確認されているが、溝や建物の方向性がそれぞれで異なることなどから計画性をもった規模の大きな集落とは考えにくい。この調査地の周辺には「鏡海神戸」や「吉田御園」等が設置されたとされるが、そうしたことも含めてそれらとの関連性を示すものは確認されていない（注6）。また、この集落は14世紀には続かず消滅あるいは他へ移動した可能性が考えられるが、その原因は不明である。なお、14世紀から16世紀までの遺構・遺物はほとんど確認されず、今橋城や中世吉田城がこのあたりまで及ぶことはなかったようである。

愛知県東三河事務所地点でおぼろげながら確認された照政期における吉田城整備は、本調査地でも確認され、その整備が広範囲に及んでいたことを裏付けた。しかしながら、17世紀代の様相はほとんど把握することができない。これは、池田照政の姫路転封後の財政的な縮小を端的に示したものであろう。藩の石高が照政の15万2千石から17世紀代の城主では3～5万石と1/3～1/5程度になつたため、武家屋敷では藩士1名につき数軒から10軒を越える家が割り与えられているようである（注5）。当然空き屋敷も存在するであろうから、今回の調査地や愛知県東三河事務所地点での結果はこうした状況を示しているのであろう。

また、18世紀以降の城主では石高は7～8万石となり家臣の数も増えている。調査結果からは、そうした空き屋敷が存在していたという状況が少なからず解消されたことを読み取ることができる。

注1 豊橋市教育委員会 2000『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第55集 吉田城址(IV)』

豊橋市教育委員会 2003『豊橋市埋蔵文化財調査報告書第63集 吉田城址(V)』

注2 (財)愛知県埋蔵文化財センター1995『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第59集 吉田城遺跡II』

注3 (財)愛知県埋蔵文化財センター1992『愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第26集 吉田城遺跡』

注4 注3と同じ

注5 豊橋市史編集委員会 1975『豊橋市史 第2巻』

注6 注2と同じ

## 報告書抄録

ふりがな	よしだじょうし(しち)						
書名	吉田城址(Ⅶ)						
副書名							
卷次							
シリーズ名	豊橋市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第86集						
編著者名	小林久彦						
編集機関	豊橋市教育委員会						
所在地	〒440-0801 愛知県豊橋市今橋町3番地の1 TEL 0532-51-2879						
発行年	西暦2006年3月31日						

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ° °	東經 ° ° °	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
		市町村	遺跡番号					
よしだじょうし 吉田城址	とよしじはっじょうじ 豊橋市八町通 4丁目19他	23201	79393	34度 45分 03秒	137度 23分 48秒	20040622～ 20041029	590m <sup>2</sup>	マンション建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
吉田城址	城館	中世～近世	掘立柱建物 井戸 溝 土壙	陶器、磁器、土師器 灰釉系陶器、木製品			藩士屋敷地の状況が 確認される。	

# 写 真 図 版



## 写真図版 1



1. 調査前状況-1  
(西から)



2. 調査前状況-2  
(南東から)



3. 表土剥き状況  
(東から)

写真図版2



1. 調査区全景（垂直）



2. 調査区全景（南から）

写真図版 3



1. 調査区東側全景（西から）



2. SB-01全景（南から）

写真図版 4



1. SD-04・07全景（北から）



2. SD-04・07全景（南から）



3. SD-15・16・17全景（北から）



4. SD-15・16・17全景（南から）

写真図版 5



1. SD-08全景（西から）



2. SD-08・SK-38全景（西から）

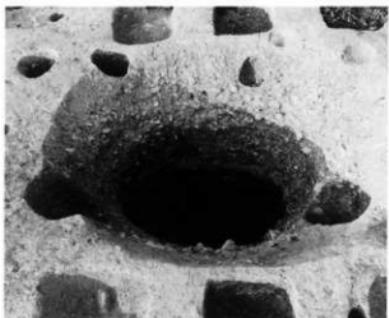


3. SD-09・11全景（西から）

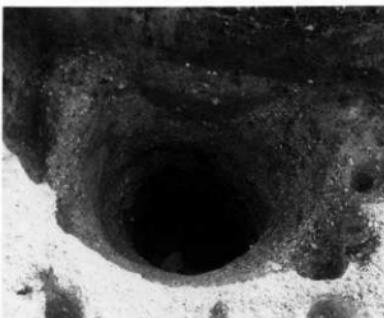


4. SD-09・11全景（東から）

写真図版 6



1. A-2区SE-01全景（南から）



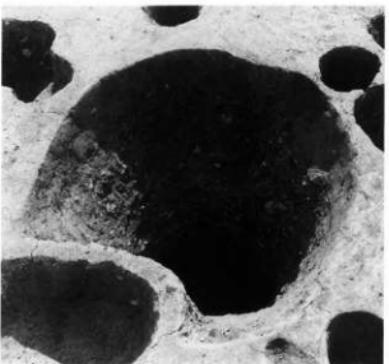
3. C-1区SE-04全景（南西から）



2. A-2区SE-01断割り（東から）



4. C-1区SE-04断割り（南西から）

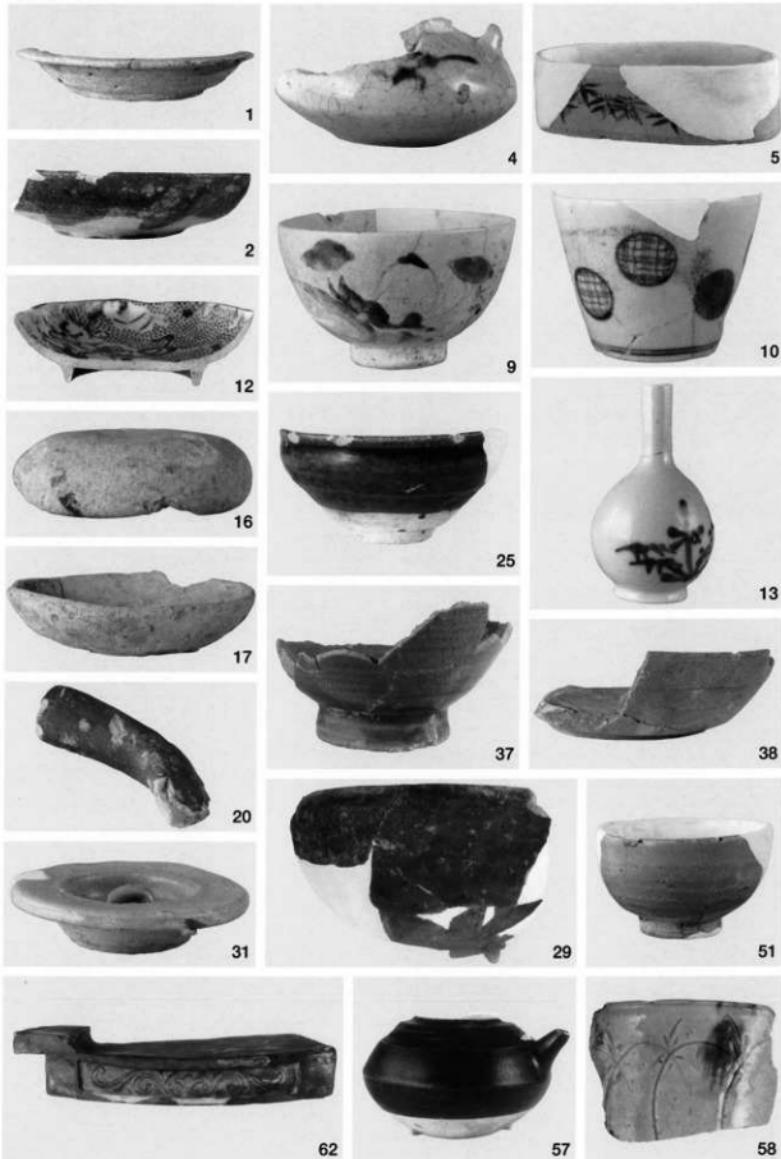


5. B-1区SE-03全景（北から）



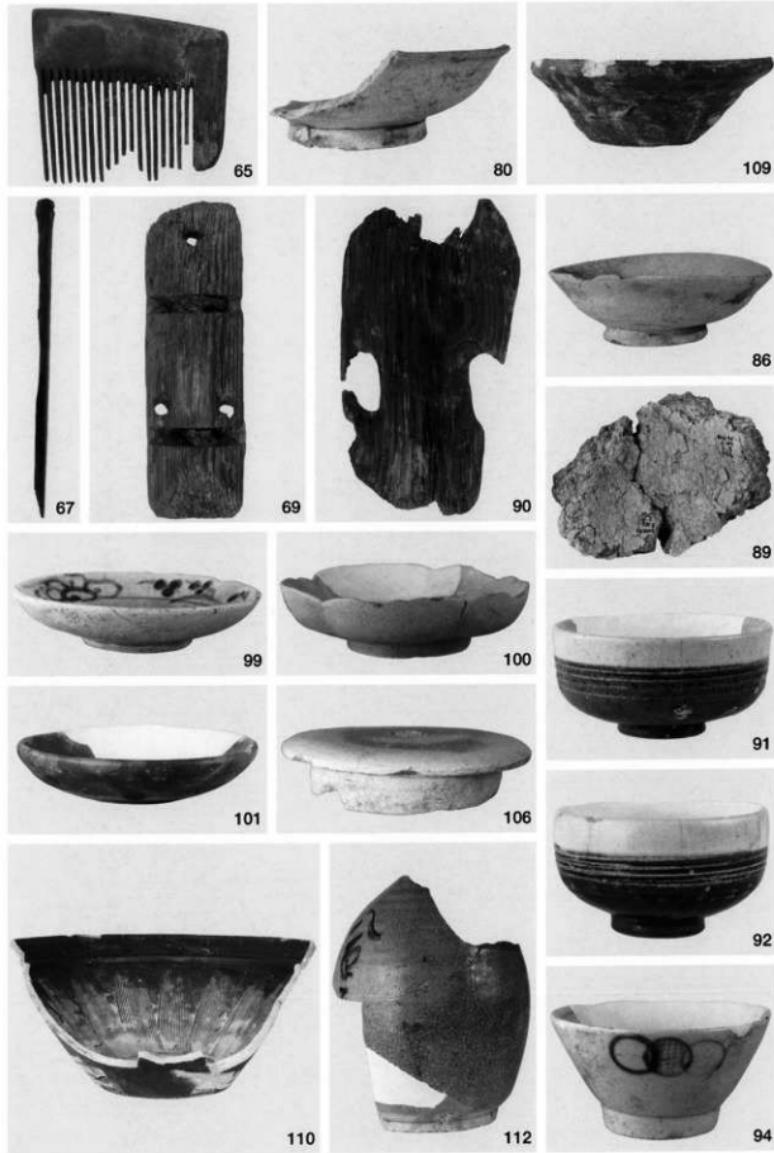
6. C-2区SE-05全景（北から）

写真図版 9



出土遺物－1

写真図版10



出土遺物－2

写真図版11



出土遺物一 3

写真図版12



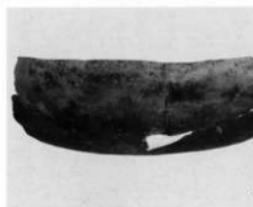
166



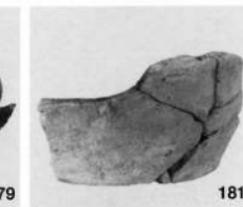
167



169



179



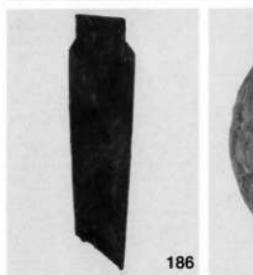
181



171



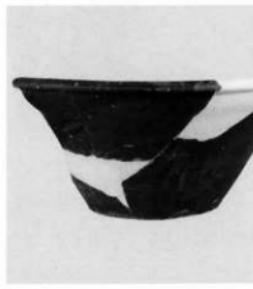
174



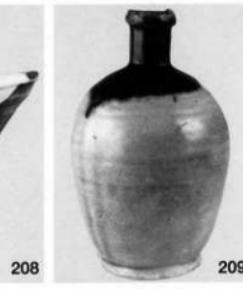
186



190



208



209



191



194



200



203



211

出土遺物一 4

写真図版13



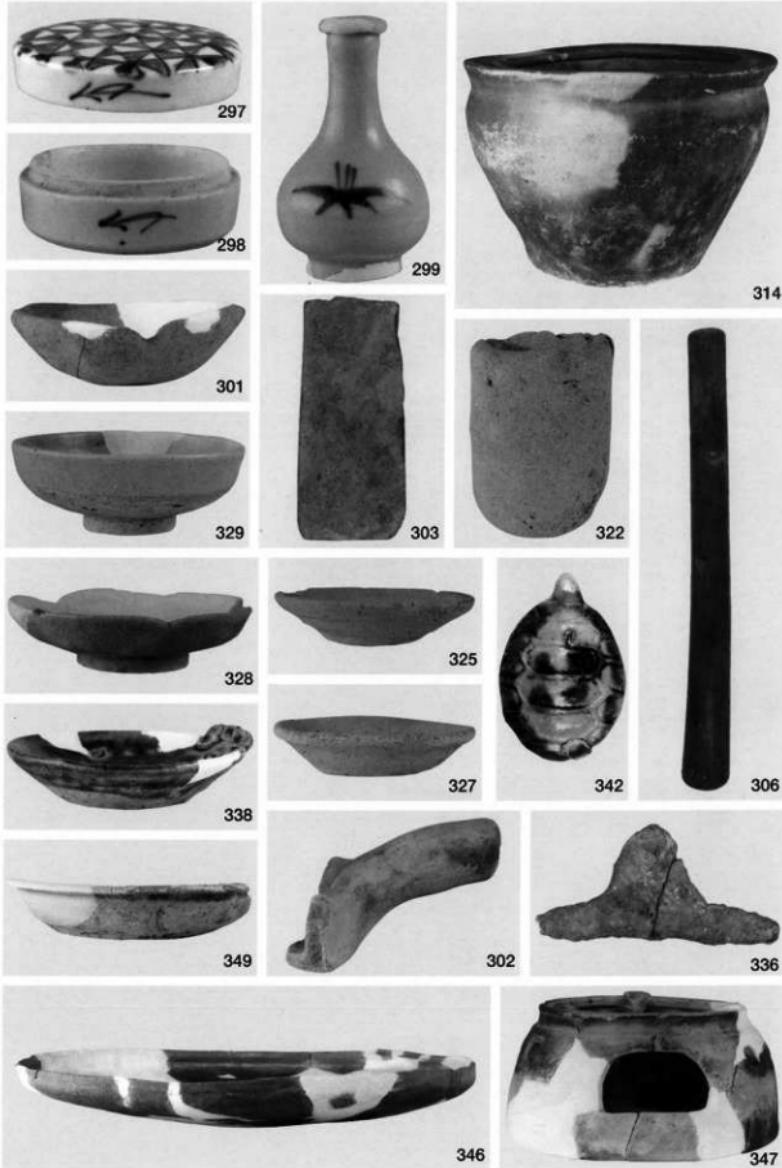
出土遺物-5

写真図版14



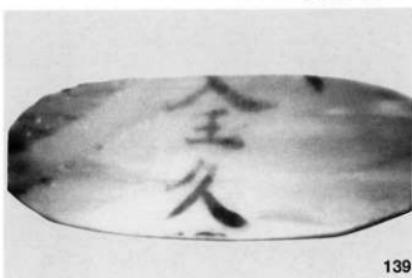
出土遺物一 6

写真図版15



出土遺物-7

写真図版16



出土遺物－8

豊橋市埋蔵文化財調査報告書第86集

吉田城址（Ⅳ）

2006年3月31日

発行 豊橋市教育委員会©  
美術博物館

〒440-0801 豊橋市今橋町3番地の1

印刷 大陽出版株式会社